

秋 田 市

地 ノ 内 遺 跡

— 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書 —

同和住研工業株式会社
1997.3 太平不動産株式会社
秋田市教育委員会

序

本書は、秋田市添川地内に所在する地ノ内遺跡の発掘調査報告書です。

当社では秋田市添川字地ノ内に宅地造成計画をしました。しかし、予定地内には地ノ内遺跡が存在することから秋田市教育委員会と協議を重ね、工事着工前に発掘調査を実施することとし、平成8年5月下旬から11月上旬に分布調査と発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代前期及び中期の竪穴住居跡、土壙等が確認され、集落の一部であることが判明いたしました。

本報告書はその調査結果をまとめたものであり、文化財保護のために広く活用していただければ幸いに存じます。

刊行にあたり、発掘調査にご尽力をいただきました秋田市教育委員会をはじめ、関係各位の皆様に深く感謝を申しあげます。

平成9年3月

同和住研工業株式会社
代表取締役 二田悟郎

太平不動産株式会社
代表取締役 加藤忠武

例　　言

- 1 本報告書は、宅地造成に伴う地ノ内遺跡（秋田市添川字地ノ内）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本報告書の執筆は、菅原俊行、石郷岡誠一の助言を得て西谷 隆、安田忠市が行った。
- 3 発掘調査、整理作業の過程で、下記の各氏より指導、助言を賜った。（敬称略）
富樫泰時、武藤祐浩（秋田県教育庁文化課）、庄内昭男、高橋忠彦（秋田県埋蔵文化財センター）
- 4 遺跡の地形・地質は、「土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう 秋田 経済企画庁総合開発局国土調査課 1966年3月」を参照した。
- 5 遺構の平面図及び土層断面図中のPは土器（片）、Sは石（礫）を示す。また、土器実測図で断面を黒塗したものは須恵器及び中世陶器である。
- 6 発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序

例言

調査の概要	1
調査に至るまでの経過	1
調査期間と体制	1
調査の方法と経過	1
未踏者	2
遺跡の位置と地形・地質	2
遺跡の概観	2
周辺の遺跡	2
調査の記録	8
基本土層	8
遺構と遺物	8
遺構外出土土器	96
土製品	98
遺構外出土石器	98
まとめ	118



遺跡全景（南→）



5号住居跡（東→）

調査の概要

調査に至るまでの経過

同和住研工業株式会社と太平不動産株式会社は秋田市派川字地ノ内地区に大規模宅地開発を計画した。開発区域は周知の遺跡にはなっていないが、旭川左岸の標高約20mの段丘周辺は遺跡が存在する可能性があることから、同和住研工業株式会社と太平不動産株式会社は秋田市教育委員会と遺跡の分布調査について事前協議を行った。そして、平成8年3月14日に遺跡分布調査及び遺跡範囲確認調査を秋田市教育委員会に依頼された。

秋田市教育委員会は、調査の依頼を受けて平成8年5月20日から24日まで遺跡分布調査及び遺跡範囲確認調査を実施した。調査の結果、縄文時代の遺構と遺物が確認され、発掘調査面積を確定した。そして、開発計画の変更や当該遺跡の保護について再び協議した結果、開発計画の変更は不可能であること、工事着工時期が迫っていること、用地買収が済んでいないことなどから発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することとした。

調査期間と体制

調査期間 平成8年6月17日～11月7日

調査面積 約3,000m²

調査主体者 同和住研工業株式会社、太平不動産株式会社

調査担当者 秋田市教育委員会

調査体制 秋田市教育委員会文化課

課長 菅原 俊行

課長補佐 石郷岡 誠一

主査 西谷 隆（調査担当）

主査 安田 忠市（調査担当）

主事 佐々木 清

調査作業員 舟木 健、工藤小一、佐藤勇雄、佐藤耕藏、高津公洋、工藤ミエ、金子ユキ子、石井ヤエ、鎌田克子、鎌田千代、小林アイ子、小林嗣子、熊沢トシ子、佐田孝子、佐藤イト子、佐藤キクノ、佐藤静子、佐藤スズ、佐藤テツ、佐藤トシ子、佐藤芳枝、鶴山京子、山田綾子、若狭キミ子、若狭栄子、渡辺君子、渡辺リサ、三浦光子、鈴木博子、鈴木ルミ子、佐々木たき子、佐々木哉子

整理作業員 鈴木博子、鈴木ルミ子、佐々木たき子

事務員 萩原富貴子

調査の方法と経過

調査区に任意の点1ヶ所を選定し、この基準点から南北基線とこれに直交する東西基線に4×4mのグリッドを設定した。グリッドは東西方向（X軸）に東から2文字のアルファベット（L S、L T、L U・・・）を、南北方向（Y軸）に南から2桁の数字（30、31、32・・・）を配し、その組合せをグリッド名とした。

発掘調査は6月17日から11月7日まで実施した。6月17日、調査を開始する。重機による表土除去作業（21日まで）。19日、機材を撤入する。6月20日、本日より作業員が入る。機材の点検及びベルトコンベアを設定する。並行してグリッド設定及びレベルの移動を行う。6月21日、グリッド掘りを開始する（7月26日まで）。7月25日、遺構調査を開始する。10月19日、平面実測を開始する。10月22日、航空測量を実施する。10月23日、遺跡全景写真撮影を実施する。10月31日、機材を撤去する。11月7日、平面実測を終え調査を終了する。

來跡者

富樫泰時、佐藤文義、佐藤 淳、石郷岡千鶴子、武藤祐浩（秋田県教育庁文化課）、庄内昭男、高橋忠彦、藤澤昌、高橋 学、伊藤 攻（秋田県埋蔵文化財センター）、工藤嘉左衛門（秋田県議会議員）、荻原 守（秋田市議会議員）、バウシ・イローナ（国学院大學大学院生）、張 正華（中国蘭州市）、五十嵐芳郎、天野莊平（秋田考古学協会）、小玉邦典（南秋田郡飯田川町文化財保護審議会委員）、鈴木 功

遺跡の位置と地形・地質

遺跡の位置

遺跡は秋田市の北東部にあたる秋田市添川字地ノ内に所在する。秋田市街からは主要地方道秋田・八郎潟線の添川字添川にある添川橋の手前約250mの地点で、旭川左岸の標高約20mの段丘上に位置する。

北緯 $39^{\circ} 44' 55''$ 、東経 $140^{\circ} 8' 23''$ で、JR東日本奥羽本線秋田駅から北へ約4.5km、日本海からは約7km内陸へ入った地点である。また、遺跡の北側約250mには旭川が流れている。

遺跡の地形・地質

遺跡周辺の地形は、地形区分によれば山地・丘陵及び低地に分けられる。遺跡の東部は出羽山地の一部である仁別山地に、北部は仁別山地の西側に連なった上新城丘陵に、さらに南部は上新城丘陵と同様に仁別山地に連なった羽黒山丘陵に画される。そして、この両丘陵に挟まれた旭川上流から秋田市街地北部にかけての比較的幅の狭い低地が旭川低地である。

両丘陵の地質は、第三紀中新世の暗灰色泥岩（船川層）、鮮新世に属する青色砂質シルト岩（猿岡層）、青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、第三系の青灰色泥岩の互層（桂根層）と同時期の安山岩類（娘山安山岩類や羽黒山安山岩）などから構成されている。羽黒山丘陵の谷密度は $30\sim50/\text{km}$ で、起伏量は $50\sim100\text{m}/\text{km}$ となっている。構成層は最大径10cmの様を含む砂礫層である。羽黒山丘陵の谷沿いには数段の段丘が分布しているが、遺跡はこの羽黒山丘陵の西端部と旭川低地の境界部の段丘上に立地している。遺跡の所在する段丘の標高は219～20mであり、旭川の現河川面（標高12m）との比高差は7～8mである。

遺跡の概観

遺跡は羽黒山丘陵の西端部に張り出した舌状台地に立地し、遺跡の範囲は南北120m、東西150mと推定される。

調査区の南西から中央部にかけては平坦で、北西から北東部にかけては緩斜面である。標高は約20mで、現水田面である冲積低地との比高差は約5mである。

調査の結果、縄文時代前・中期の竪穴住居跡、竪穴造構、土壙及び弥生時代前期の土壙等が確認された。隣接する遺跡は南西側約400mに縄文時代の「地ノ内1遺跡」、北東側約600mに縄文時代晚期及び平安時代の「戸平川遺跡」、北側約300mに縄文時代の「飛鳥田遺跡」等の関連遺跡が所在する。

周辺の遺跡（第2図）

秋田市では昭和61年から63年にかけて遺跡評価分布調査を行い、360カ所の遺跡が確認されている。この分布調査に基づいて旭川流域およびその周辺の遺跡について概観してみたい。

旧石器時代は1遺跡の確認で、「古城廻II遺跡(23)」から石刀を1点採集している。

縄文時代については、「戸平川遺跡(16)」は平成7、8年に秋田県教育委員会により調査が行われ、晚期中葉の墓域と掘立柱建物跡、さらに沢部分より多量の土器（菱形土器、皿形土器等）及び石器等が出土している。「蟹子



第1図 遺跡の位置

0 2,000m



第2図 周辺の遺跡

番号	遺跡名	西 東 南 北	種 別	時 代	遺 跡	古 墓
1	万葉山天神寺	秋田市東三郷裏10-1	社 寺	古 世	保留定重文化財(建造物)、秋田市定史跡	
2	山崎 焼	外丸山山崎	墓 邦	中 世	男・雅野	
3	大 墓 焼	外丸山山崎、山崎	遺物包含地・墓群	鐵文・中世	鐵文土器、男・雅野、空船、土器	
4	大 墓 焼	外丸山山崎	遺物包含地	鐵文	鐵文土器	
5	三ノ塚 焼	外丸山三ノ塚	遺物包含地	鐵文・奈良・平安	鐵文土器、赤褐色土器	
6	南 沢 焼	外丸山南沢	遺物包含地	鐵文・奈良・平安	鐵文土器、直筒器	
7	大 桧 木 I	手形字大桿木	墓 城	鐵文	土器堆・鉢形堆、ビット、鐵文土器	
8	大 桧 木 II	手形字大桿木	遺物包含地	中 世	中型陶器	
9	高 集 台	新藤田山高集台	遺物包含地	鐵文	鐵文土器、石鏡・石點・スクレイバー	
10	中 山 台	新藤田山中山台	遺物包含地	奈良・平安	直筒器	
11	千野山窯跡	手形字千野	窯 路	奈良・平安	半地下式窑洞2基、瓦器等(环・皿・便・鉢等)	
12	猪ノ内 I	西川字猪ノ内	遺物包含地	鐵文	鐵文土器	
13	猪ノ内 II	西川字猪ノ内	遺物包含地	鐵文	鐵文土器	
14	猪ノ内 館	西川字猪ノ内	墓 館	中 世	男・雅野、直筒器、空瓶	
15	天 鹿 館	西川字天平川	墓 館	中 世	男・雅野、空瓶、直筒器	
16	戸 平 川	西川字戸平川	墓城・焼て場	鐵文・平安	獨立柱建物跡、土器皿、鐵文土器、赤褐色土器	
17	猪 鳴 田	西川字鳴田	遺物包含地	鐵文・平安	鐵文土器・赤褐色土器	
18	廣 子 武	西川字廣子武	墓道跡	鐵文・平安	船穴式石室、土器・土器埋没遺構、鐵文土器・赤褐色土器	
19	木 田	西川字木田	遺物包含地	奈良・平安	直筒器、赤褐色土器	
20	猪 川 館	西川字古賀館	墓 館	中 世		
21	古賀館窯跡	西川字古賀	窯 鋼	奈良・平安	瓦・漆器等	
22	古 賀 館 I	西川字古賀	遺物包含地	中 世	赤褐色土器	
23	古 賀 館 II	西川字古賀	遺物包含地	前古・中古・平安	石器・須恵器・赤褐色土器・拂序	
24	古 賀 館 館	西川字古賀	遺物包含地	平 安	地上通構	
25	鶴 木 台	西川字鶴木台	遺物包含地	鐵文・奈良・平安	鐵文土器・直筒器・赤褐色土器	
26	湯 热 台 I	西川字湯熱台175	遺物包含地	鐵文・奈良・平安	鐵文土器・石罐・直筒器・赤褐色土器	
27	湯 热 台 II	西川字湯熱台	遺物包含地	鐵文	鐵文土器・石器	
28	湯 热 台 III	西川字湯熱台30	遺物包含地	奈良・平安	土器器・須恵器	
29	湯 热 台 IV	西川字湯熱台	遺物包含地	鐵文・奈良・平安	鐵文土器・石器・須恵器	
30	井 田	西川字井田	遺物包含地	奈良・平安	須恵器	

沢遺跡(18)」は平成6年に秋田市教育委員会(宅地造成に伴う緊急発掘調査)と秋田県教育委員会(東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査)により調査が行われ、繩文時代前期後葉から中期前葉にかけての集落跡が検出されている。「湯沢台II遺跡(27)」は中期の遺跡で、土器及び石器を採集している。

弥生時代については、この地域ではいまのところ確認されていない。

古代については、「手形山塚跡(11)」は昭和49年に秋田考古学協会により調査が行われ、8世紀末から9世紀中にかけて須恵器を焼成した登窯が2基確認されている。「古城廬窯跡(21)」は平成5年に秋田市教育委員会が秋田市史編さん事業の一環として調査が行われ、平安時代前半の登窯が1基確認され、瓦・須恵器等が出土している。いずれも西方約5.5kmに位置する秋田城跡と密接な関係が伺われる遺跡である。「蓬田遺跡(28)」からは土師器壺・土師器鉢・須恵器・土製品の破片を採集している。

中世については、「山館館(2)」は旭川右岸の標高約30mに位置する。館は単郭で、南・東・北側に腰郭が認められる。「大堤館(3)」は旭川右岸の標高約45mの丘陵を利用した館で、郭・腰郭・空堀・土塁が認められる。

「添川館(20)」は旭川右岸の標高約40mにあった旧添川小学校跡地と考えられるが、校舎建設の際に破壊されている。「地ノ内館(14)」は旭川左岸の標高約90mに位置する。館は単郭で、西側に2段の腰郭と、北・南側に帯郭、北側に空堀が認められる。「火船(15)」は旭川左岸の標高約100mに位置し、「地ノ内館」とは峰続きである。館は頂部と、ここから派生する6ヶ所の尾根を利用した連郭からなり、郭・腰郭・空堀・堅堀が認められる。本館は旭川流域では最も規模の大きい館跡である。

近世については、「万固山天徳寺(1)」の龍門・山門・本堂・書院・墨屋が国指定重要文化財、境内全域が県指定史跡となっている。

註1 「秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書」 秋田市教育委員会 1989年3月

註2 「秋田市湯沢字湯沢台」 五十嵐芳郎 遺跡とその資料Ⅲ 1965年 秋田市とその周辺 1965年
「環状 第4号」 秋田県埋蔵文化財保護サークル「環状」 1982年3月

註3 「秋田県埋蔵文化財センター年報14 平成7年度」 秋田県埋蔵文化財センター 1996年3月
「秋田県埋蔵文化財センター年報15 平成8年度」 秋田県埋蔵文化財センター 1997年3月

註4 「秋田市蟹子沢遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書一」 秋田市教育委員会 1995年3月

註5 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX－蟹子沢遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第261号 秋田県教育委員会 1996年3月

註6 「秋田市添川字添川」 五十嵐芳郎 遺跡とその資料Ⅲ 1965年 秋田市とその周辺 1965年
「秋田市周辺の繩文晩期末と後統期の遺跡概要」 奥山潤 秋田考古学22号 秋田考古学協会 1963年9月

註7 「手形山塚跡」 秋田考古学協会 1975年2月

註8 「秋田市史叢書 I 古城廬窯跡発掘調査報告」 秋田市史編さん室 1997年3月

註9 「秋田市湯沢字蓬田」 五十嵐芳郎 遺跡とその資料Ⅲ 1965年 秋田市とその周辺 1965年

註10 「秋田県の中世城館」 秋田県文化財調査報告書第86集 秋田県教育委員会 1981年3月

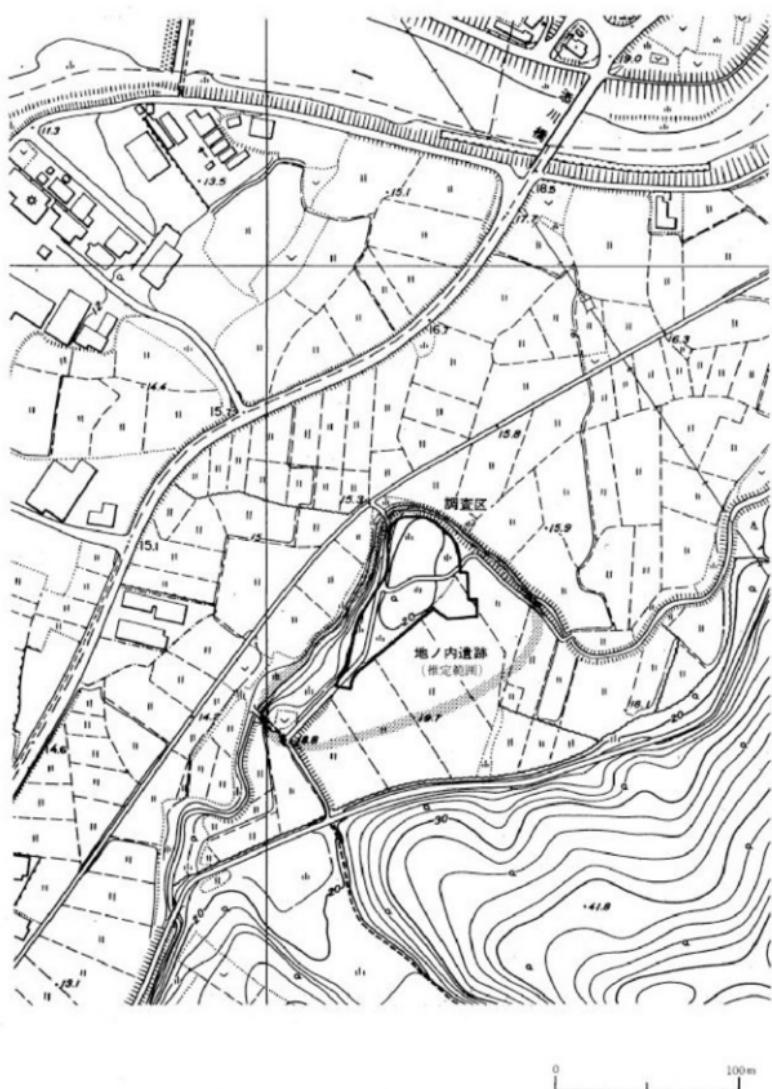
註11 註10と同じ

註12 註10と同じ

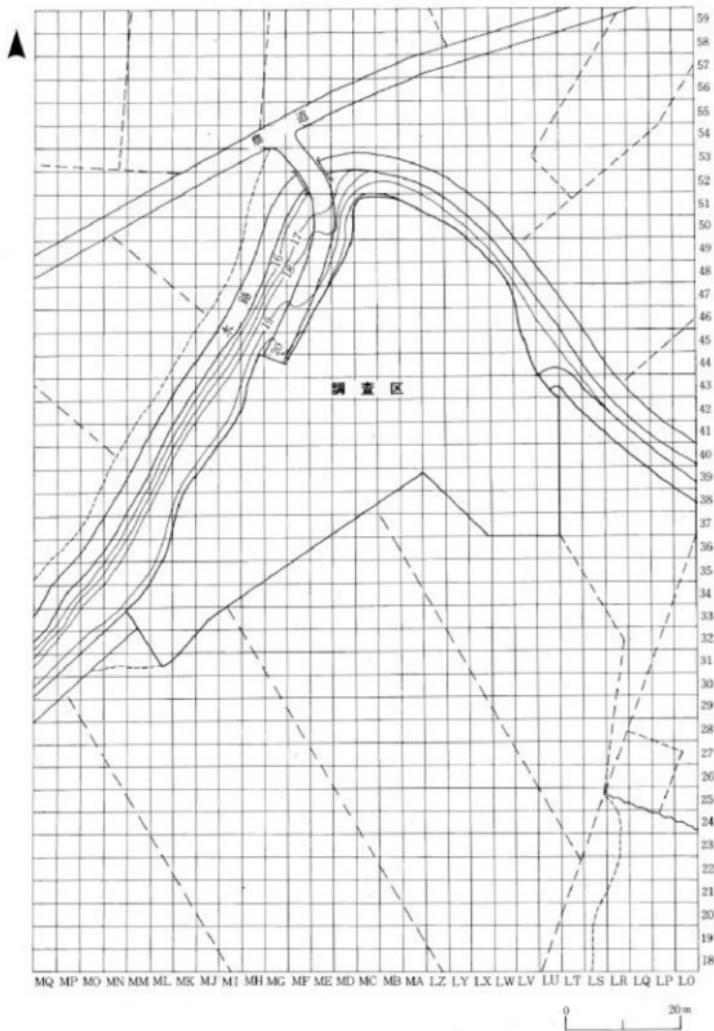
註13 註10と同じ

註14 註10と同じ

註15 「秋田県遺跡地図(中央版)」 秋田県教育委員会 1990年3月



第3図 遺跡周辺の地形



第4図 グリッド配図

調査の記録

基本土層（第5図）

基本土層は第I層 表土、第II層 黒色土（練混入）、第III層 暗黄色土、第IV層 黄褐色土（練混入）で、第II層が遺物包含層、第III層がローム漸移層、第IV層がローム層（地山）である。

I
II
III
IV

遺構と遺物

遺構は堅穴住居跡20軒、堅穴遺構9基、土壤241基で、全て地山面での確認である。

第5図 基本土層柱状図

堅穴住居跡

1号住居跡（第6図）

調査区の北側で確認され、2号住居跡に切られている。

壁は北側のみの確認で、平面形は不明である。周溝が3条認められ、内側の溝は幅約15cm、深さ5~10cm、中間の溝は幅15~20cm、深さ10~34cm、外側の溝は幅15cm、深さ5~10cmで、2回建て替えを行っており、床面の状況から拡張と考えられる。確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは約20個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は地床炉と考えられるが、床面に焼土が広く分布している。床面はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第66図9~12）

全て覆土出土の深鉢形土器である。頸部に粘土組を貼付するもの、地文のみのものである。9は粘土組に斜方向から刺突を施している。地文は9、12が撚糸文、11がLR半節斜繩文（横位回転）で、10は組紐回転と考えられる。

石器（第70図1~4）

全て覆土出土である。1、2は石匙である。いずれも旋型で、石質は硬質頁岩である。3はヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。4は削器である。1側縁に二次加工を施して刃部を作り出すもので、石質は硬質頁岩である。

2号住居跡（第6図）

調査区の北側で確認され、1号住居跡を切っている。

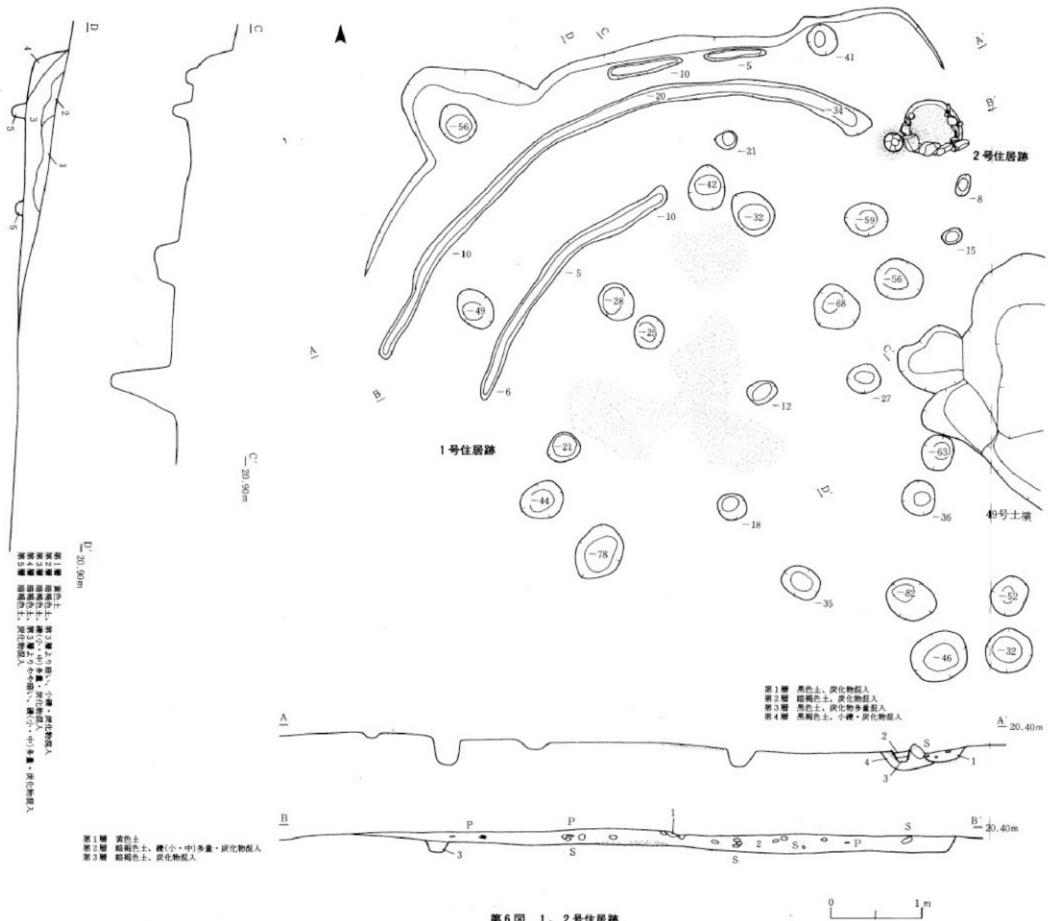
壁は北側の一部のみの確認であり、規模及び平面形は不明である。確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は土器埋設部・石組部からなる複式炉である。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は側面に石を組んでいるが、底面は黄褐色土（地山）に混入している礫が露出し、既・側面が火熱を受けている。床はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第24図1）

1は炉埋設土器である。深鉢形土器の副部で、地文は撚糸文である。

土製品（第88図1）



1は再利用土製品である。土器片を再利用したもので、梢円形を呈する。

石器（第70図5）

1は覆土出土のヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。

3号住居跡（第7図）

調査区の北側で確認された。

壁は南西側のみの確認であるが、平面形は梢円形を呈すると考えられる。また、西側に張出しが認められるが、本住居よりは新しい掘り方と考えられる。確認面からの深さは50cmで、壁は緩く立ち上がる。ピットは住居内外に5個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は地床炉が2基確認され、径40~60cmの円形を呈するものであるが、いずれも新しい掘り込みによって切られている。床はほぼ平坦で堅いが、黄褐色土（地山）に混入している礫が認められる。

出土遺物

石器（第70図6、7）

いずれも覆土出土の石鎚である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。

他に縄文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

4号住居跡（第8図）

調査区の東側で確認され、5、7号住居跡と重複し、7号住居跡を切っているが5号住居跡については不明である。

プランは長軸5.1m、短軸4.3mの梢円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは12個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる複式炉である。土器埋設部は深鉢形土器を斜位に埋設し、周辺が強く火熱を受けている。石組部は側面に石を組み、土器埋設部付近の底・側面が火熱を受けている。掘り込み部は末広がりとなって壁に接し、径約60cm、深さ15cmの掘り込みが認められる。床はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が所々に認められる。

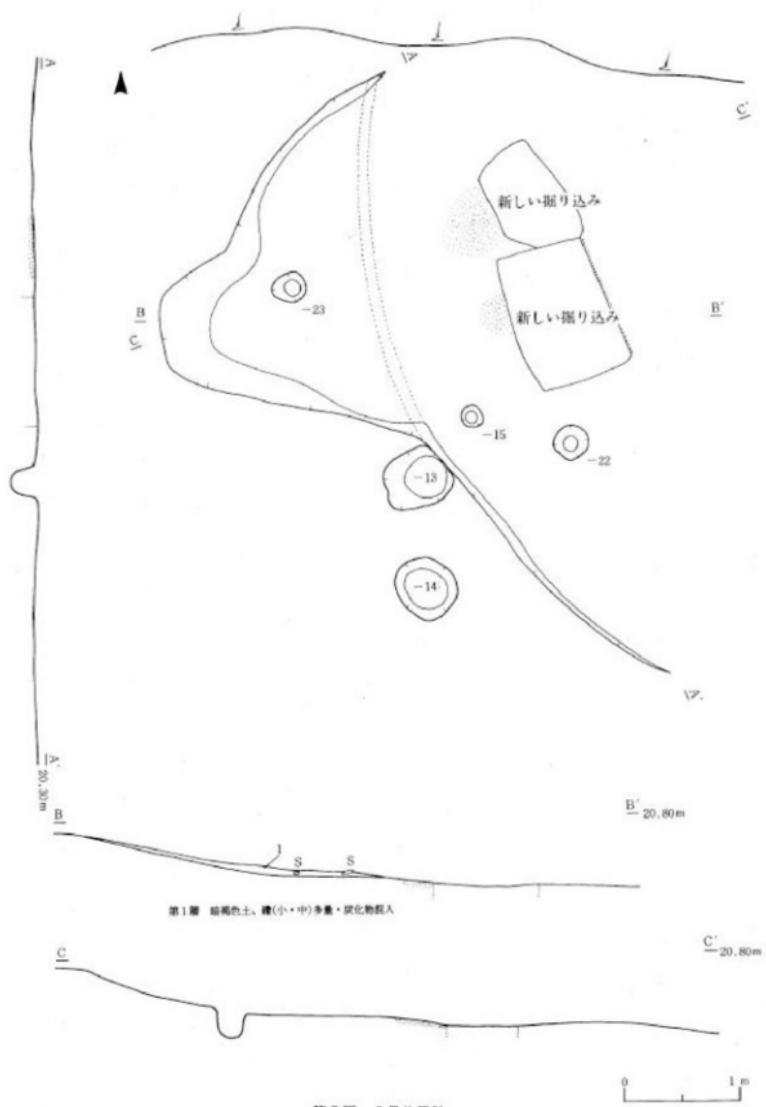
出土遺物

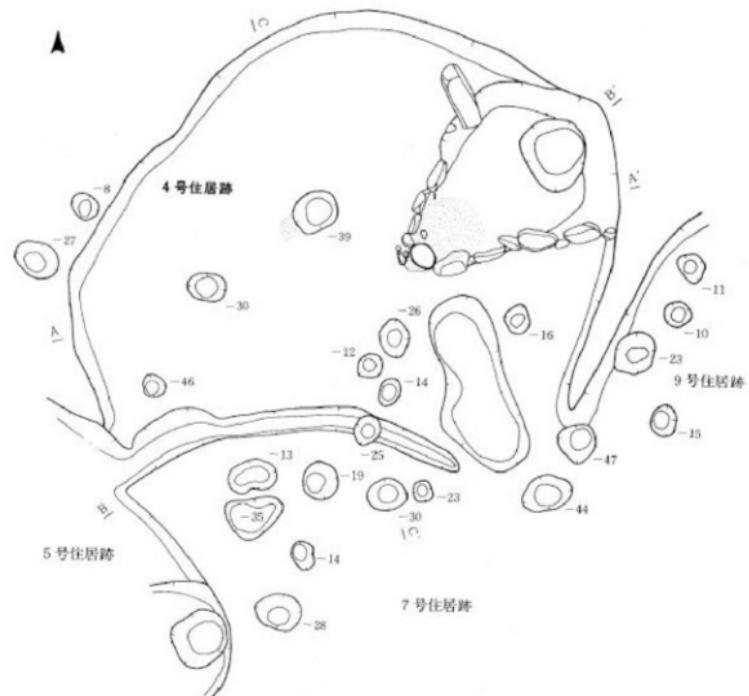
土器（第24図2~4、第66図18~22）

2は炉埋設土器、3、4は床面、18、22は炉覆土、他は住居覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、地文のみのものである。2は口縁部がやや外反する深鉢形土器で、山形口縁である。細い沈線で縦位の梢円形文と逆「U」字文との組合せで文様を作り出すものである。沈線間は幅の狭い磨消帶で、地文は燃糸文である。3は口縁部が緩く外反する深鉢形土器である。沈線区画の磨消帯が縦位方向へ展開するもので、頸部に粘土紐貼付による渦巻文を7個配置し、そこから沈線を垂下させている。渦巻文と渦巻文の間には縄文を充填させた円形文を配しているが、1ヶ所だけは円形文が認められない。地文はLR単節斜縄文（縦位方向）である。4は口縁部が内湾しながら立ち上がる深鉢形土器で、地文はLR単節斜縄文（縦位回転）である。18~21は沈線区画の磨消帯を有するものであるが、18~20は幅の狭い磨消帯が縦位方向へ展開する。22の地文は燃糸文である。

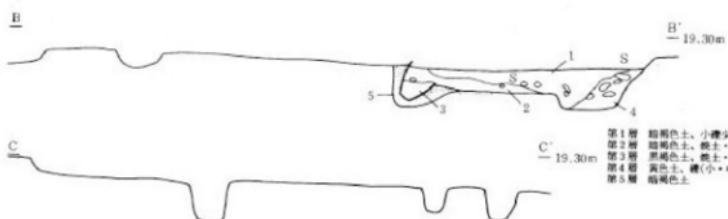
石器（第70図8、9、第74図53）

8、9は炉、53は覆土出土である。8は石鎚である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。9は削器である。両側縁に二次加工を施して刃部を作り出すもので、石質は硬質頁岩である。53は磨石である。自然礫の全面が磨れているものである。





第1層 細褐色土, 砖(小・中)多量, 化物混入



第1層 細褐色土, 小磚少量, 化物混入
第2層 細褐色土, 砖土, 化物混入
第3層 黑褐色土, 砖土, 化物混入
第4層 黄褐色土, 砖(小・中)多量混入
第5層 黄褐色土

第8図 4号住居跡



5号住居跡（第9図）

調査区の東側で確認され、4、6号住居跡と重複し、6号住居跡に切られているが4号住居跡については不明である。

プランは長軸5m（推定）、短軸4.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは9個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は石組部と掘り込み部からなる複式炉である。石組部は石を側面に組み、住居中央部寄りの底・側面が火熱を受けている。また、掘り込み部寄りの底面に細長い石を平行に組んでいる。掘り込み部は壁に接し、径50cm、深さ10cmの掘り込みが認められる。床はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第24図5、第66図23）

いずれも覆土出土の深鉢形土器である。沈線区画の磨消帯を有するもの、地文のみのものである。5は口縁部が内湾しながら立ち上がり、地文はLRL複節斜縞文（縦位方向）である。23は幅の狭い磨消帯を有する。

石器（第70図10～13）

11は炉、他は覆土出土の石礫である。基部は10が有茎、11～13は無茎で、石質は全て硬質頁岩である。

6号住居跡（第10図）

調査区の東側で確認され、5号住居跡を切っている。

プランは長軸3.3m、短軸3.1mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は石組部と掘り込み部からなる複式炉である。石組部は石を側面に組み、底・側面が火熱を受けている。掘り込み部は壁に接すると考えられ、長軸85cm、短軸50cm、深さ25cmの掘り込みが認められる。床はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が認められる。

出土遺物

石器（第70図14、第74図54）

いずれも覆土出土である。14は石礫である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。54はくぼみ石である。自然縁の両面にくぼみ部が認められるものである。

他に縞文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

7号住居跡（第11図）

調査区の東側で確認され、4号住居跡に切られている。

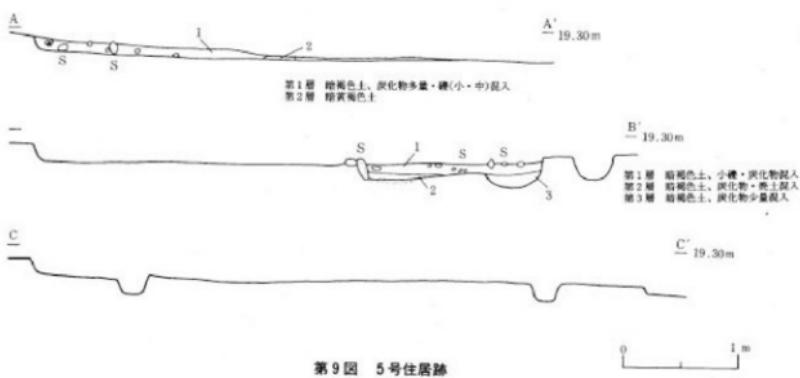
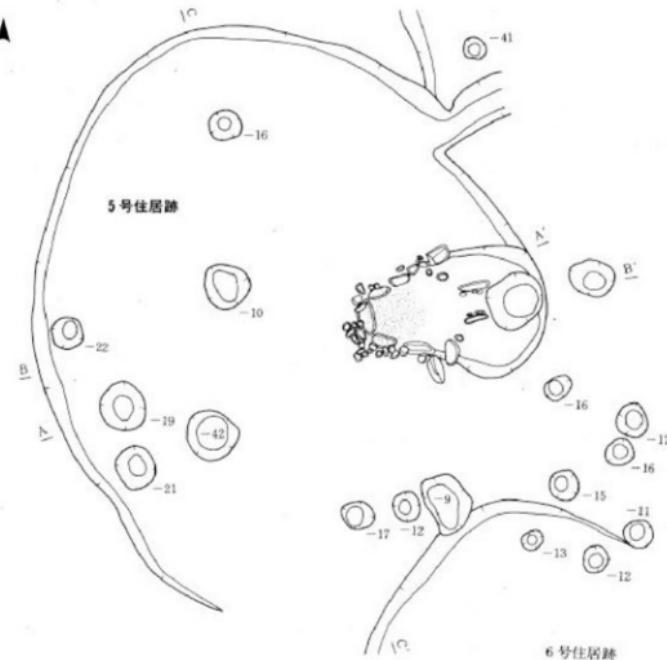
ピットと炉の確認で、規模及び平面形は不明である。ピットは10数個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は石組部、掘り込み部からなる複式炉である。石組部は住居中央部寄りに長さ45cmの川原石を据え、側面と掘り込み部側の底面に石を組み、底・側面が火熱を受けている。掘り込み部は一段浅く掘られているが、壁寄りに径70cm、深さ10cmの掘り込みが認められる。床はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が認められる。なお、炉の北側に溝跡が認められるが、本住居に関係するものは不明である。

出土遺物

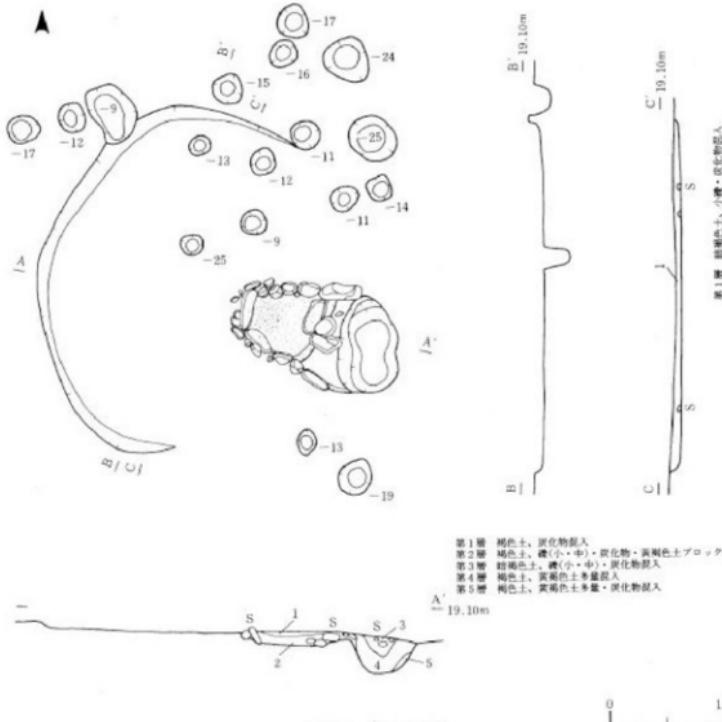
土器（第66図24）

24は炉覆土出土である。深鉢形土器の胴部で、沈線区画の磨消帯を有するものである。

8号住居跡（第12図）



第9図 5号住居跡



第10図 6号住居跡

調査区の東側で確認され、9号住居跡を切っている。

壁は西側の一組のみの確認で、規模及び平面形は不明である。ピットは9個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部、石組部からなる複式炉である。土器埋設部は埋設土器が2個認められ、石組部側の埋設土器が住居中央寄りの埋設土器を切っている。いずれも深鉢形土器を埋設し、周辺が火熱を受けている。石組部は石を側面に組んでいるが、底面は黄褐色土（地山）に混入している縁が露出し、底・側面が火熱を受けている。床は東側へ若干傾斜し、黄褐色土（地山）に混入している縁が多量に認められる。

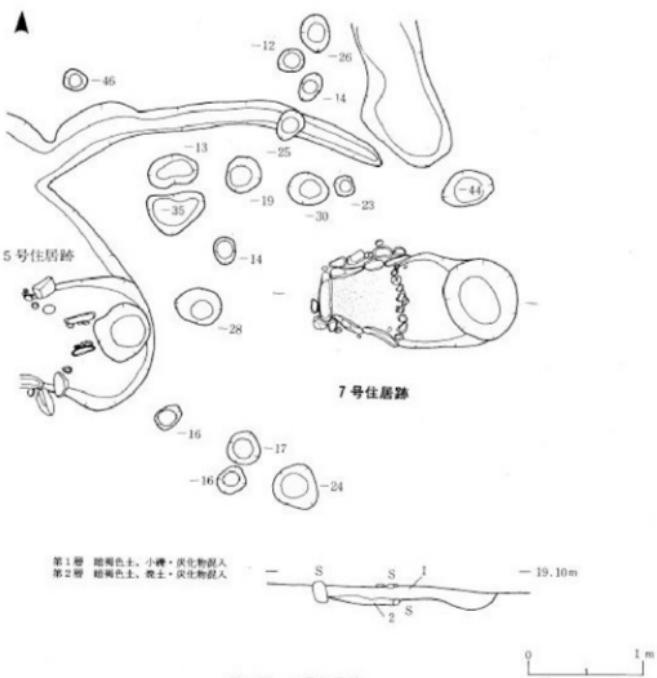
出土遺物

土器（第25図6、7）

いずれも炉埋設土器で、6が石組部側、7が住居中央部側出土である。6は口縁部が緩く内湾しながら立ち上がる深鉢形土器で、器面全体に条痕文が施されている。7は深鉢形土器の胴下部で、地文はL R半節斜綱文（継位方向）である。

石器（第70図15）

15は覆土出土の石錐である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。



第11図 7号住居跡

9号住居跡（第12図）

調査区の東側で確認され、8号住居跡に切られれている。

壁は北西側のみの確認で、規模及び平面形は不明である。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個確認されたが、主柱穴は不明である。床は東側へ若干傾斜し、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

石器（第70図16、17）

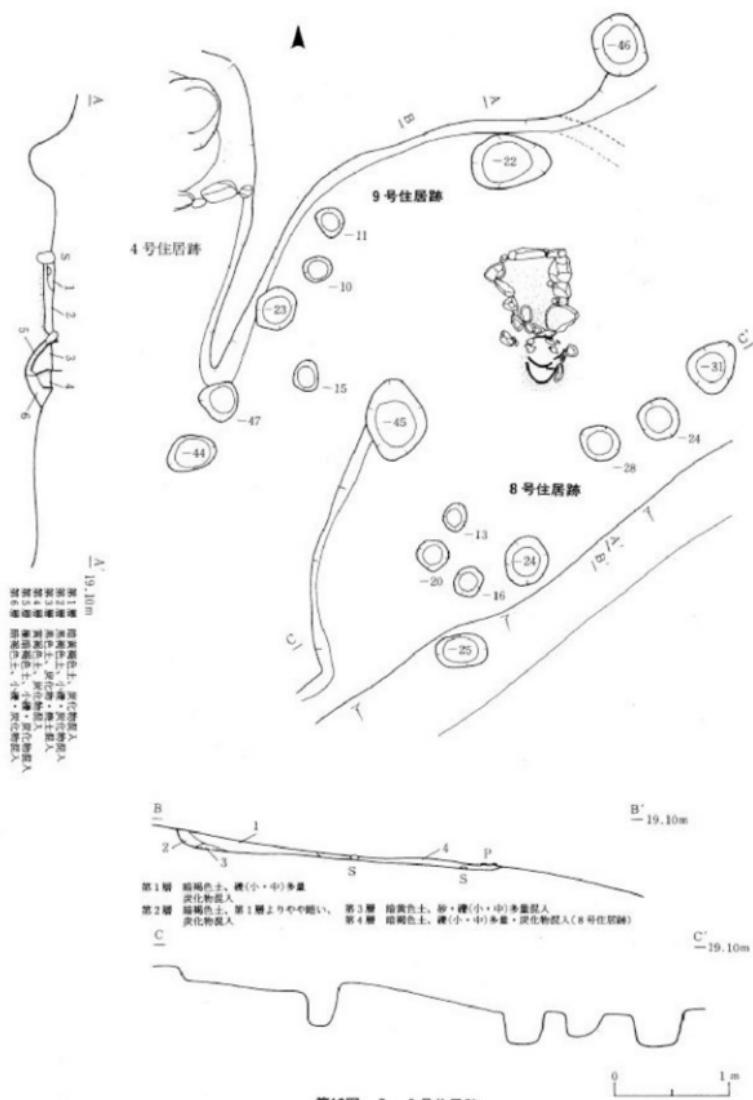
いずれも覆土である。16は石鏨である。基部は有茎で、石質は硬質頁岩である。17はヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。

他に縄文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

10号住居跡（第13図）

調査区の東側で確認された。

ピットと炉の確認で、規模及び平面形は不明である。ピットは数個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は石



第12図 8、9号住居跡

組部、掘り込み部からなる複式炉である。石組部は石を側面と掘り込み部側の底面に組み、底・側面が火熱を受けている。掘り込み部は石組部側に浅い掘り込みが認められる。床面はほぼ平坦である。

出土遺物

石器（第71図18、19）

いずれも伊覆土出土である。18は石鎚である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。19はヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。

他に縞文土器片少量出したが、小破片であり図示できなかった。

11号住居跡（第14図）

調査区の東側で確認された。

壁は南側のみの確認で、規模及び平面形は不明である。確認面からの深さは15cmで、壁は緩く立ち上がる。ビットは数個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は地床炉と考えられるが、焼土が約2mの範囲で検出された。床はほぼ平坦で堅い。

出土遺物

土器（第60図25～28）

全て覆土出土の深鉢形土器で、地文のみのものである。25は口縁部が外反し、口唇部に棒状工具で刻みを入れている。地文はLR単節斜縞文（巣位回転）であるが、一部同一原体で縦位方向へ回転している。26は撫糸文、27は不整撫糸文と考えられる。28はLR単節斜縞文（横位回転）で、綾格文が認められる。

石器（第71図20～24、第74図55、56）

23はビット、24は床面、他は覆土出土である。20は石鎚である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。21～23は石匙である。全て縦型で、石質は硬質頁岩である。24は振器である。縁辺に二次加工を施すもので、石質は硬質頁岩である。55は石鎚である。偏平な自然縁の両端に抉りを入れているもので、両面から打ち欠いている。56は半円状扁平打製石器である。ほぼ偏平な自然縁の一側縁に両面加工を施して刃部を作り出すものである。

12号住居跡（第15図）

調査区の南側で確認された。

壁は風倒木によって壊されており、規模及び平面形は不明である。ビットは9個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は地床炉で、径90cmの円形を呈し、強く火熱を受けている。床は平坦で堅いが、黄褐色土（地山）に混入している礫が所々に認められる。

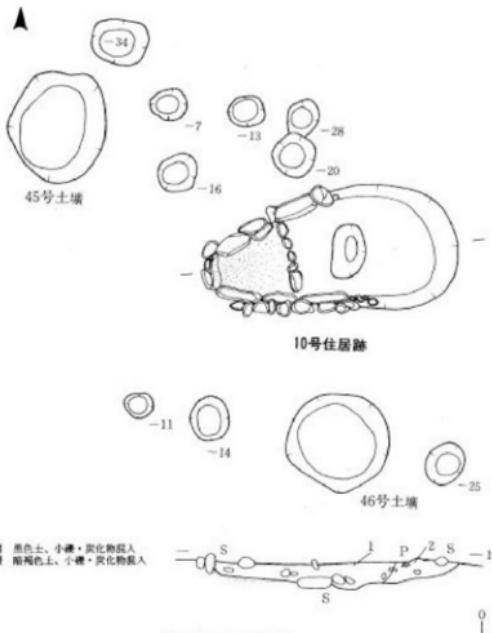
出土遺物

土器（第66図29～31）

全て覆土出土の深鉢形土器で、地文のみのものである。29は口唇部に斜方向から刺突を施すもので、地文は縦位の羽状縞文である。31は器面の内外面に縞文を施すもので、外面が0段多条のLR単節斜縞文（巣位回転）、内面がLR単節斜縞文（巣位回転）である。また、口唇部には内面と同一の縞文原体による圧痕文が認められる。

石器（第71図25～28、第74図57）

26はビット、他は覆土出土である。25、26は石鎚である。いずれも基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。27、28は石匙である。いずれも縦型で、石質は硬質頁岩である。57は磨石である。自然縁の全面が磨れているものである。



13号住居跡（第16図）

調査区の南側で確認され、37、52号土壤と重複するが新旧関係は不明である。

壁は西側のみの確認で、規模及び平面形は不明である。確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは住居内外に7個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は認められない。床はほぼ平坦で堅いが、黄褐色土（地山）に混入している礫が所々に認められる。

出土遺物

土器（第66図32）

32は覆土出土である。深鉢形土器の胴部で、燃糸圧痕によって文様を作り出すものである。

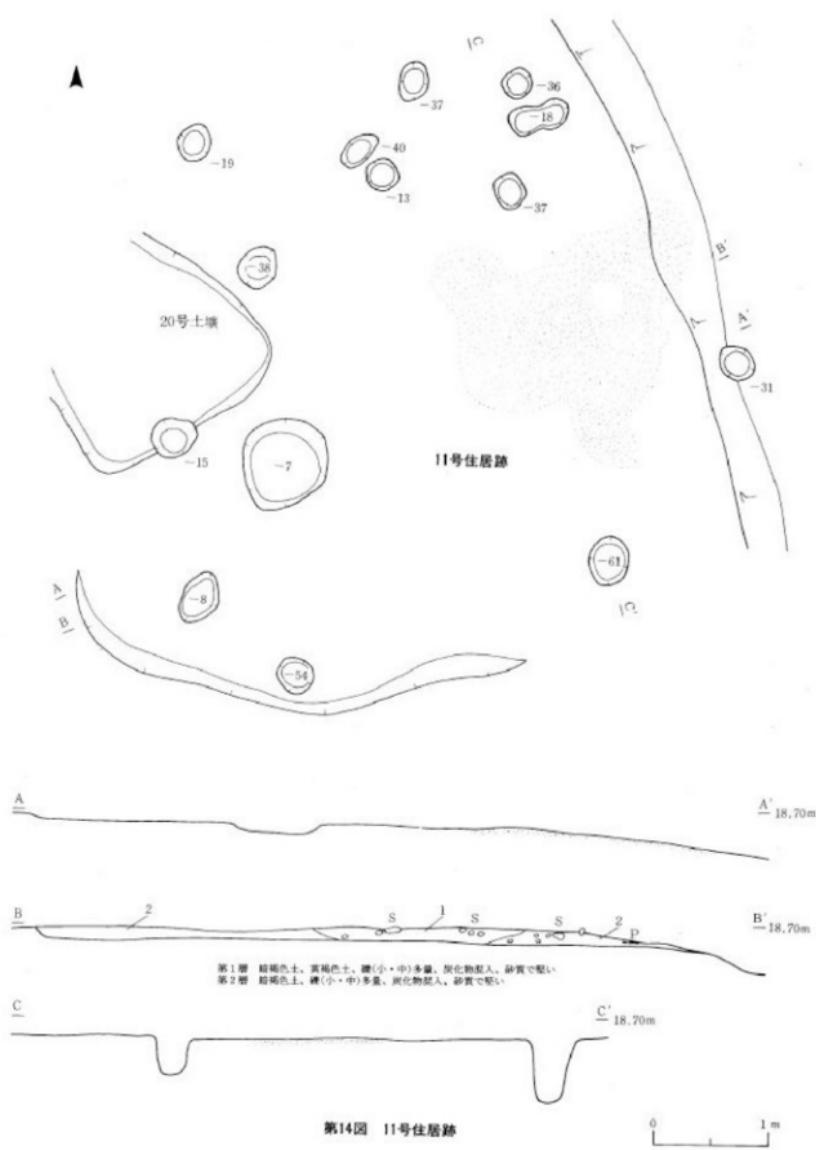
石器（第71図29、30）

いずれも覆土出土の石器である。基部は29が有茎、30は無茎で、石質は硬質頁岩である。

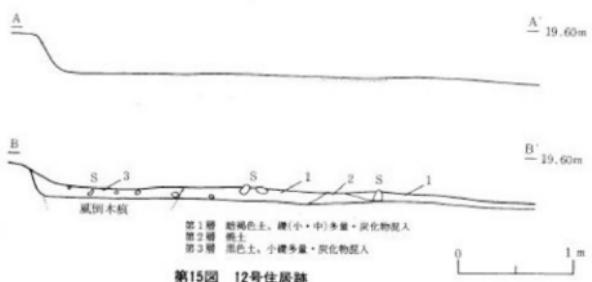
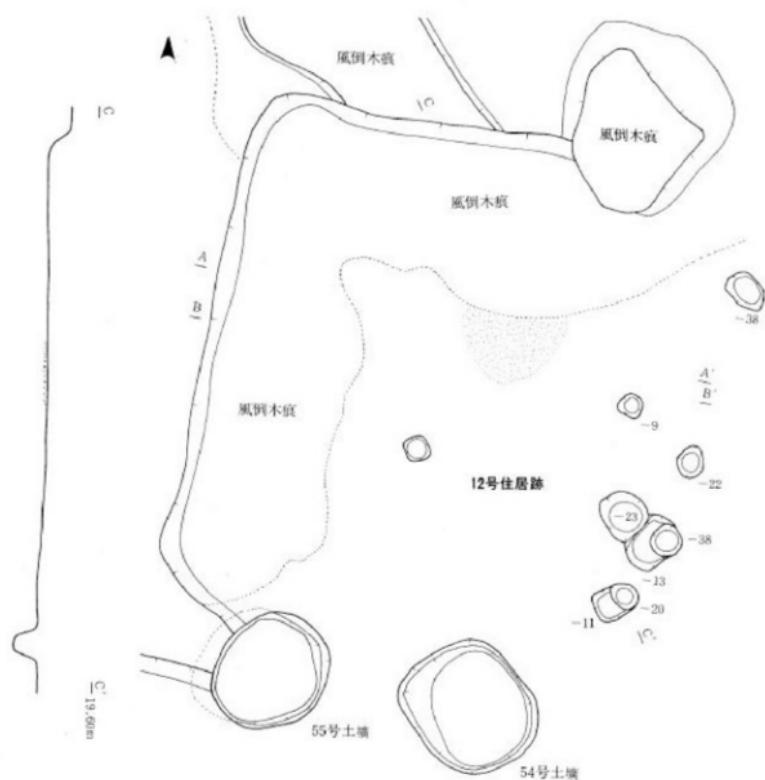
14号住居跡（第17図）

調査区の南側で確認され、38、39、40、41、58、61号土壤と重複し、38、39、58、61号土壤に切られいるが他は不明である。

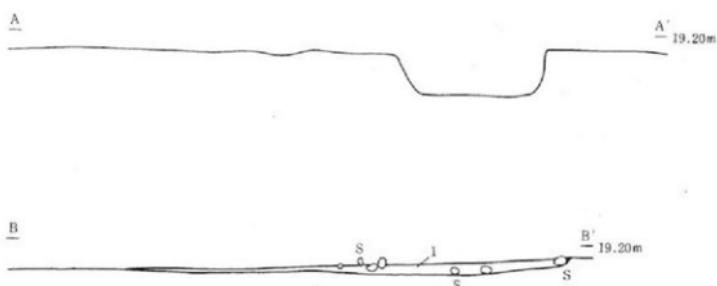
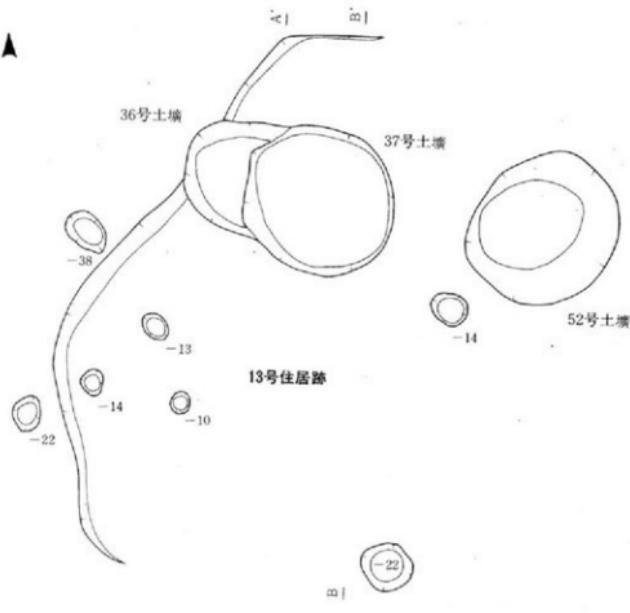
プランは長軸4.8m、短軸3.2mの橢円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピッ



第14図 11号住居跡



第15図 12号住居跡



第1層 細褐色土、礫(小・中)多量、炭化物混入

第16図 13号住居跡

トは10個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は認められない。床は平坦で堅い。また、住居中央部に径25cm、厚さ15cmで上面が平坦な石が置かれていた。

出土遺物

土器（第67図33～35）

全て覆土出土の深鉢形土器で、地文のみのものである。33は縹格文、35はL R・R L原体を用いた非結束羽状繩文が施される。34はL R単節斜彫文（横位回転）で、胎土に纖維が混入している。

石器（第72図31～33、第74図58）

全て覆土出土である。31は石匙である。縦型で、石質は硬質頁岩である。32はヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。33は石剣である。断面が板状をなすもので、破損している。石質は粘板岩である。58は石皿である。中央部が若干くぼみ、よく磨れている。

15号住居跡（第18図）

調査区の中央部で確認され、78、79、86、90、91、94～98号土壤に切られ、16号住居跡を切っている。

壁は北西側のみの確認で、長軸は不明であるが短軸は5mと推測され、平面形は梢円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは15～25cmで、壁は緩く立ち上がる。ピットは4個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は認められない。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第67図36～38）

全て覆土出土の深鉢形土器で、地文のみのものである。36は不整擦糸文、37は撚糸文で、38には縹格文が認められる。

16号住居跡（第19図）

調査区の中央部で確認され、15号住居跡、70、71、76～86、90、91、94号土壤に切られ、92、93、103～109号土壤を切っている。

壁は北側のみの確認で、規模は不明であるが、平面形は梢円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは15cmで、壁は緩く立ち上がる。炉は地床炉で、径1mの円形を呈し、強く火熱を受けている。床はほぼ平坦である。

出土遺物

石器（第75図59）

59は覆土出土の石鍤である。偏平な自然礫の両端に抉りを入れているもので、両面から打ち欠いている。

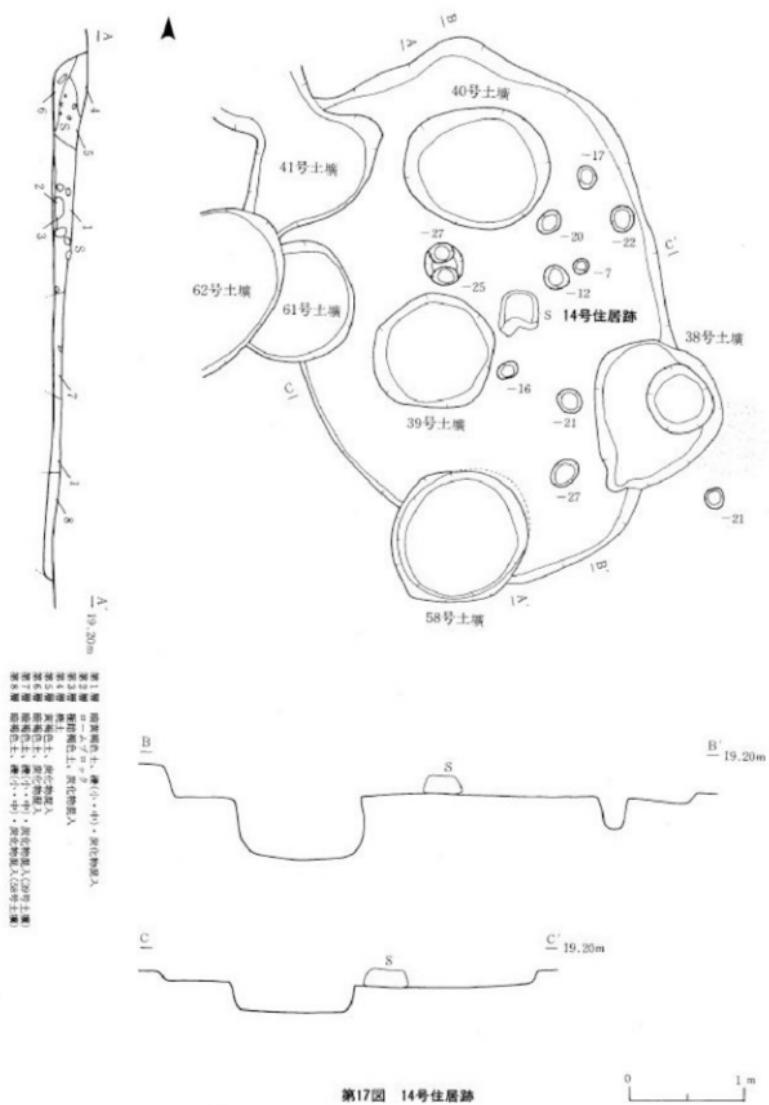
17号住居跡（第20図）

調査区の南側で確認され、54、142、143、146～148号土壤と重複し、143号土壤に切られているが他は不明である。

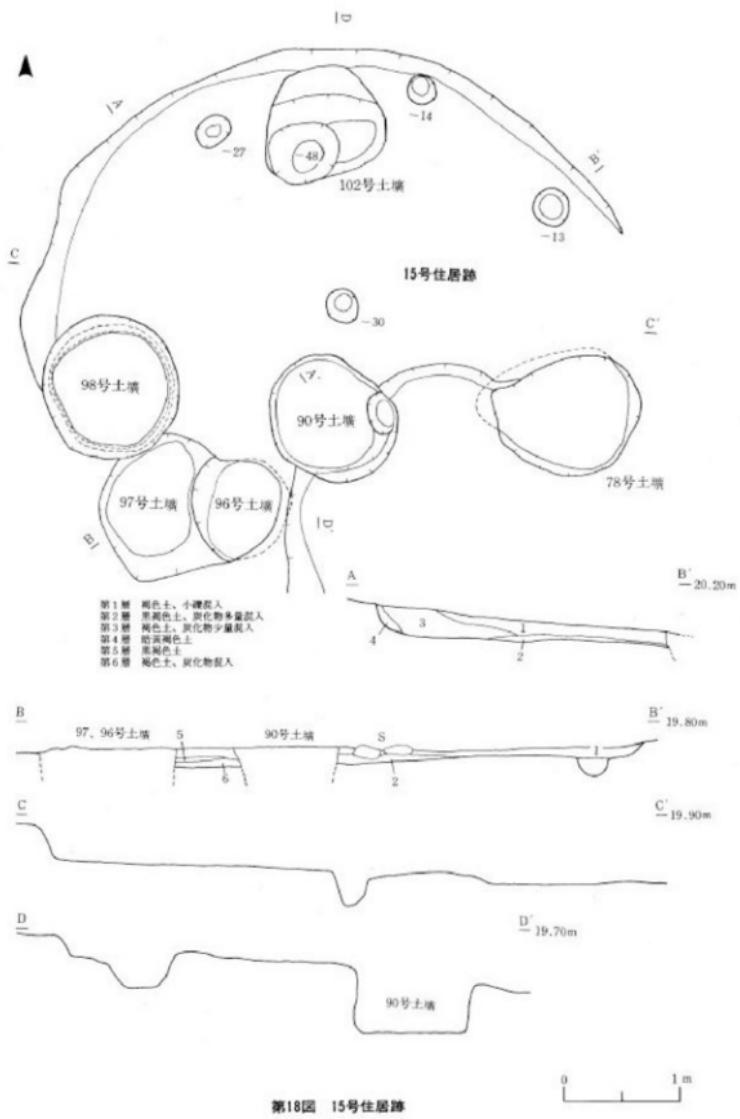
壁は西半分のみの確認で、長軸は不明であるが短軸は6.7mである。平面形は梢円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数確認されたが、主柱穴は不明である。床面に焼痕が数ヶ所認められ炉を特定することができないが、住居長軸線上に地床炉が数基作られていたと推測される。床はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

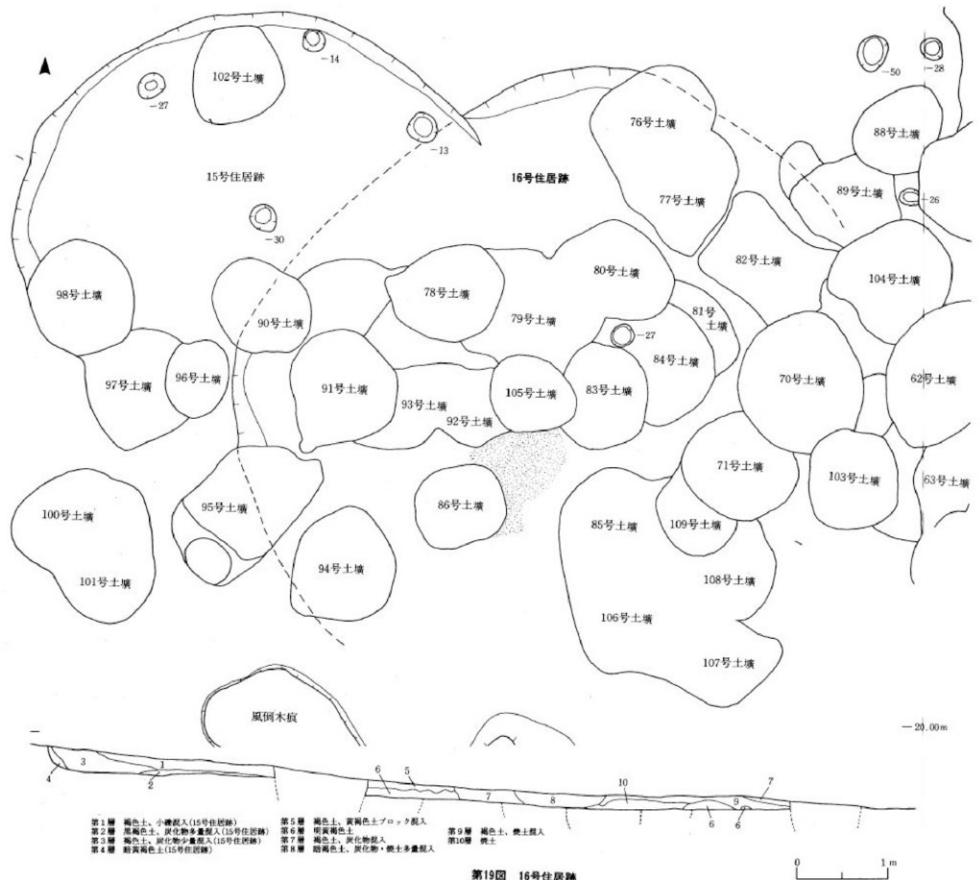
土器（第67図39～45）

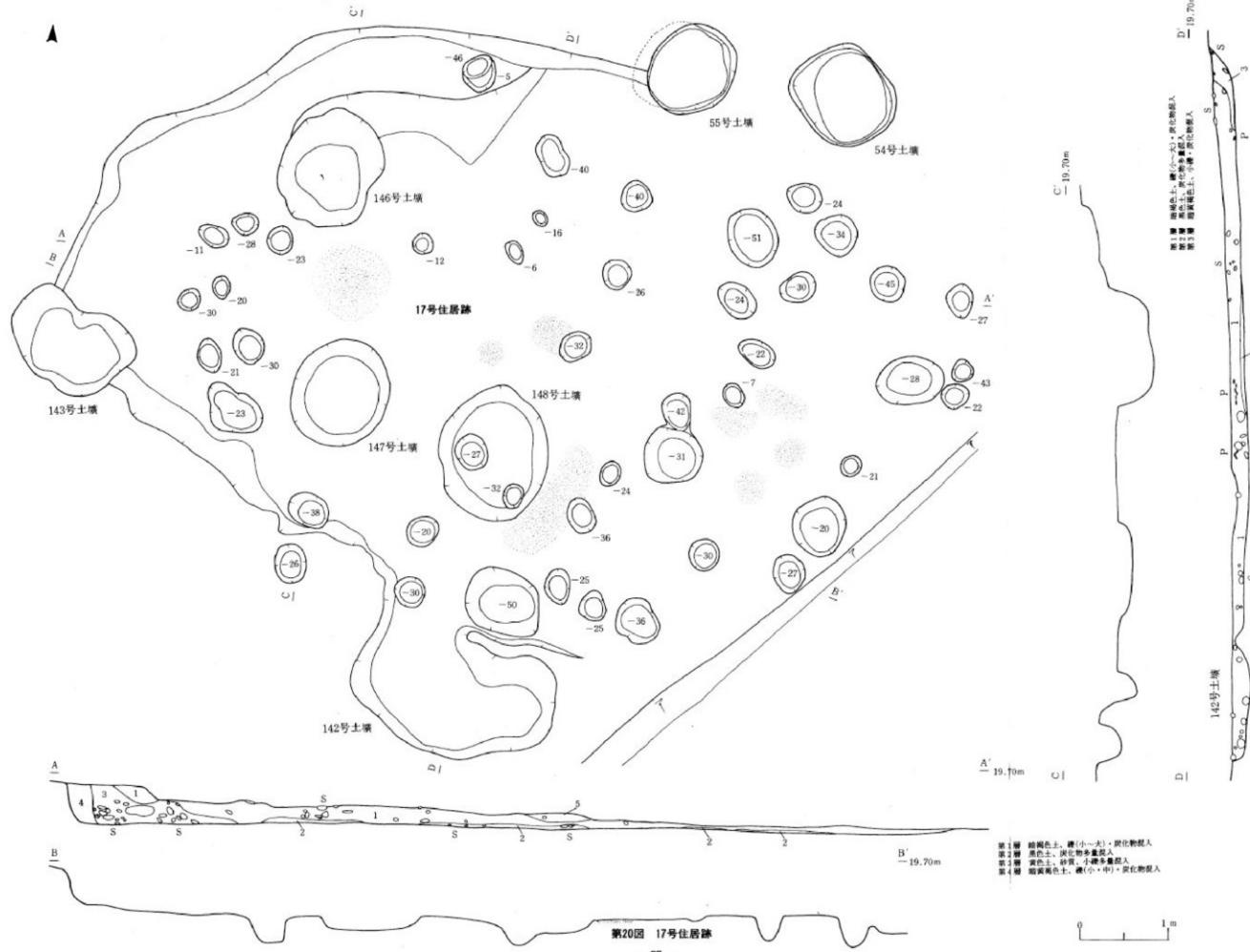


第17図 14号住居跡



第18図 15号住居跡





第20図 17号住居跡

全て覆土出土の深鉢形土器である。39は内外面に網文を施すもので、内外面に綾格文が認められる。40は不整撚糸文が施され、口唇部に2個1対の小突起が付く。41～43は綾格文が認められる。44は口縁部に撚糸圧痕が施され、その下に斜方向へ沈線が2条認められる。45は沈線で鋸歯状の文様を施すもので、地文はL R 単節斜縞文（横位回転）である。

石器（第72図34～39）

全て覆土出土である。34は石鏃である。基部は有茎で、石質は硬質頁岩である。35～37は石匙である。35、36は橢型、37は綫型で、石質は全て硬質頁岩である。38、39はヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。

18号住居跡（第21図）

調査区の西側で確認され、175、176号土壤に切られ、177、178号土壤を切っている。

プランは長軸3.5m、短軸2.3mの梢円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは壁際に3個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は認められない。床はほぼ平坦であるが、やや軟弱である。また、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第67図46）

46は覆土出土である。口縁部が外反する深鉢形土器の口縁部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。

石器（第72図40、第75図60）

いずれも覆土出土である。40は石鏃で、基部は無茎である。石質は硬質頁岩である。60は石鍤である。ほぼ扁平な自然縁の両端に抉りを入れているもので、両面から打ち欠いている。

19号住居跡（第22図）

調査区の北側で確認され、188、189、191、192号土壤に切られている。

壁は南西側のみの確認で、規模及び平面形は不明である。確認面からの深さは10cmで、壁は緩く立ち上がる。ビットは8個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は地床炉が2基確認され、径30～40cmの円形を呈するものである。床は若干凹凸があり、やや軟弱である。また、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

石器（第72図41、42）

いずれも覆土出土の石鏃である。基部は有茎で、石質は硬質頁岩である。

20号住居跡（第23図）

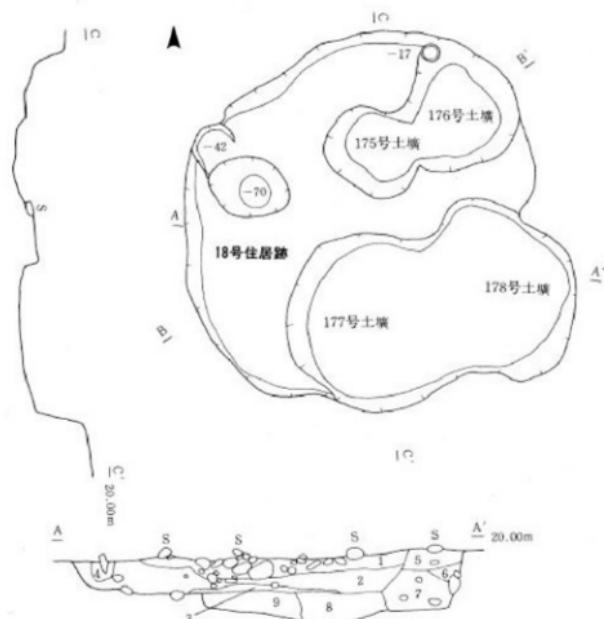
調査区の中央部で確認された。

ビットと炉の確認で、規模及び平面形は不明である。ビットは7個確認されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部、石組部からなる複式炉である。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を埋設し、周辺が火熱を受けている。石組部は石を側面に組み、底面は黄褐色土（地山）に混入している礫が露出し、底・側面が火熱を受けている。床はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第25図8）

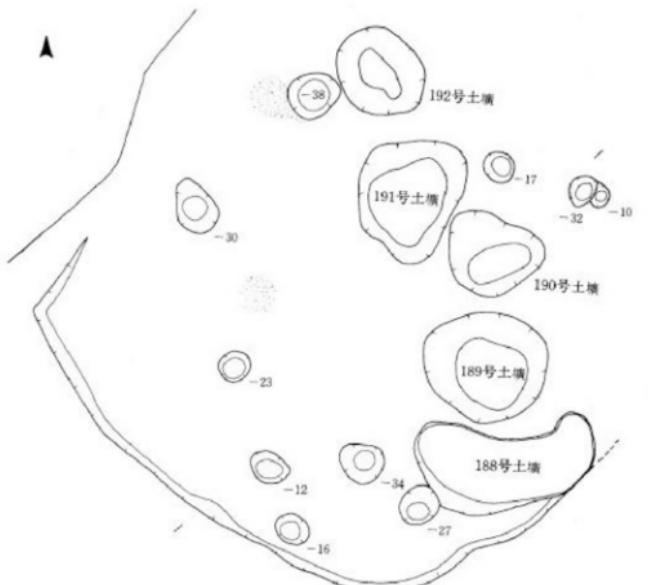
8は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で、器面全体に条痕文が施される。



第1層 黄褐色土、磚(中・大)嵌入
第2層 黄褐色土、炭化物・小便器嵌入
第3層 黑褐色土、炭化物・多量瓦嵌入
第4層 黑褐色土、黄褐色砂質土嵌入
第5層 黄褐色土、黄褐色土小ブロック嵌入(178号土壤)
第6層 黄褐色土、瓦・小便器・瓦片・瓦塊嵌入(175号土壤)
第7層 黄褐色土、瓦・瓦塊嵌入(175号土壤)
第8層 黄褐色土、黄褐色砂質土嵌入(177号土壤)
第9層 黑褐色土、炭化物嵌入(177号土壤)



第21図 18号住居跡



第22図 19号住居跡

堅穴遺構

1号堅穴遺構 (第26図)

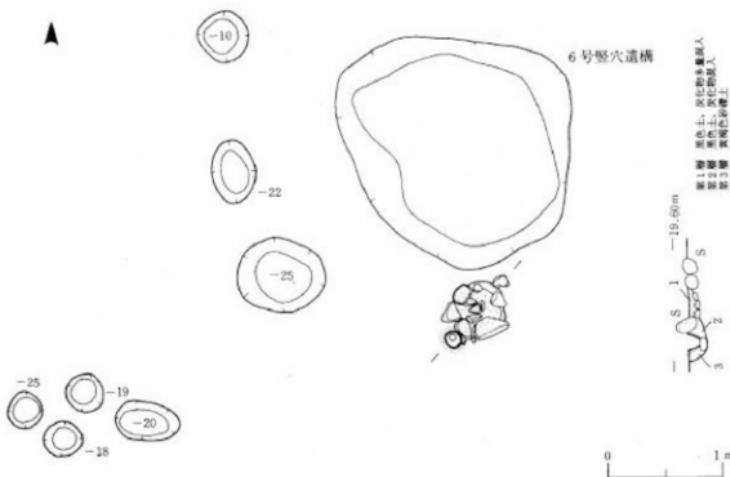
調査区の北側で確認された。

プランは一辺3.4mの方形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは7個確認され、主柱穴は4隅の深さ27cmから36cmの4個である。底面はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が認められる。

出土遺物

土器 (第67図47)

47は覆土出土の深鉢形土器である。沈線区画の磨消帯が施されるもので、地文はLR単節斜縦文（横位回転）で



第23図 20号住居跡

ある。

石器 (第73図43、44、第75図61)

全て覆土出土である。43は石錐である。基部は有茎で、石質は硬質頁岩である。44は石匙である。縦型で、石質は硬質頁岩である。61は石皿である。中央部がよく磨れているが、破損している。

2号堅穴遺構 (第27図)

調査区の北側で確認された。

プランは径2.5mの円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している縁が認められる。

出土遺物

土器 (第67図48~54)

全て覆土出土の深鉢形土器である。沈線区画の磨消帯を有するもので、50、52以外は磨消帯の幅が狭く、磨消帯は縱位方向へ展開するものである。

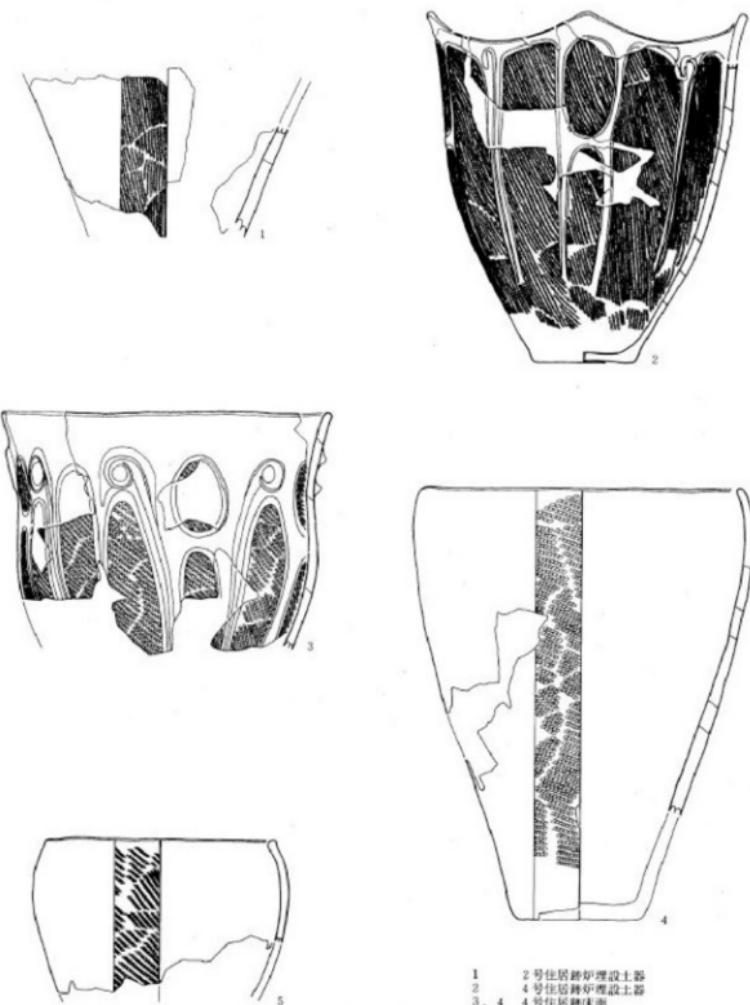
3号堅穴遺構 (第27図)

調査区の北東部で確認された。

プランは長軸4.1m、短軸2.2mの不整長方形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁は緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している縁が露出している。

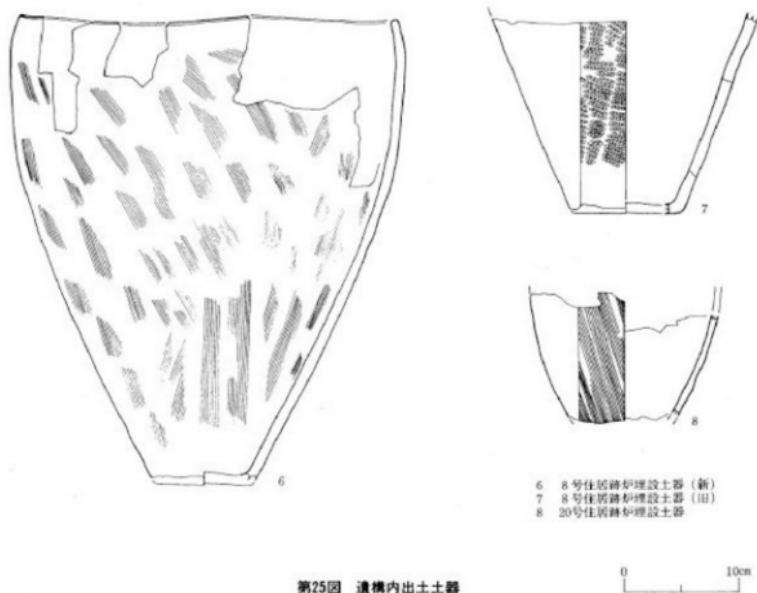
出土遺物

土器 (第68図55)



第24図 遺構内出土土器

0 10cm



第25図 遺構内出土土器

6 8号住居跡埋設土器（新）
7 8号住居跡埋設土器（旧）
8 20号住居跡埋設土器

55は覆土出土の深鉢形土器である。口縁部がほぼ直立し、地文はR L単節斜縞文（縦位回転）である。

石器（第75図62）

62は覆土出土の石鎌である。偏平な自然縁の両端に抉りを入れているので、両面から打ち欠いてる。

4号堅穴遺構（第28図）

調査区の北東部で確認された。

プランは長軸2.9m、短軸2.5mの不整形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第68図56、57）

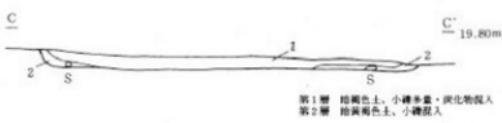
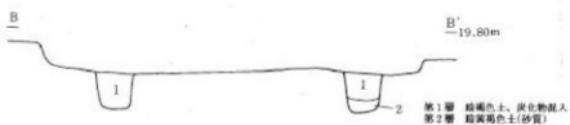
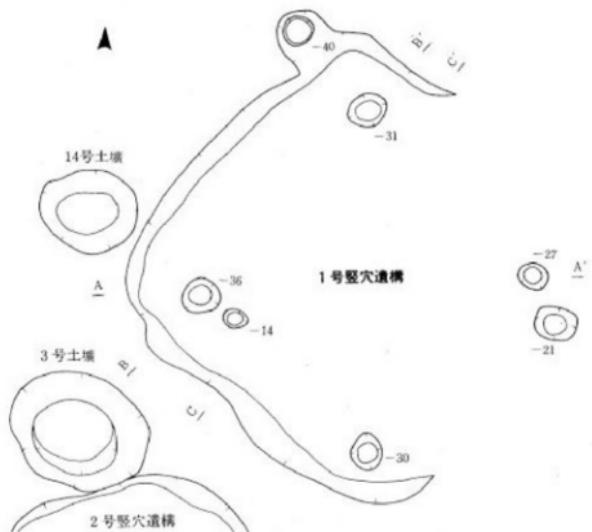
いずれも覆土出土の深鉢形土器で、地文のみのものである。56は口縁部が外反しながら立ち上がり、地文は撲糸文である。57は口縁部が内湾しながら立ち上がり、地文はL R単節斜縞文（横位回転）である。

石器（第73図45）

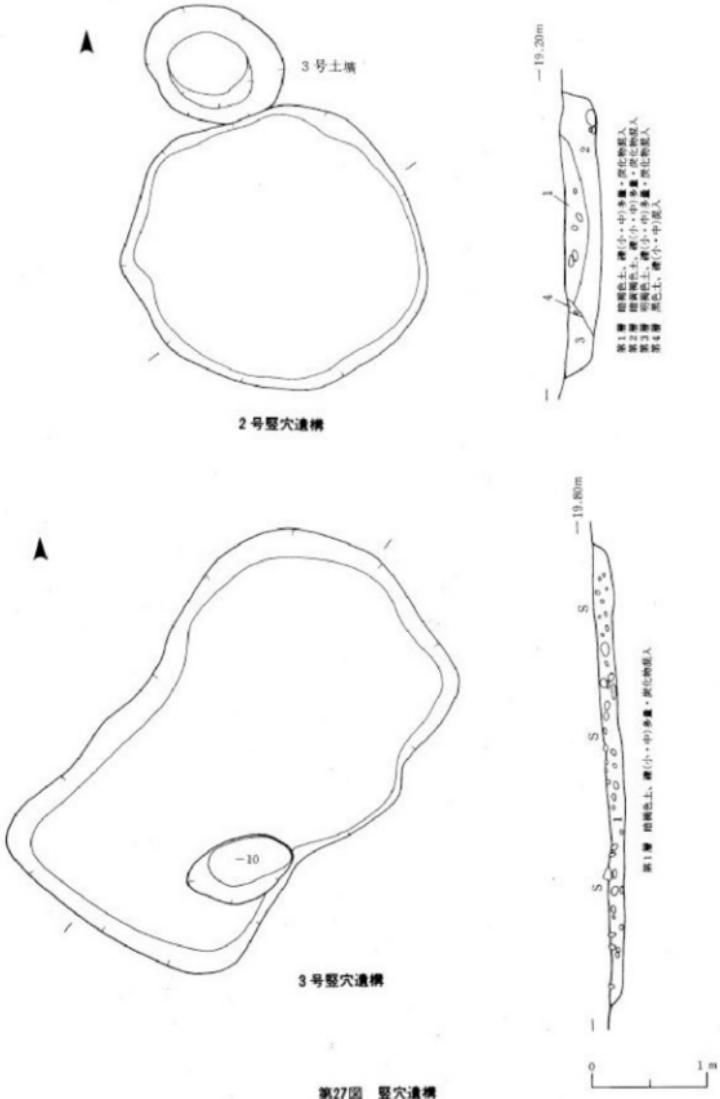
45は覆土出土のヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。

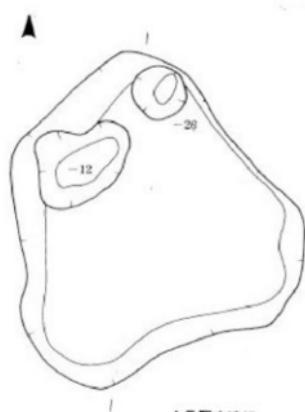
5号堅穴遺構（第28図）

調査区の北東部で確認された。

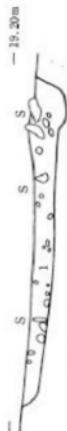


第26図 1号竖穴遺構

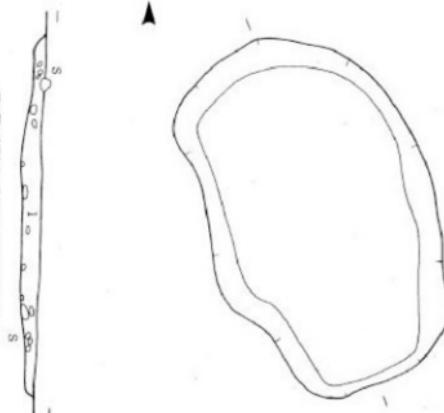




4号竖穴遭構



第4圖 竖穴(小・中)遺構、剖面図(左)、地質図(右)



5号竖穴遭構

第28圖 坑遺構



プランは長軸3.2m、短軸2mの梢円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は若干凹凸が認められ、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

縄文土器片、石器剣片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

6号堅穴遺構（第29図）

調査区の中央部で確認された。

プランは長軸2.3m、短軸2mの梢円形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第68図58）

58は覆土出土の鉢形土器である。口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がり、変形工字文が施され、2個1対の粘土粒が認められる。

石器（第73図46、47）

いずれも覆土出土である。46は石匙である。縦型で、石質は硬質頁岩である。47は削器である。片面調整で、石質は硬質頁岩である。

7号堅穴遺構（第29図）

調査区の中央部で確認された。

プランは長軸2.7m、短軸2.2mの梢円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁は緩く立ち上がる。底面は凹凸があり、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

出土遺物

土器（第68図59）

59は覆土出土の深鉢形土器である。地文はL R 単節斜縞文（横位回転）で、縦位の継格文が認められる。

土製品（第88図2）

2は再利用土製品である。土器片を再利用したもので、梢円形を呈する。

石器（第73図48、49）

いずれも覆土出土である。48は石鏃である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。49は磨製石斧である。刃部は丸みのあるもので、石質は凝灰岩である。

8号堅穴遺構（第30図）

調査区の西側で確認された。

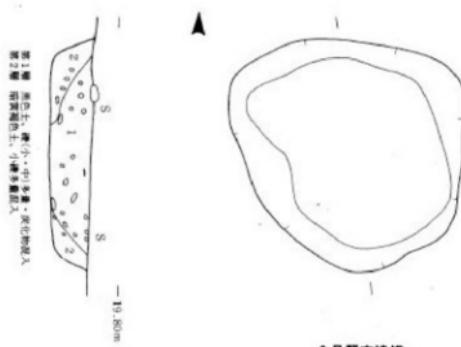
プランは長軸5m、短軸3.5mの梢円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

石器（第73図50）

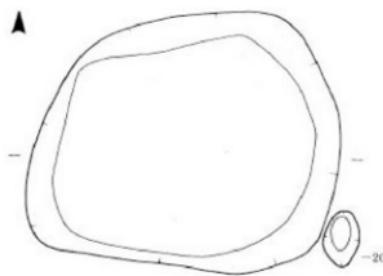
50は覆土出土のヘラ状石器である。両面調整で、石質は硬質頁岩である。

他に縄文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

9号堅穴遺構（第31図）



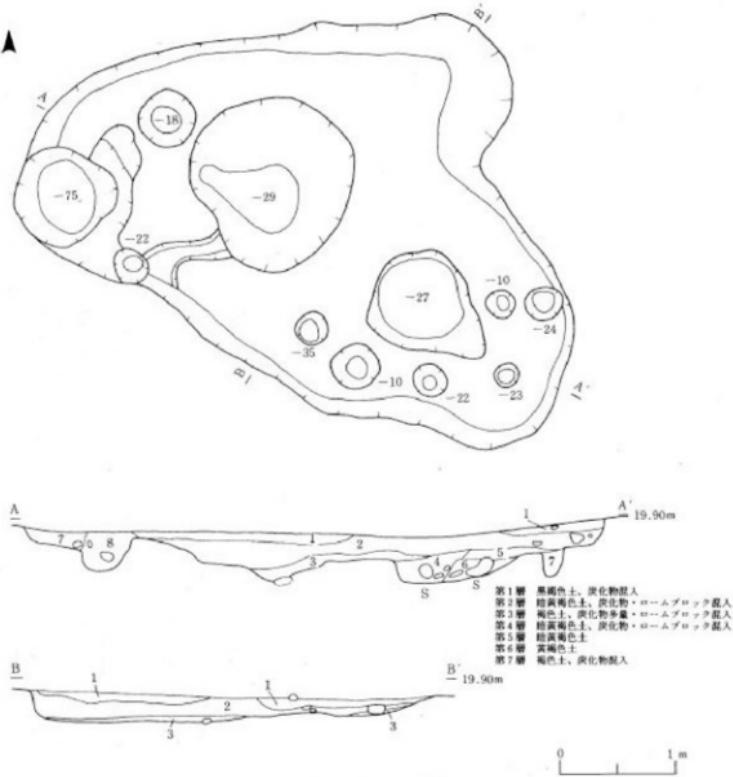
6号竖穴遺構



7号竖穴遺構



第29図 竖穴遺構



第30図 8号整穴遺構

調査区の北側で確認され、19号土壤と重複するが新旧関係は不明である。

壁は西側のみの確認で、規模は不明であるが、平面形は方形ないし長方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは20cmで、壁は緩く立ち上がる。底面は凹凸があり、黄褐色土（地山）に混入している礫が多量に認められる。

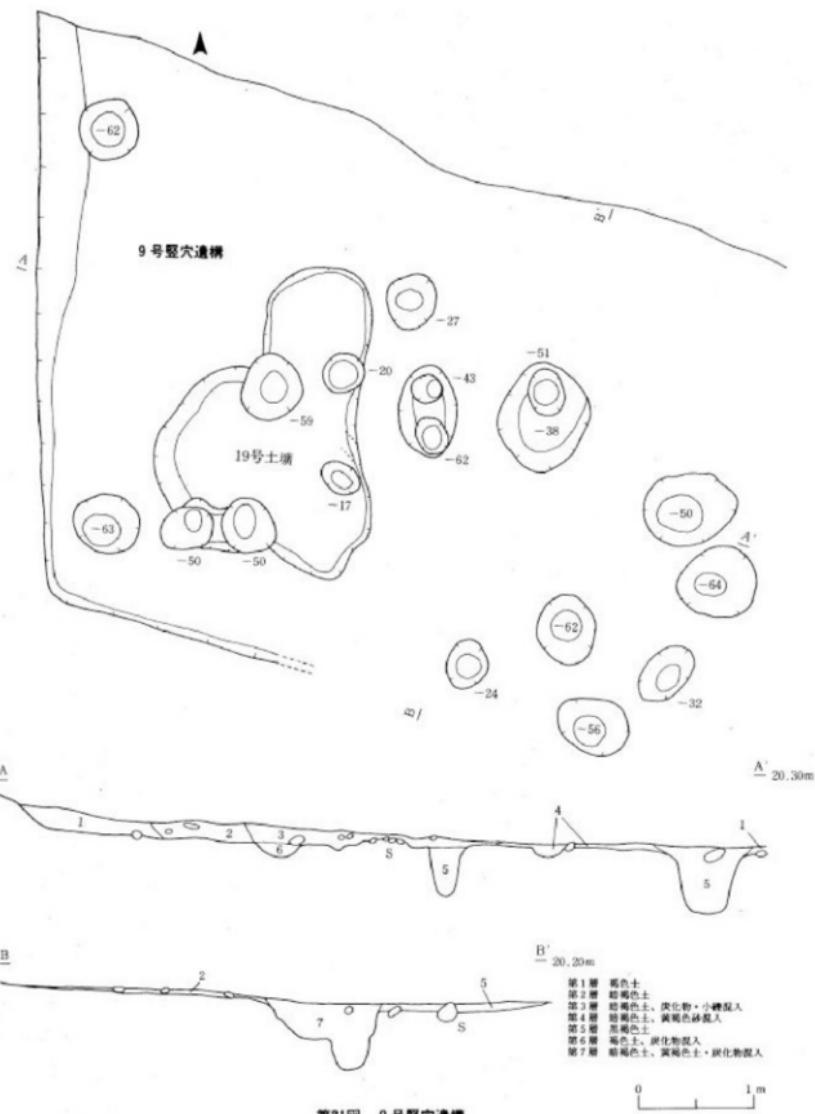
出土遺物

土器（第68図60～63）

全て覆土出土の深鉢形土器で、地文のみのものである。60、61は織紋文、62は木目状燃系文、63は網目状燃系文が施され、61の口縁部は大きく外反する。

石器（第73図51、52、第75図63）

全て覆土出土である。51は石鏟である。基部は無茎で、石質は硬質頁岩である。52は搔器である。縁辺に二次加工を施すもので、石質は硬質頁岩である。63は磨石である。自然礫の全面が磨かれているものである。



第31図 9号竖穴遺構

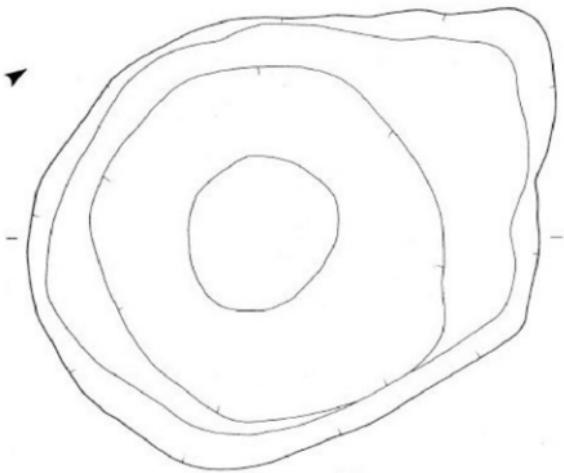
番号	幅 高 (cm)			平 型	断面形	出 土 事 件	考
	天	輪	底				
62	178	120	73	橢円形	袋	状 高文土器片	
63	108.5	100以上	50	橢円形	袋	状 高文土器片	
64	96	60以上	33	橢円形	袋	状 高文土器片	
65	113.5	110	25	橢円形	袋	状 高文土器片	
66	90.5	113	28	橢円形	袋	状 第77回B(石器)	
67	94.5	97	36	橢円形	袋	状 高文土器片、第81回A(石器)	
68	100.5	113	36	橢円形	袋	状 高文土器片	
69	110	98	30	橢円形	袋	状 高文土器片	
70	144	125	55	不整	袋	状 高文土器片、第80回A(半円盤平行打石器)	16号住跡を切っている
71	125	115	66	円	袋	状 高文土器片、第77回B(石器)、第81回A(石器)	16号住跡を切っている
72	104	100	28	円	袋	状 高文土器片	
73	94	83	42	橢円形	袋	状 高文土器片	74.75号土壙を切っている
74	97.5	90以上	38	橢円形	袋	状 高文土器片、第77回B(石器)	73.87号土壙に切られている
75	136.5	110	62	橢円形	袋	状 高文土器片、第77回B(石器)、第77回B(石器)、第81回A(石器)	73.87号土壙に切られている
76	132	105.5	57	橢円形	袋	状 高文土器片、第77回B(石器)	16号住跡を切っている
77	130.5	130	55	橢円形	袋	状 高文土器片	16号住跡を切っている
78	120	105	80	橢円形	袋	状 高文土器片、第77回B(ヘウ状石器)	15号住跡を切っている
79	144	110	40	橢円形	袋	状 高文土器片	15号住跡を切っている
80	128	100以上	33	橢円形	袋	状 高文土器片	81号土壙を切っている
81	106.5	70以上	22	橢円形	袋	状 高文土器片	80号土壙に切られている
82	142	95	18	不整	袋	状 高文土器片	79号土壙を切っている
83	119	85以上	29	橢円形	袋	状 第60回74(高文時代)、第82回144(唐臼)	84号土壙を切っている
84	110.5	90以上	32	橢円形	袋	状 高文土器片	83号土壙に切られている
85	163	125	30	橢円形	袋	状 高文土器片	16号住跡を切っている
86	100	87	58	橢円形	袋	状 第82回145(唐臼)	15号住跡を切っている
87	110	102	52	橢円形	袋	状 高文土器片	74号土壙を切っている
88	115	90	43	橢円形	袋	状 高文土器片	
89	112	100以上	30	橢円形	袋	状 高文土器片	
90	115	98	57	橢円形	袋	状 高文土器片、第77回B(石器)、第77回B(石器)	15号住跡を切っている
91	125	110	43	橢円形	袋	状 高文土器片、第80回A(石器)	93号土壙を切っている
92	106.5	75	26	橢円形	袋	状 高文土器片	93号土壙を切っている
93	90	50以上	43	橢円形	袋	状 高文土器片	
94	129	113	44	橢円形	袋	状 高文土器片、第77回B(石器)	15号住跡を切っている
95	167	106	20	橢円形	袋	状 高文土器片	15号住跡を切っている
96	89	79	66	橢円形	袋	状 高文土器片、第77回B(石器)	15号住跡を切っている
97	137	100以上	57	橢円形	袋	状 高文土器片	15号住跡を切っている
98	124	117	70	橢円形	袋	状 第60回75.76(高文時代前期)、第82回147(石器)	15号住跡を切っている
99	90	62	28	橢円形	袋	状 高文土器片	15号住跡を切っている
100	130.5	110以上	53	橢円形	袋	状 第60回77(高文時代前期)	101号土壙に切られている
101	156	120	48	橢円形	袋	状 高文土器片	100号土壙を切っている
102	106	65	16	橢円形	袋	状 高文土器片	
103	111	106	73	橢円形	袋	状 高文土器片、第80回A(石器)	16号住跡に切られている
104	130.5	110以上	55	不整	袋	状 高文土器片	16号住跡に切られている
105	100	85	66	橢円形	袋	状 高文土器片、第78回B(ヘウ状石器)	16号住跡に切られている
106	112	90以上	60	橢円形	袋	状 高文土器片	16号住跡に切られている
107	97	80以上	40	橢円形	袋	状 高文土器片	16号住跡に切られている
108	109.5	100以上	50	不整	袋	状 高文土器片	16号住跡に切られている
109	90.5	90以上	60	橢円形	袋	状 高文土器片	16号住跡に切られている
110	117	96	58	橢円形	袋	状 高文土器片	
111	120	115	63	橢円形	袋	状 第60回78(高文時代前期)、第77回B(ヘウ状石器)	
112	142	103	70	橢円形	袋	状 第60回79.80(高文時代前期)	113号土壙を切っている
113	90.5	71	50	橢円形	袋	状 高文土器片	112号土壙に切られている
114	226	104	29	橢円形	袋	状 高文土器片	115号土壙を切っている
115	180	140	50	橢円形	袋	状 高文土器片、第78回B(石器)	114号土壙に切られている
116	180	160	28	橢円形	袋	状 第60回80(高文時代前期)	115号土壙に切られている
117	85	70	33	橢円形	袋	状 高文土器片	
118	136	121	79	橢円形	袋	状 高文土器片	
119	106	93	25	橢円形	袋	状 高文土器片	115号土壙を切っている
120	103	90	44	橢円形	袋	状 高文土器片	116号土壙に切られている
121	118	90.5	25	橢円形	袋	状 高文土器片	120号土壙に切られている
122	122	70	16	橢円形	袋	状 高文土器片	

番号	面積(m²)	地名	平田村	面積(m²)	出	土	業	■
123	145	123	96	145	145	96	145	
124	149	93	6	149	149	93	6	國文多喜片
125	260.1	105	38	260.1	260.1	105	38	國文多喜片、新文多喜片、新文多喜石
126	149	95	55	149	149	95	55	國文多喜片
127	149	102	12	149	149	102	12	國文多喜片
128	260.1	106	10	260.1	260.1	106	10	國文多喜片、新文多喜片、新文多喜石
129	149	115	32	149	149	115	32	國文多喜片
130	149	117	36	149	149	117	36	國文多喜片、新文多喜片
131	260.1	140	11	260.1	260.1	140	11	國文多喜片、新文多喜片
132	260.1	140	30	260.1	260.1	140	30	國文多喜片
133	149	170	29	149	149	170	29	國文多喜片
134	149	115	43	149	149	115	43	國文多喜片
135	149	73	15	149	149	73	15	國文多喜片
136	149	107	45	149	149	107	45	國文多喜片
137	149	119	11	149	149	119	11	國文多喜片
138	149	119	30	149	149	119	30	國文多喜片
139	149	122	30	149	149	122	30	國文多喜片
140	149	127	40	149	149	127	40	國文多喜片
141	149	110	44	149	149	110	44	國文多喜片
142	149	125	11	149	149	125	11	國文多喜片
143	149	119	33	149	149	119	33	國文多喜片
144	149	120	32	149	149	120	32	國文多喜片
145	149	130	30	149	149	130	30	國文多喜片
146	149	112	22	149	149	112	22	國文多喜片
147	149	115	19	149	149	115	19	國文多喜片
148	149	119	13	149	149	119	13	國文多喜片
149	149	119	44	149	149	119	44	國文多喜片
150	149	119	96	149	149	119	96	國文多喜片
151	149	125	35	149	149	125	35	國文多喜片
152	149	120	25	149	149	120	25	國文多喜片
153	149	120	60	149	149	120	60	國文多喜片
154	149	138	60	149	149	138	60	國文多喜片
155	149	140	60	149	149	140	60	國文多喜片
156	149	125	27	149	149	125	27	國文多喜片
157	149	125	30	149	149	125	30	國文多喜片
158	149	125	35	149	149	125	35	國文多喜片
159	149	125	40	149	149	125	40	國文多喜片
160	149	127	40	149	149	127	40	國文多喜片
161	149	162	41	149	149	162	41	國文多喜片
162	149	170	44	149	149	170	44	國文多喜片
163	149	169	132	149	149	169	132	國文多喜片
164	149	96	53	149	149	96	53	國文多喜片、國文多喜石
165	149	169	63	149	149	169	63	國文多喜片、國文多喜石
166	149	111	56	149	149	111	56	國文多喜片
167	149	120	62	149	149	120	62	國文多喜片、國文多喜石
168	149	177	63	149	149	177	63	國文多喜片、國文多喜石
169	149	200	153	149	149	200	153	國文多喜片、國文多喜石
170	260.1	140	17	260.1	260.1	140	17	國文多喜片、國文多喜石
171	149	120	25	149	149	120	25	國文多喜片
172	149	80.0	13	149	149	80.0	13	國文多喜片
173	250	150	20	250	250	150	20	國文多喜片
174	149	170	34	149	149	170	34	國文多喜片、國文多喜石
175	80	69	15	80	80	69	15	國文多喜片
176	149	169.1	34	149	149	169.1	34	國文多喜片、國文多喜石
177	149	169.1	20	149	149	169.1	20	國文多喜片、國文多喜石
178	149	150.1	15	149	149	150.1	15	國文多喜片、國文多喜石
179	149	120	13	149	149	120	13	國文多喜片
180	149	120	30	149	149	120	30	國文多喜片
181	149	103	69	149	149	103	69	國文多喜片、國文多喜石
182	149	73	21	149	149	73	21	國文多喜片、國文多喜石
183	149	138	34	149	149	138	34	國文多喜片

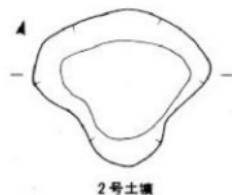
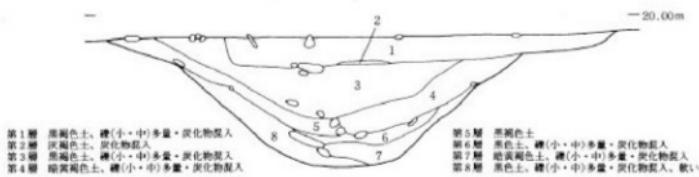
番号	廣 横(cm)			平 面 形	断面形	出 土 器 物	備 考
	長	幅	高				
184	230	175	38	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片、第95回5(河利用土製品)、第79回12(石器)	
185	135	103	34	椭 内 形	横 状	鐵文土器片	
186	180	170	56	椭 内 形	縦 状	第69回8(鐵文時代後期初期)	
187	132	107	21	椭 内 形	横 状	鐵文土器片	
188	155	72	32	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	19号住居跡を切っている
189	110	95	52	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	19号住居跡を切っている
190	80	60	41	椭 内 形	横 状	鐵文土器片	
191	110	86	47	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	19号住居跡を切っている
192	85	70	56	椭 内 形	横 状	鐵文土器片、第82回150(石器)、第79回14,115(石器)、116(石器)	19号住居跡を切っている
193	252	198	92	椭 内 形	縦 状	第69回89-91(鐵文時代前期)、第79回14,115(石器)、116(石器)	
195	266	195	82	椭 内 形	縦 状	第69回89(鐵文時代後期)	
197	114	163	28	椭 内 形	横 状		
198	96	78	43	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
199	157	130	70	椭 内 形	横 状	鐵文土器片、第79回118(鐵器)	
201	125	73	60	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	215号土壤を切っている
202	151	165	51	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
203	310	210	75	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片、第79回129,131(石器)、第80回123(石器)	
204	144	123	30	椭 内 形	縦 状	第69回123(石器)	
205	97	90	23	椭 内 形	縦 状		
206	140	139	72	円 形	縦 状	第69回95(鐵文時代前期)、第80回124(野製石器)	
207	200II上	190	55	椭 内 形	縦 状	第69回125,126(石器)	194号土壤を切っている
210	100II上	60II上	35	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
211	270II上	156	34	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
212	190II上	—	60	不 规	—	鐵文土器片	
213	170	150II上	143	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
214	210	170	170	椭 内 形	縦 状	第69回97(鐵文時代中期)、第79回127,128(石器)	214号土壤に切られている
215	165	140	55	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	215号土壤を切っている
216	175	162	18	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
217	96	70	12	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
218	103	94	13	円 形	縦 状		
219	97	65	36	椭 内 形	縦 状		
220	118	105	41	椭 内 形	縦 状	鐵文土器片	
221	227	165	73	椭 内 形	縦 状		
222	195	160	33	椭 内 形	縦 状	第69回98(鐵文時代後期)、第80回129,130(石器)、131(陶器)	
223	113	90	38	椭 内 形	縦 状		
224	135	100II上	34	椭 内 形	縦 状		
225	142	92	12	椭 内 形	縦 状		
226	73	59	48	椭 内 形	縦 状		
227	161	77	25	椭 内 形	縦 状		
228	100	94	13	内 形	縦 状		
229	72	65	22	椭 内 形	縦 状		
230	95	80	30	椭 内 形	縦 状		
231	216	136	46	椭 内 形	縦 状		
232	196	154	19	椭 内 形	直 状		
233	120	96	37	椭 内 形	直 状	第69回130(石器)	
234	123	120	25	円 形	縦 状		
235	140	110II上	55	不 规	縦 状	第69回130(石器)	
236	101	93	29	円 形	縦 状		
237	300	124	23	椭丸形	縦 状		
238	144	125	12	椭 内 形	直 状		
239	293	206	37	椭 内 形	縦 状		
240	145	90以上	12	椭 内 形	縦 状		172号土壤を切っている
241	344	198	96	椭 内 形	縦 状		196号土壤に切られている

(プラスコ状ビット)

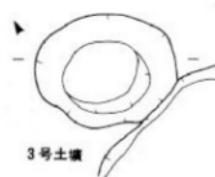
番号	廣 口 寸(cm)			廣 氏 寸(cm)			深さ (cm)	出 土 器 物	備 考
	長	幅	鉢	平面形	長	幅			
193	113	96	椭円形	156	132	橢円形	120	鐵文土器片、第79回123(石器)、第80回125(石器)	
196	160	140	椭円形	196	134	橢円形	185	第69回97(鐵文時代中期)、第79回117(石器)、第82回151(石器)	
200	120	100	椭円形	173	150	橢円形	180	第69回97(鐵文時代中期)、第79回119(石器)、第82回152(石器)、154(石器)	
208	—	不 规	193	180	橢円形	85	第69回97(鐵文時代中期)		
209	—	不 规	145	110	橢円形	73	鐵文土器片		



1号土壤



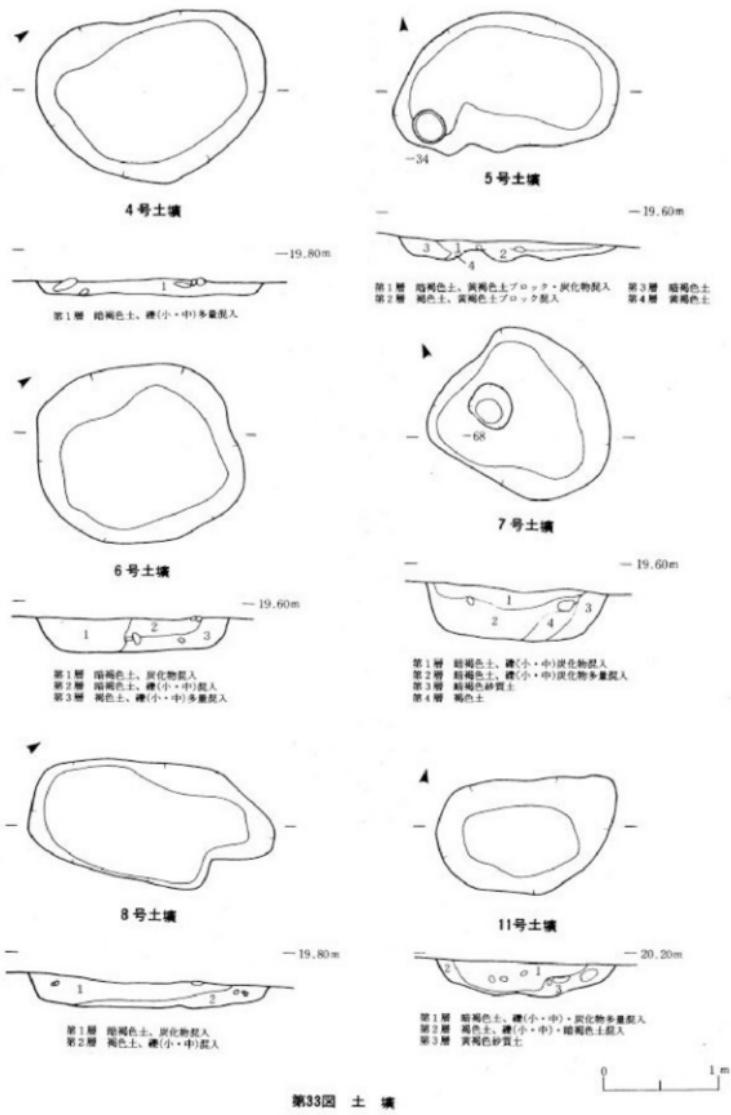
2号土壤



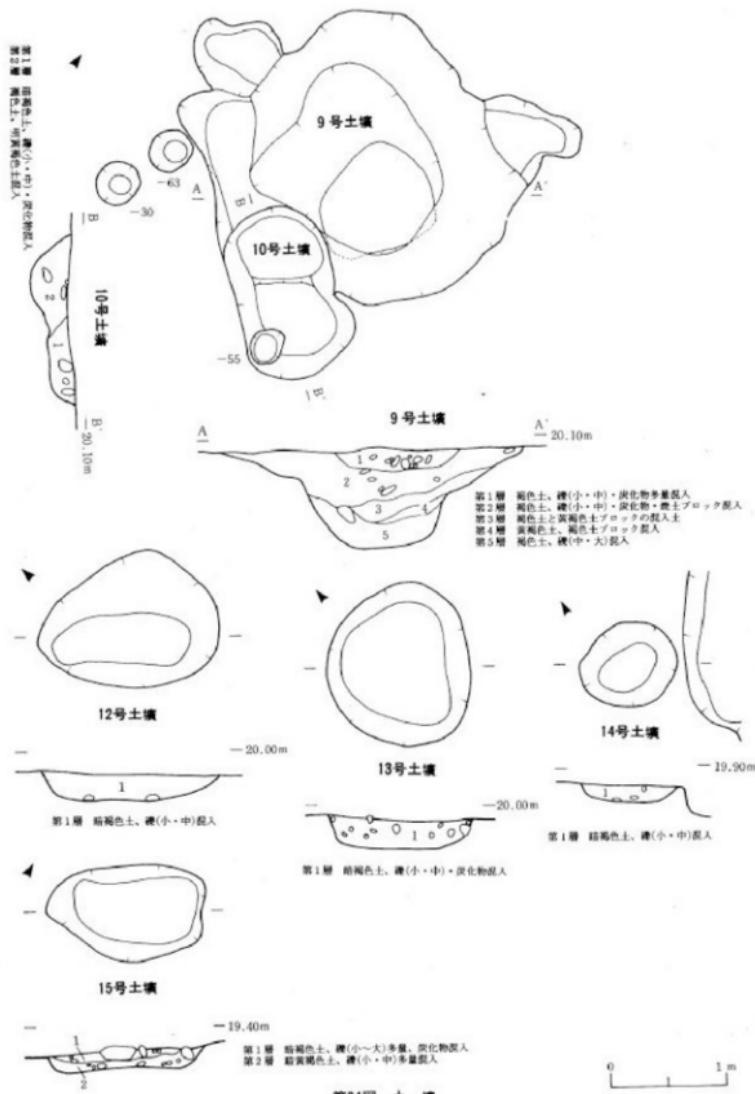
3号土壤



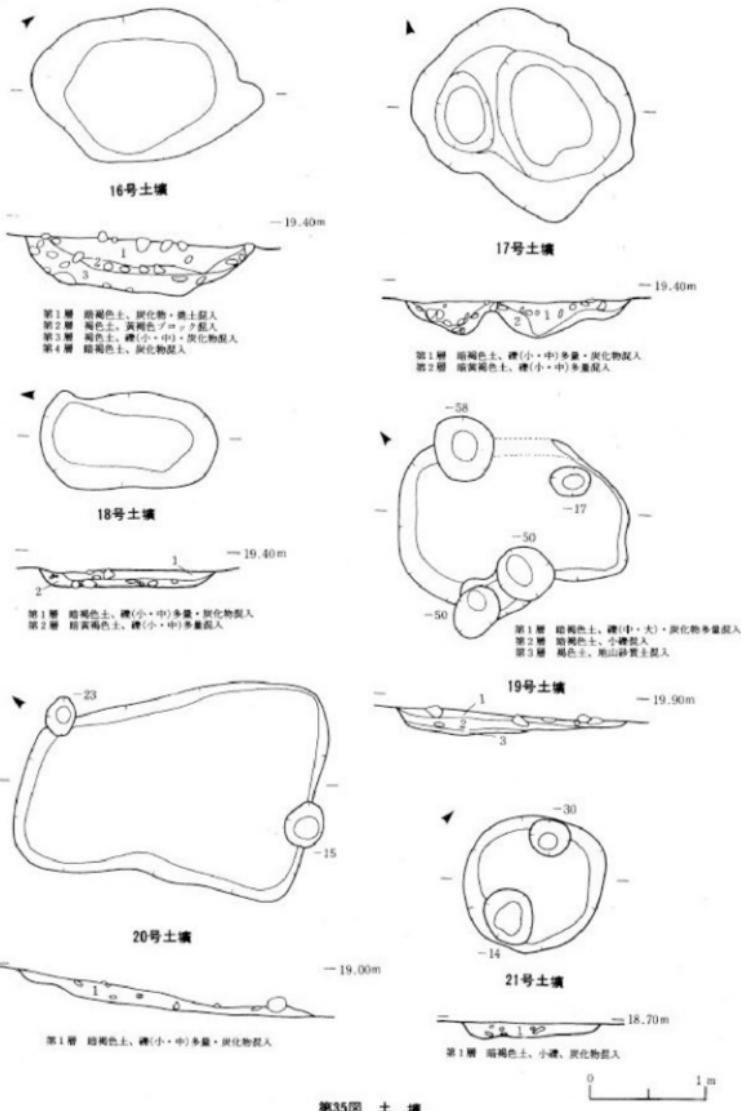
第32図 土 壤



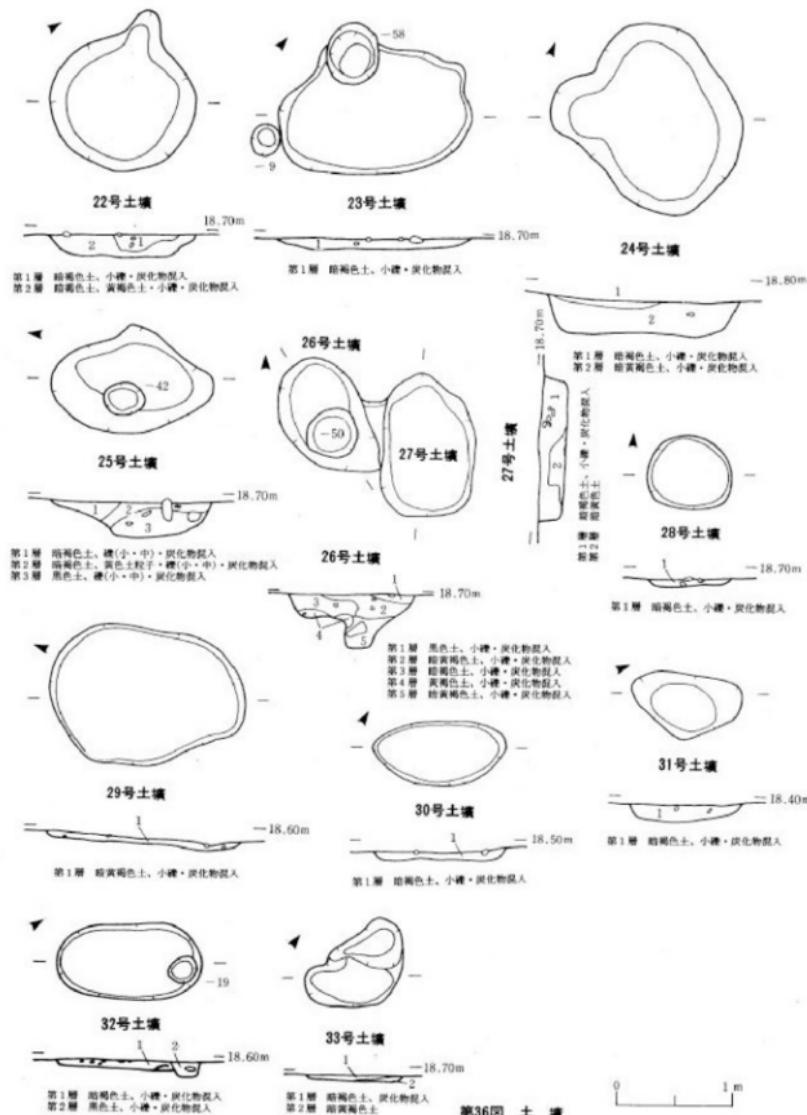
第33図 土 壤



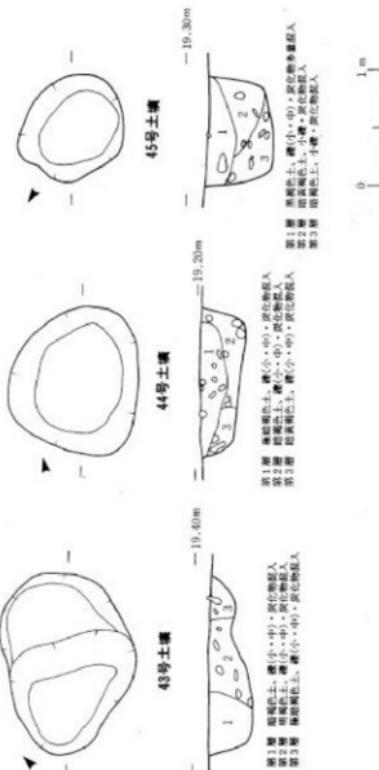
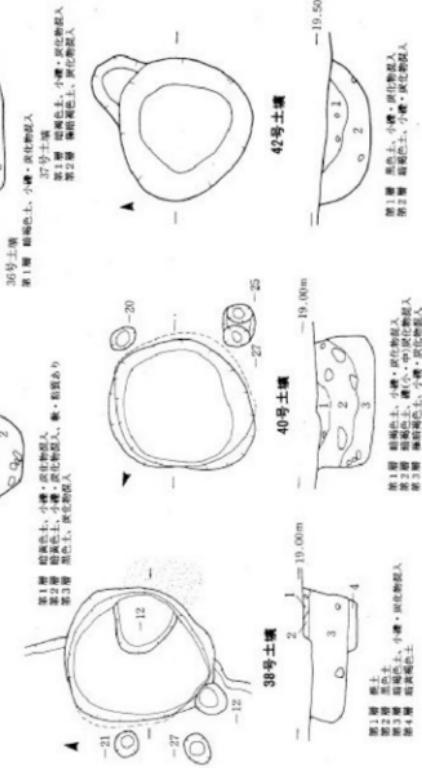
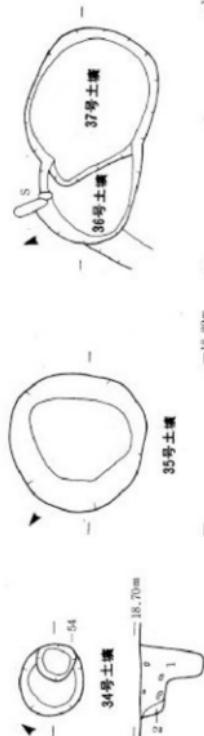
第34図 土 壤



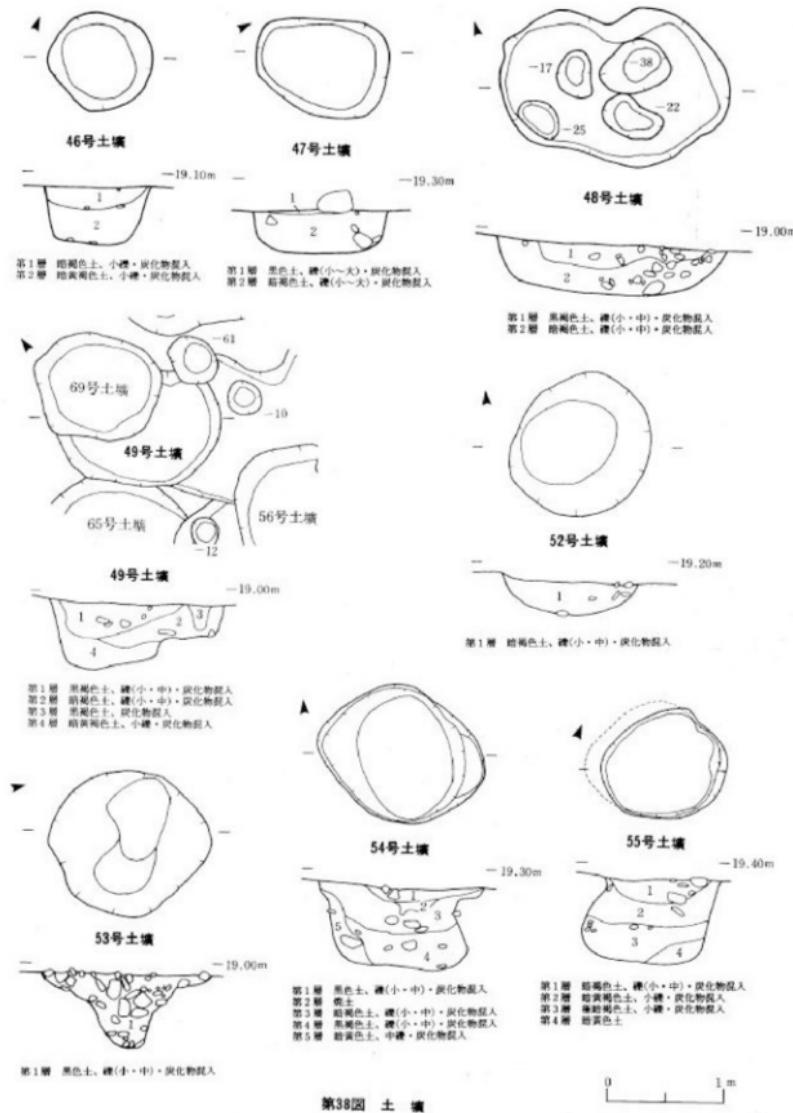
第35図 土 壤

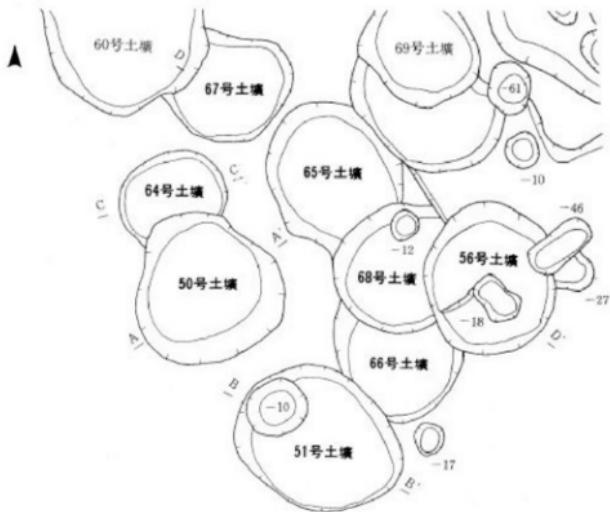


第36回 土 壤

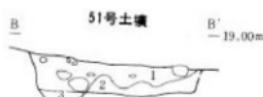


第37图 土壤

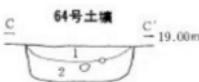




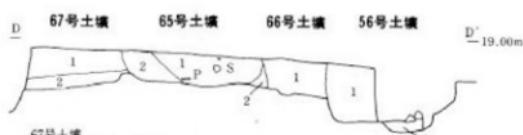
第1層 黑色土、礫(小・中)混入
第2層 細褐色土、小礫混入
第3層 細褐色土、小礫混入



第1層 黑色土、礫(小・中)・炭化物混入
第2層 細褐色土、礫(小・中)・炭化物混入
第3層 細褐色土



第1層 細褐色土、黑色土、小礫・炭化物混入
第2層 細褐色土、礫(小・中)・炭化物混入



67号土壤
第1層 細褐色土、炭化物混入
第2層 細褐色土、炭化物混入

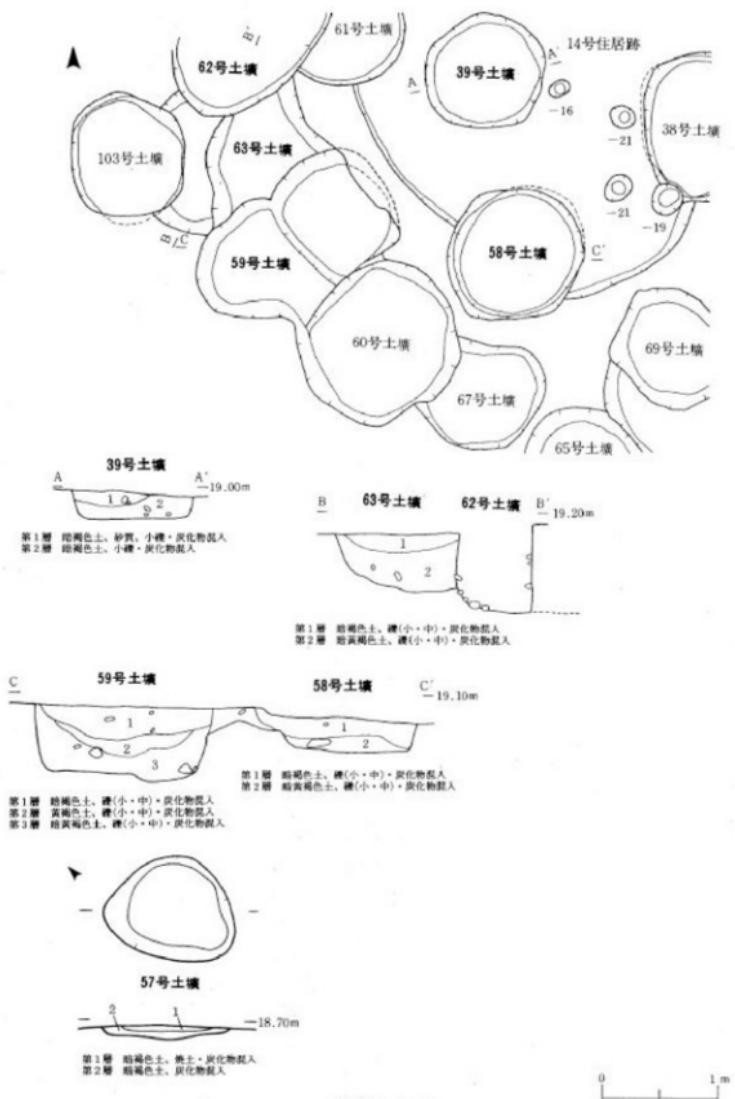
65号土壤
第1層 細褐色土、礫(小・中)・炭化物混入
第2層 細褐色土、礫(小・中)・炭化物混入

66号土壤
第1層 黑色土、小礫・鐵土・炭化物混入

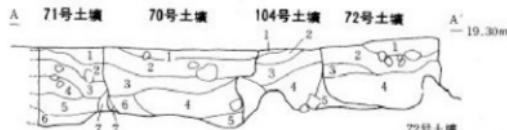
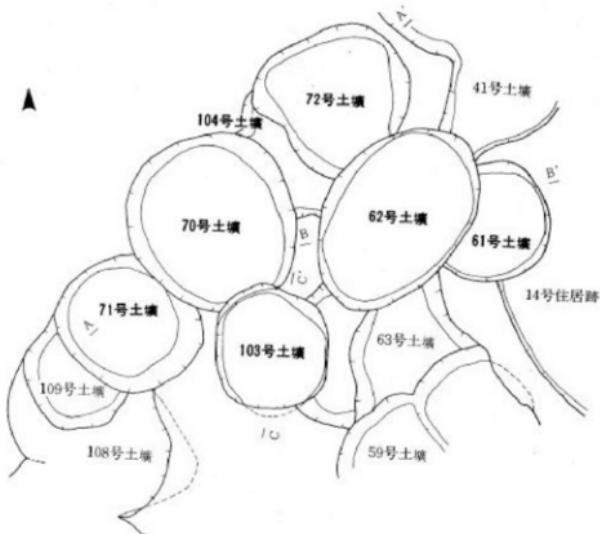
56号土壤
第1層 黑褐色土、小礫・炭化物混入
第2層 細褐色土

第39図 土 壤

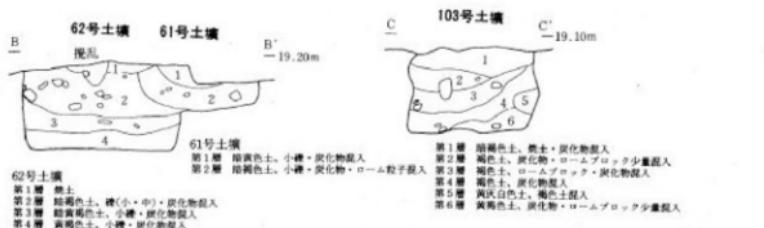




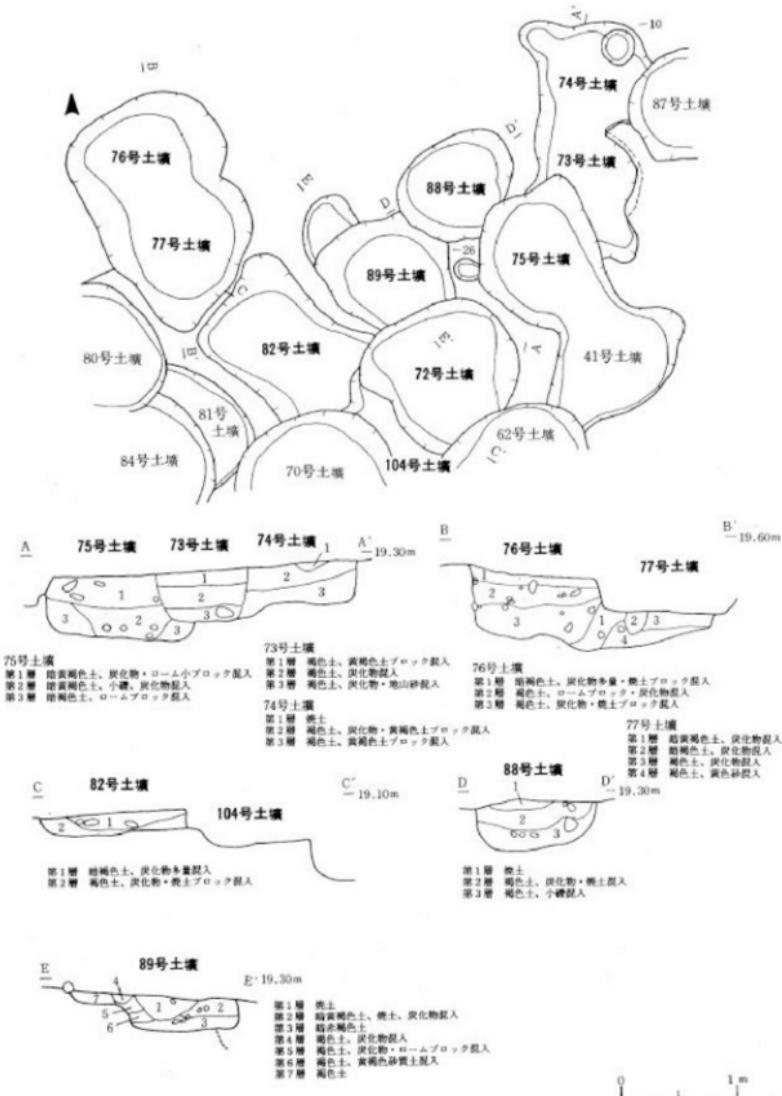
第40図 土 壤



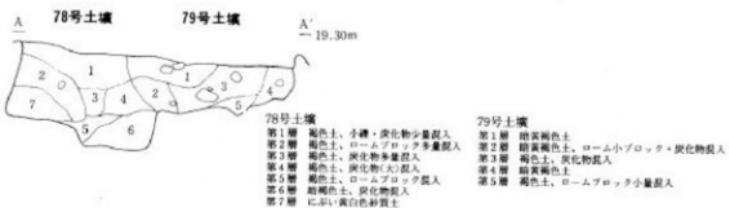
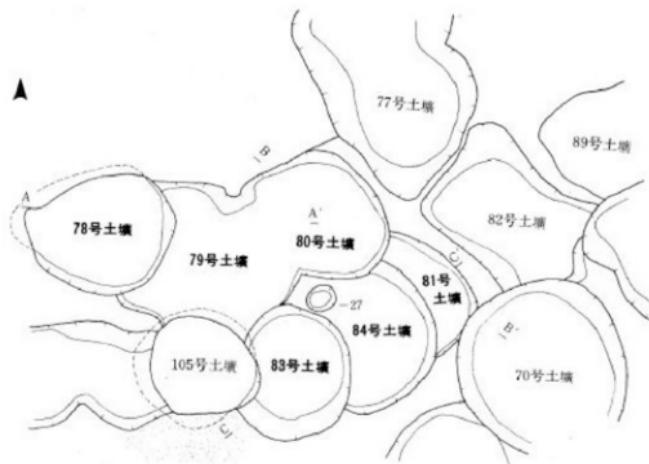
71号土壤		70号土壤		104号土壤		72号土壤	
第1層	褐色土、黃色土小ブロック・炭化物混入	第1層	褐色土、ロームブロック・炭化物混入	第1層	褐色土、小磚・炭化物多量混入	第1層	褐色土、米土・炭化物多量混入
第2層	褐色土、無機物混入	第2層	褐色土、小磚・炭化物少量混入	第2層	褐色土、小磚・炭化物混入	第2層	褐色土、米土・少量混入
第3層	褐色土、小磚・炭化物少量混入	第3層	褐色土、小磚・炭化物多量混入	第3層	褐色土、小磚・炭化物少量混入	第3層	褐色土、米土・炭化物少量混入
第4層	黃褐色土、中磚・炭化物少量混入	第4層	黃褐色土、小磚・黃色粘土ブロック・炭化物混入	第4層	黃褐色土、小磚・炭化物混入	第4層	黃褐色土、米土・炭化物少量混入
第5層	褐色土、黃色粘土ブロック・炭化物混入	第5層	褐色土、黃色粘土・炭化物混入	第5層	褐色土、黃色粘土・炭化物混入	第5層	褐色土、米土・炭化物混入
第6層	褐色土、黃色土・炭化物少量混入	第6層	褐色土、黃色土・炭化物混入	第6層	褐色土、黃色土・炭化物混入	第6層	褐色土、黃色土・炭化物混入
第7層	灰褐色砂質土	第7層	灰褐色砂質土、褐色土・炭化物混入	第7層	灰褐色砂質土、褐色土・炭化物混入	第7層	褐色土・砂質土



第41図 土 壤

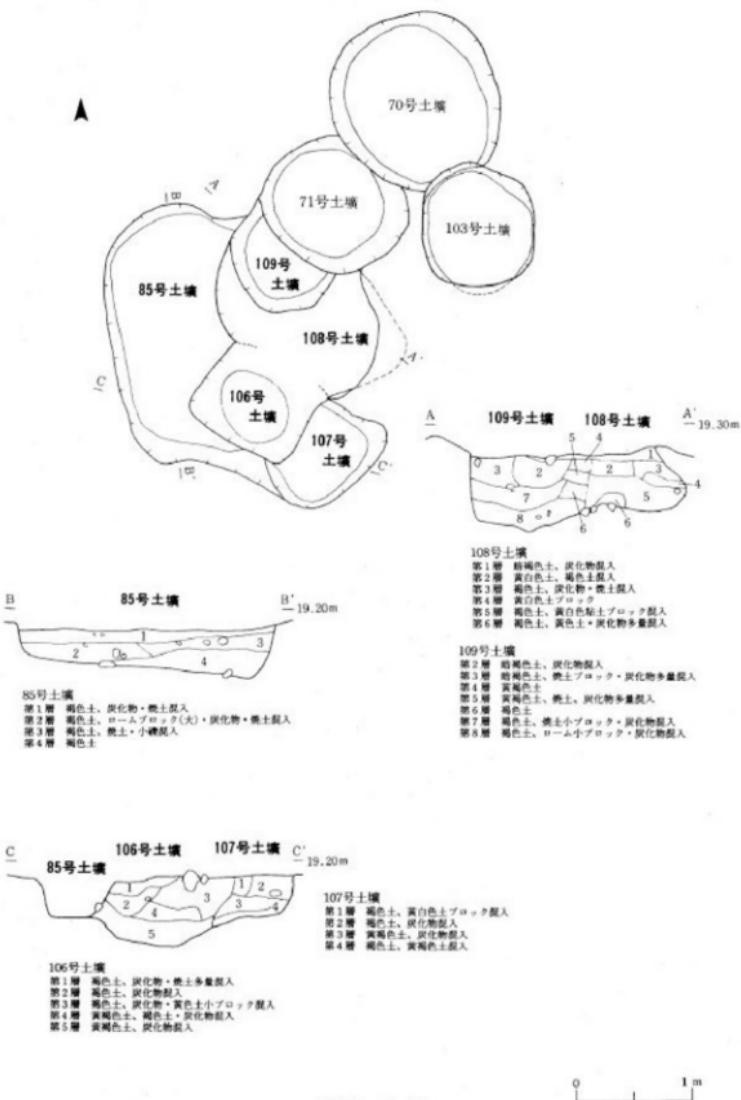


第42図 土 壤

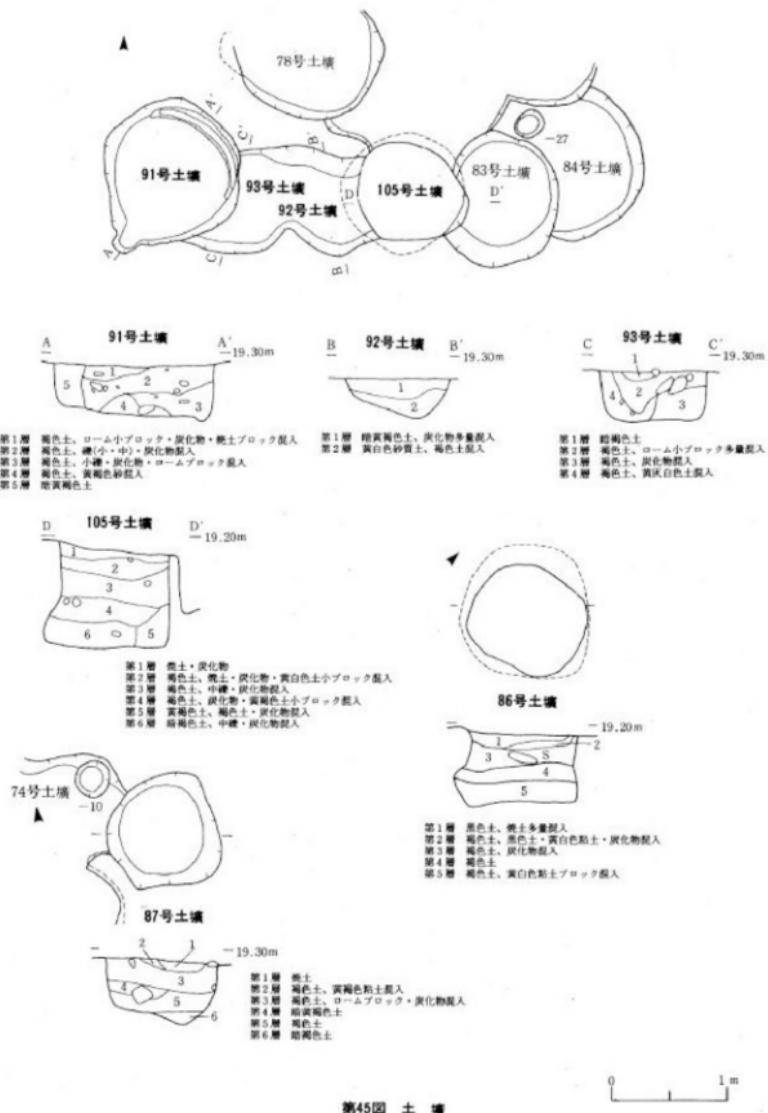


第43図 土 塚

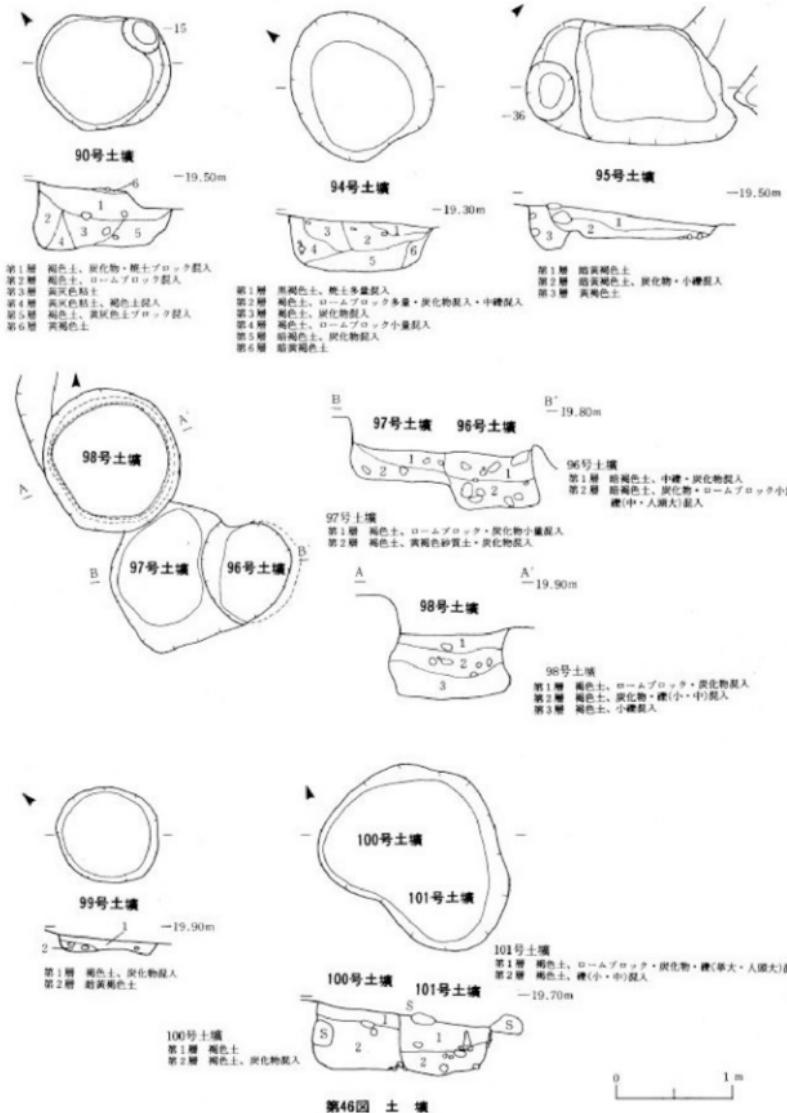




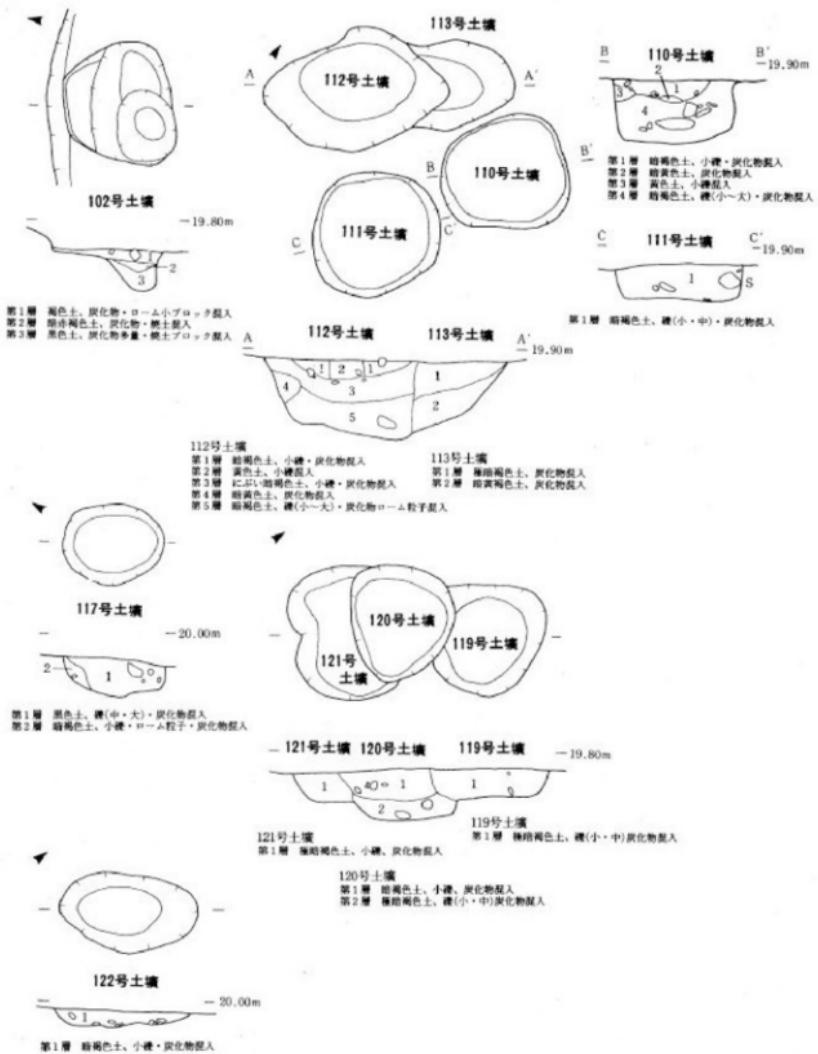
第44図 土 壤



第45図 土 壤

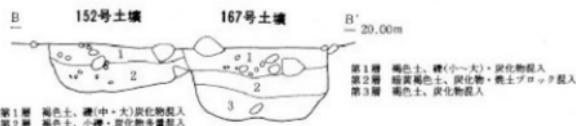
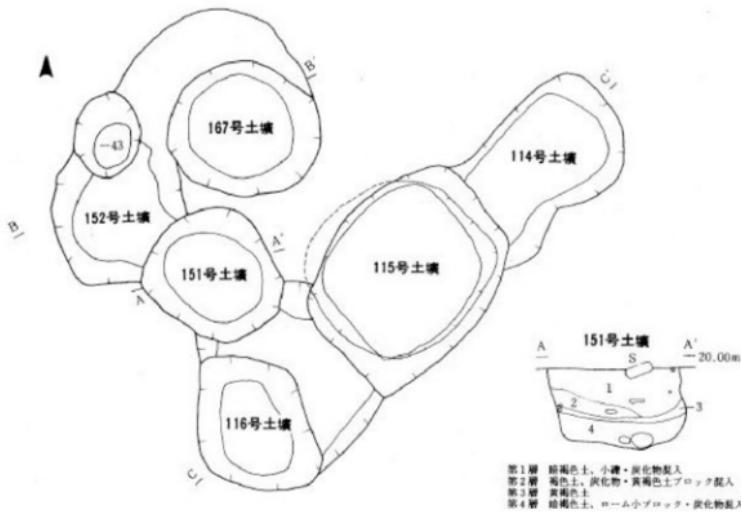


第46図 土 壤



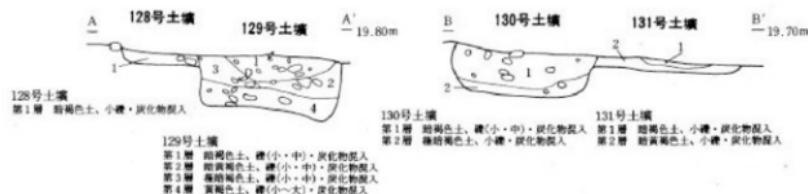
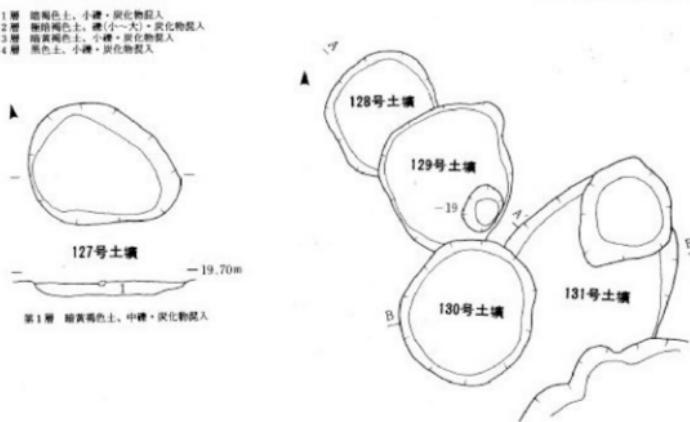
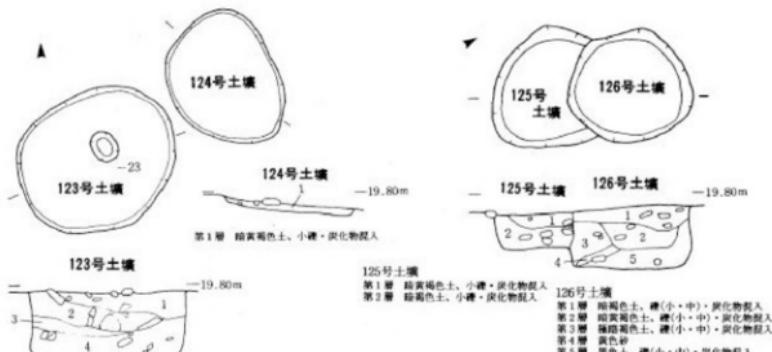
第47図 土 塚





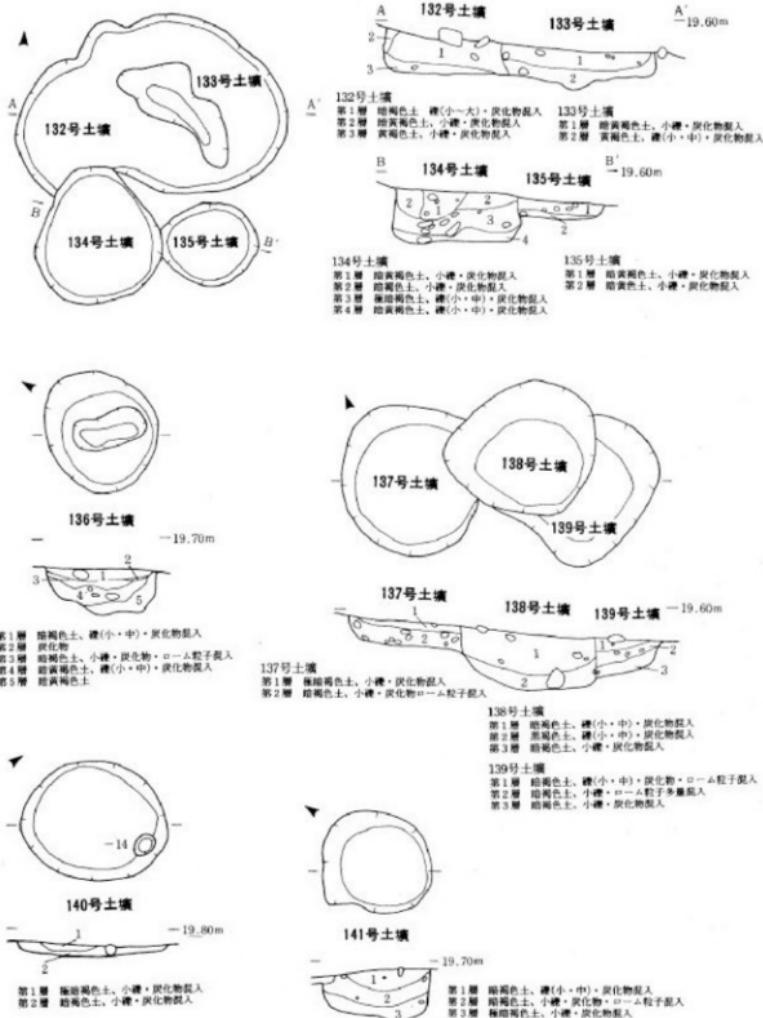
第48図 土 壤



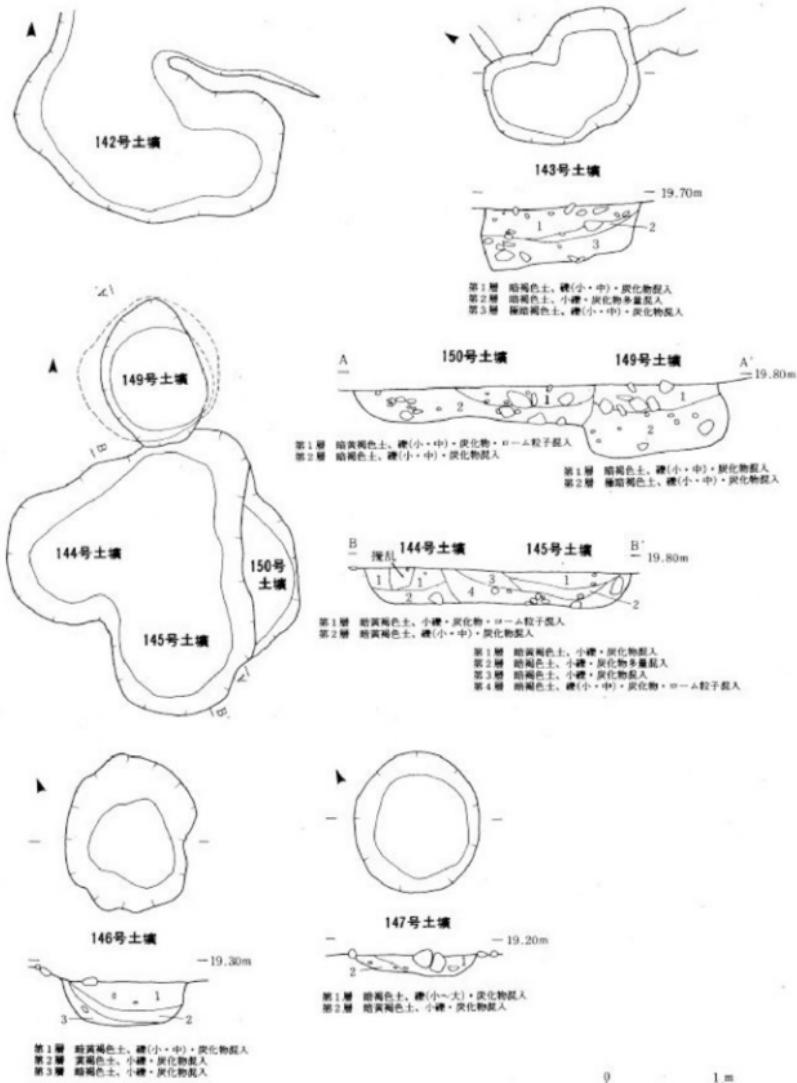


第49図 土 壤

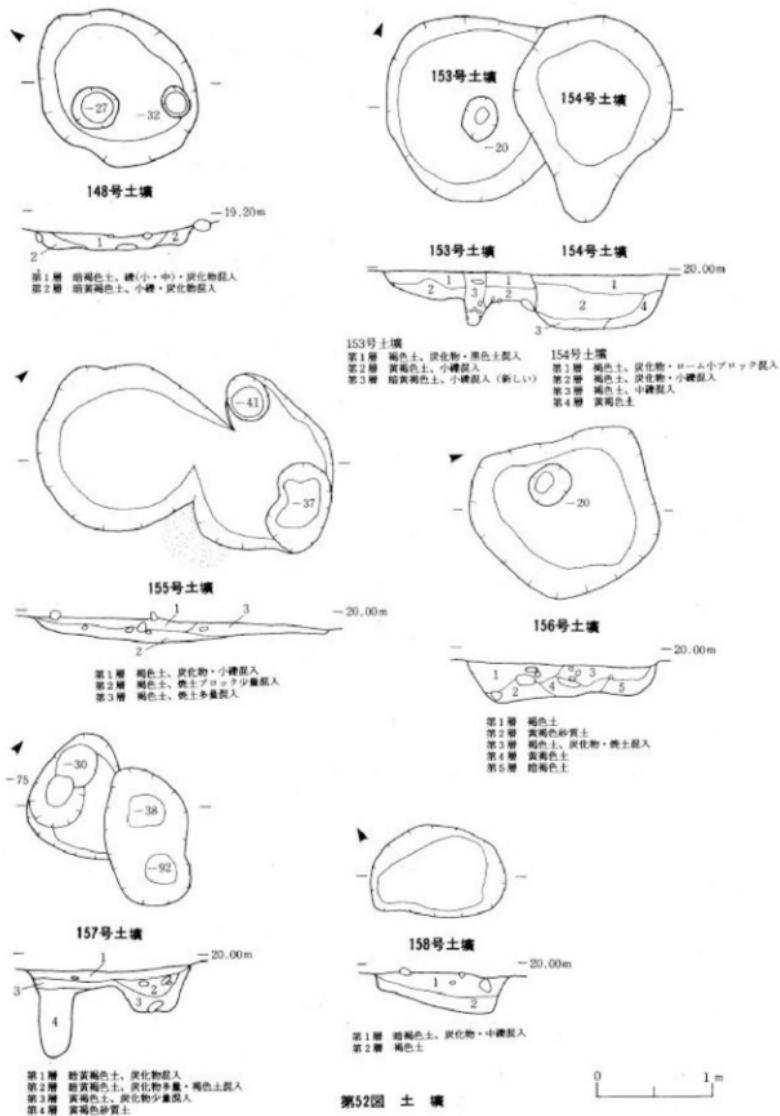




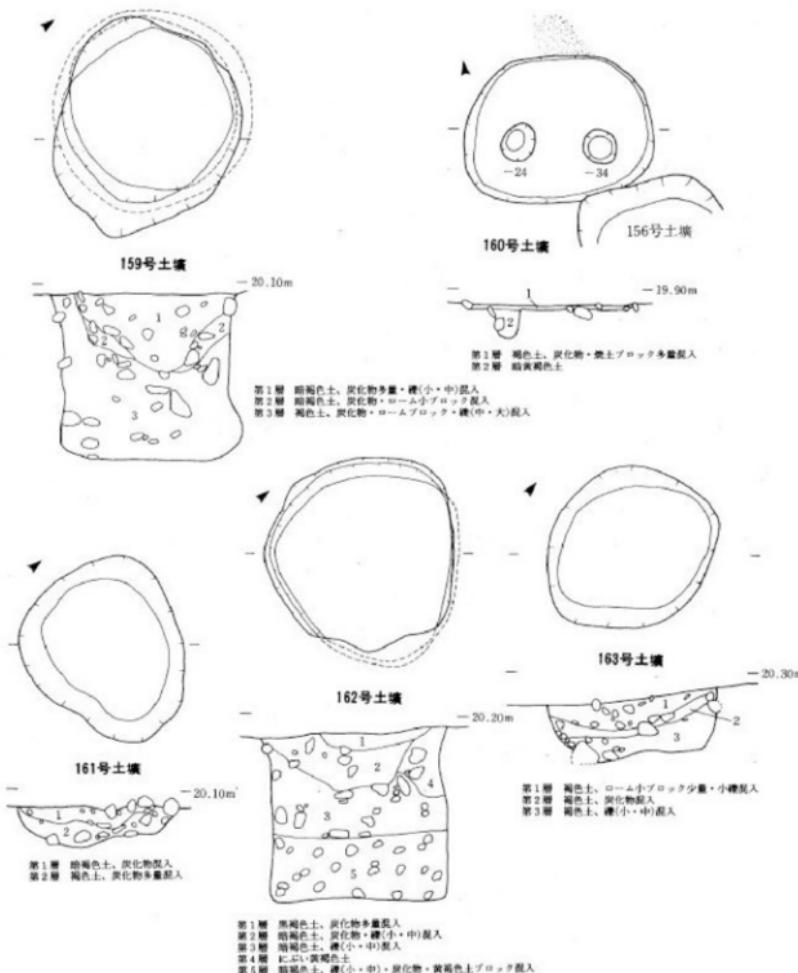
第50図 土 壤



第51图 土 壤

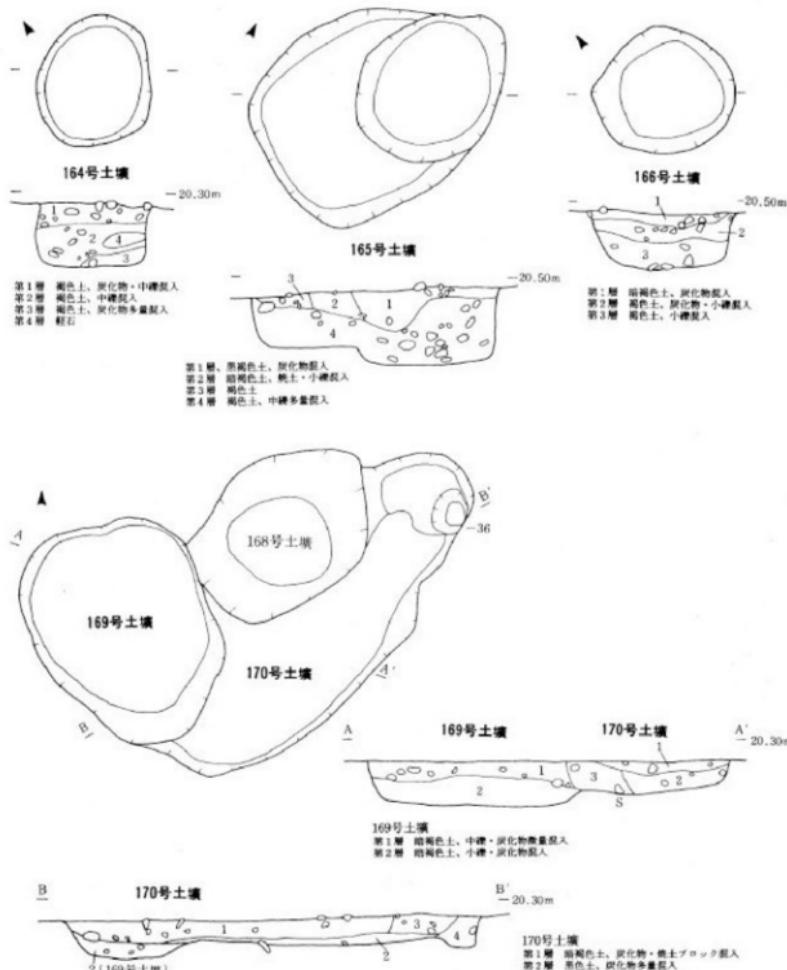


第52図 土 壤

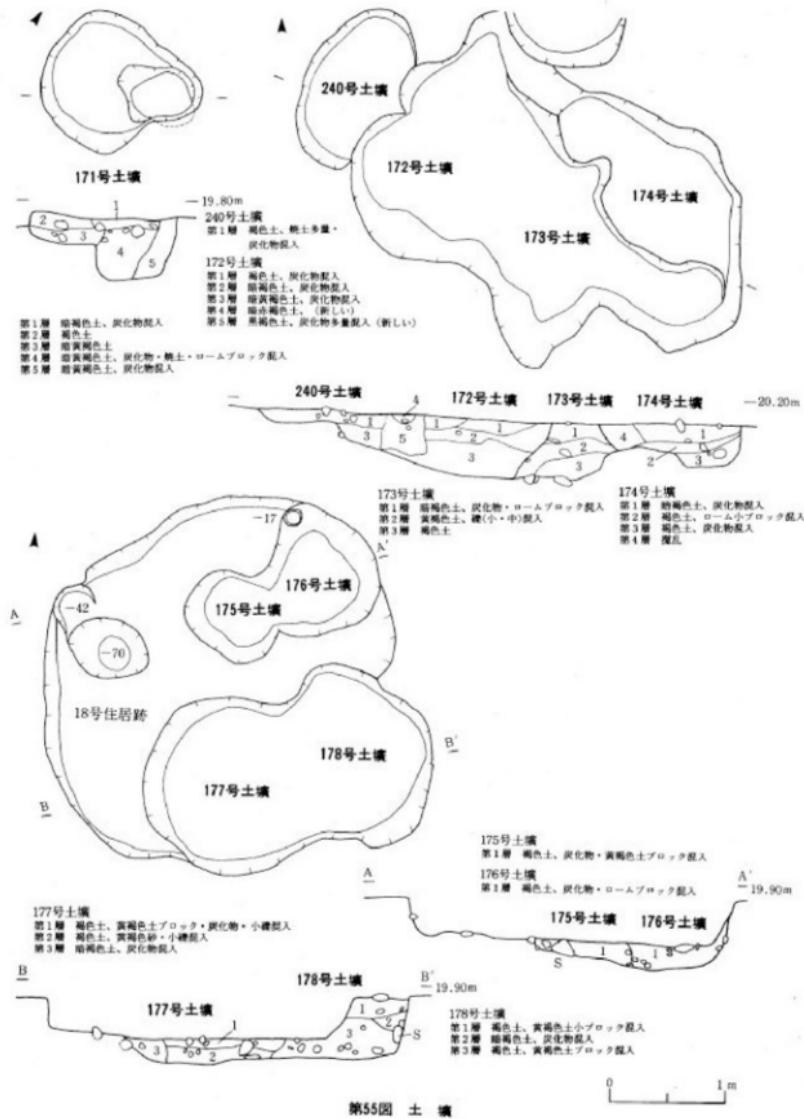


第53図 土 壤

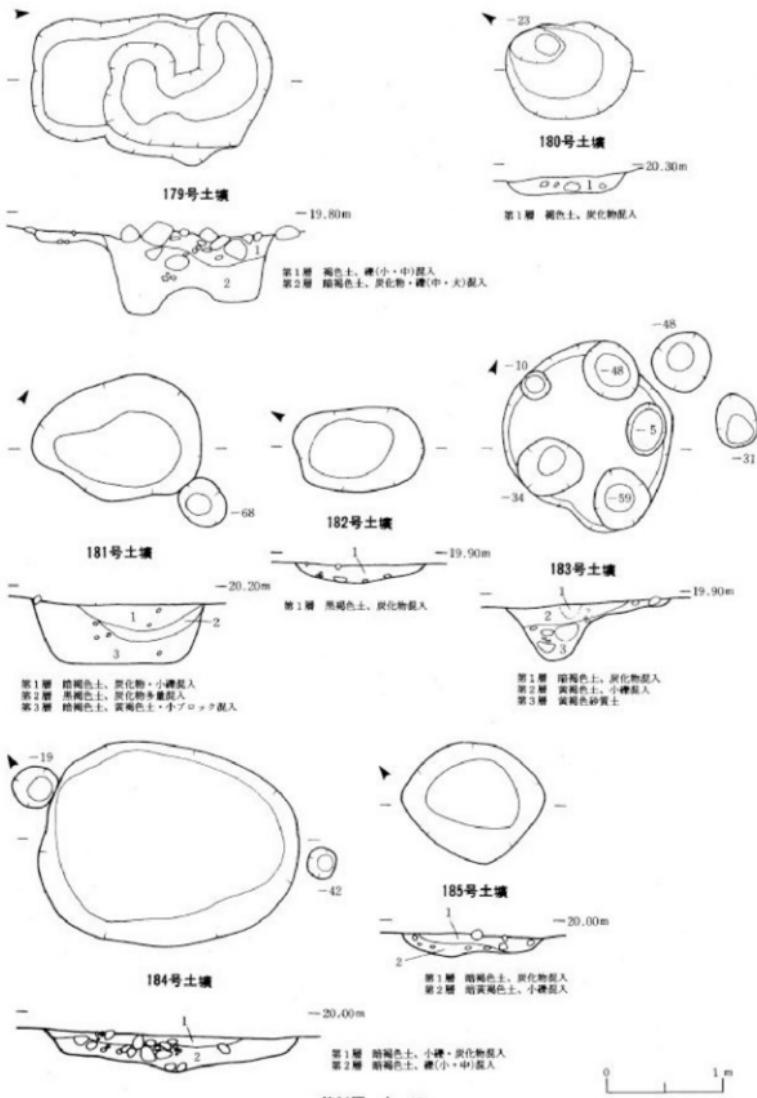




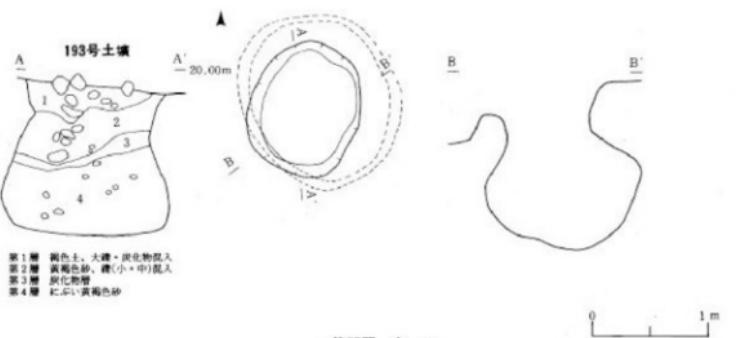
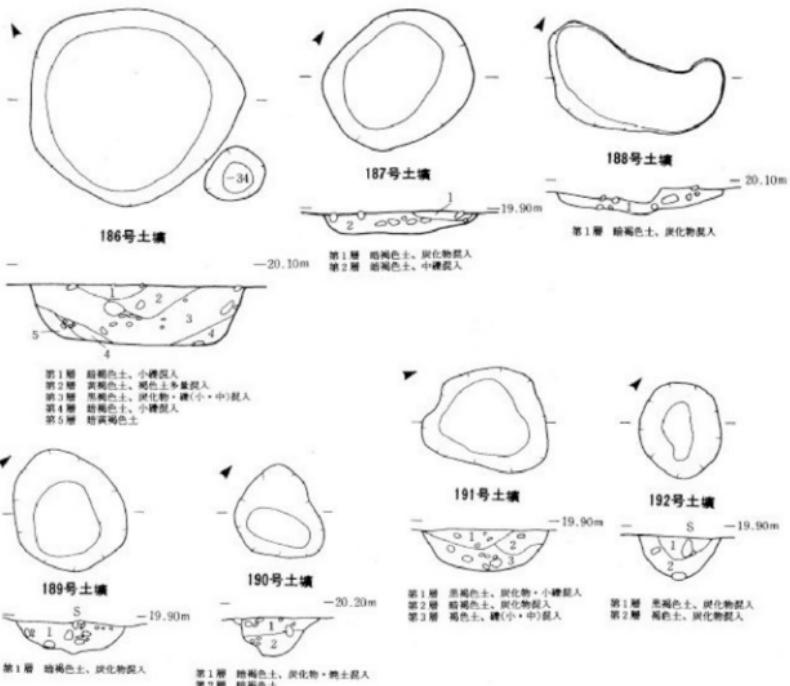
第54図 土 壤



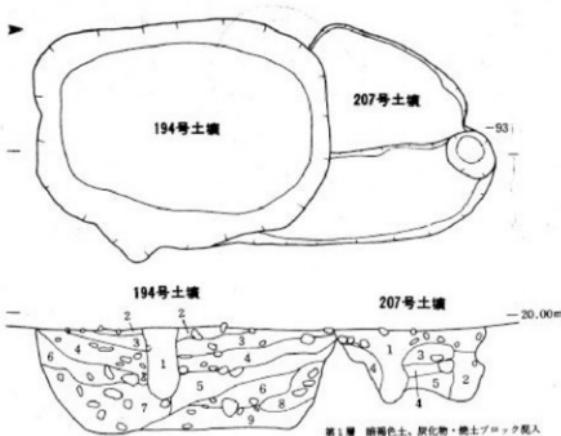
第55図 土 壤



第56図 土 壤

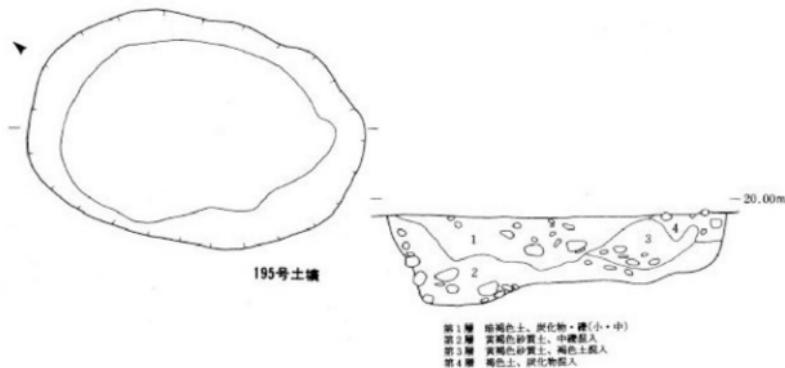


第57图 土 壤



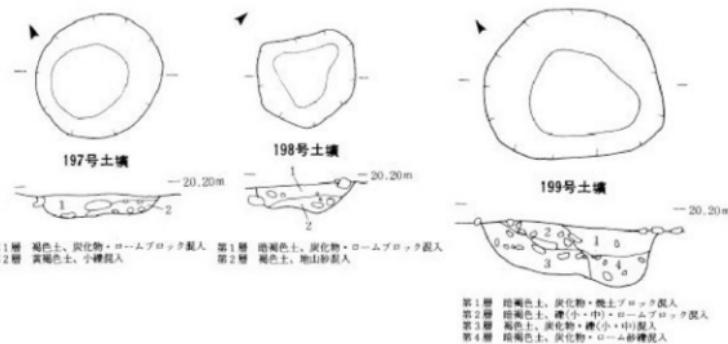
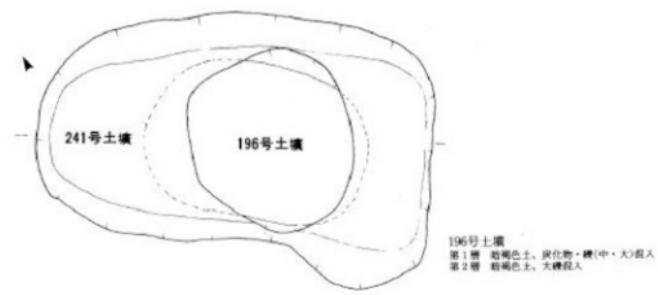
第1層 暗褐色土、炭化物・小磚多量混入(新しい)
第2層 暗褐色土、炭化物・土ブロック混入
第3層 暗褐色土、炭化物・土ブロック混入
第4層 暗褐色土、炭化物・礫(小・中)混入
第5層 黒褐色土、炭化物・中磚混入
第6層 黒褐色土、炭化物多量
第7層 暗褐色土、大磚片多量・炭化物多量混入
第8層 暗褐色土、土質片多量・炭化物多量混入
第9層 暗褐色土、礫(中・大)混入

第1層 暗褐色土、炭化物・土ブロック混入
第2層 黒褐色土
第3層 黄褐色砂質土、褐色土混入
第4層 黄褐色砂
第5層 黄褐色砂、褐色砂多量混入



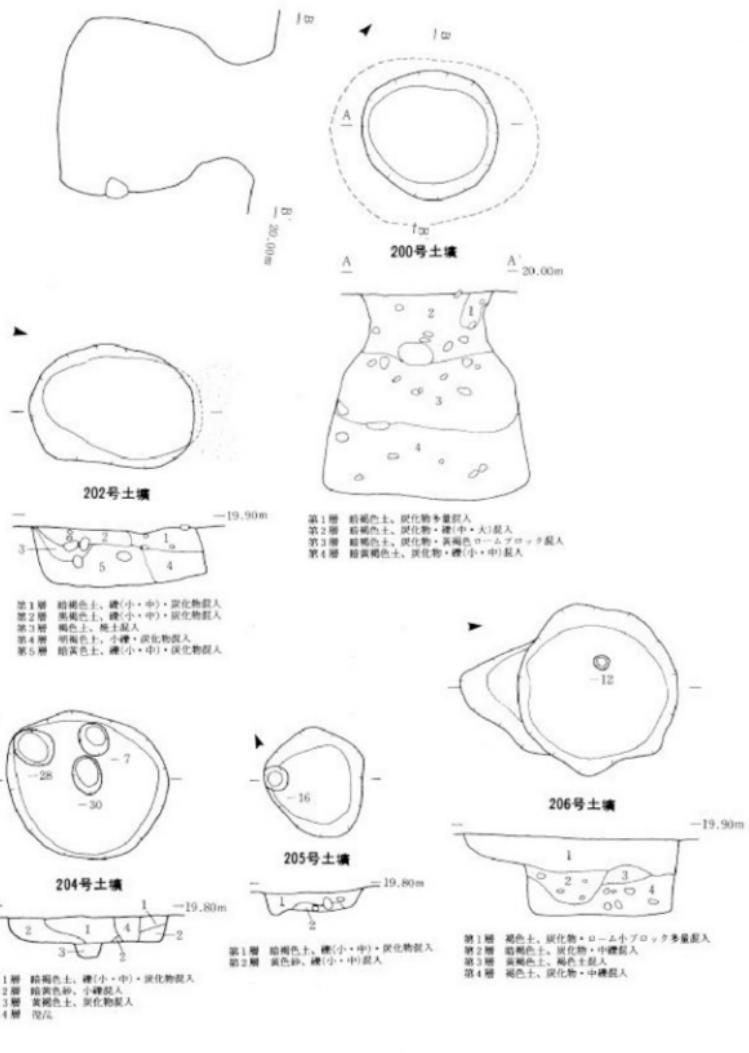
第1層 暗褐色土、炭化物・礫(小・中)
第2層 暗褐色砂質土・小磚片
第3層 黄褐色砂質土、褐色土混入
第4層 黑褐色土、炭化物混入

第58図 土 壤



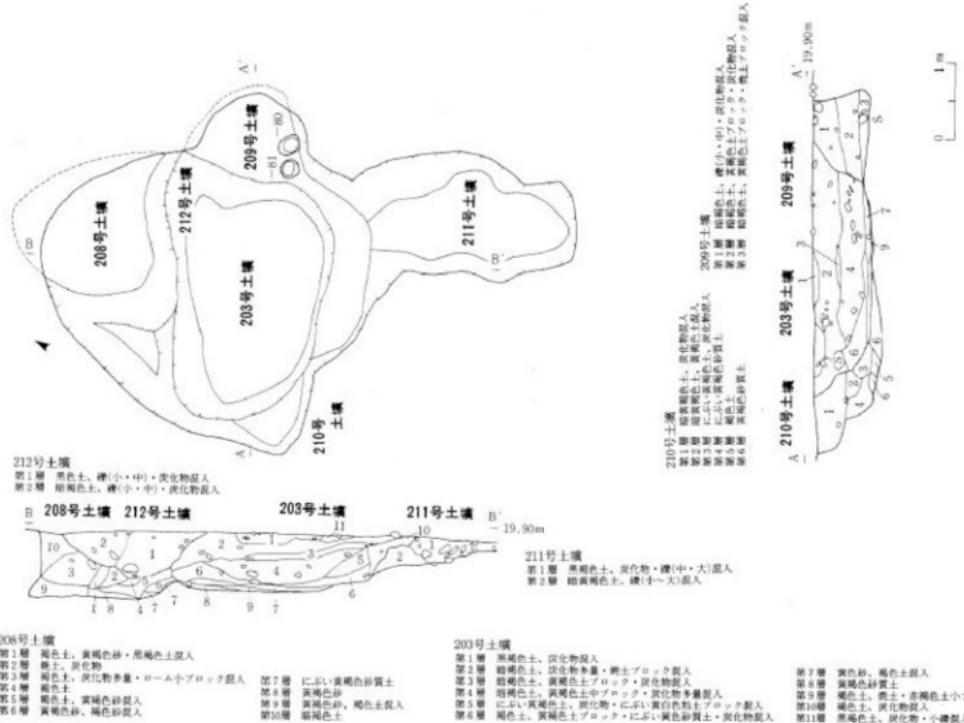
第59図 土 塗

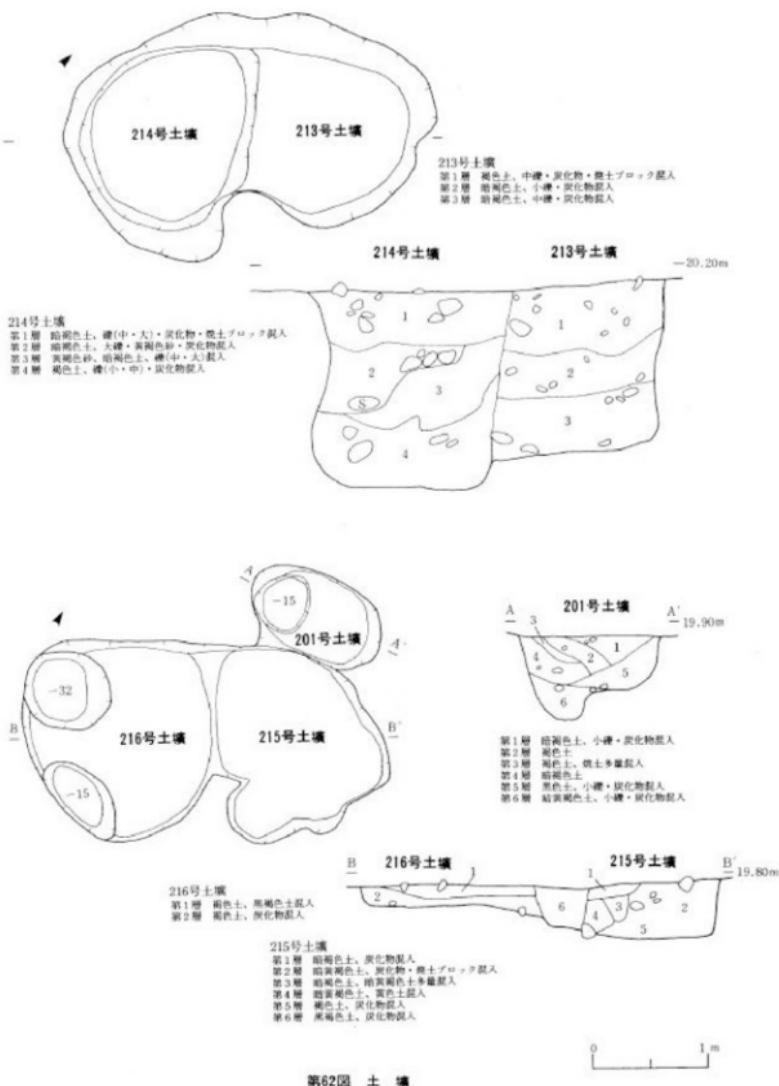




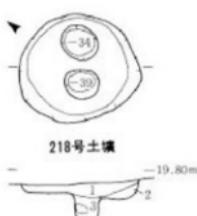
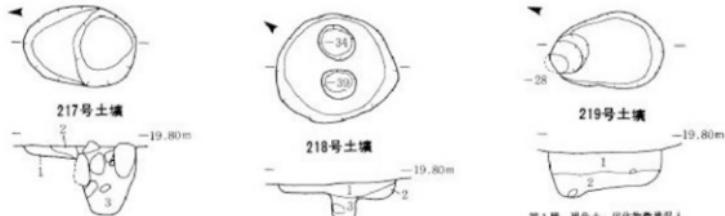
第60図 土 壤

第61圖 土 壤





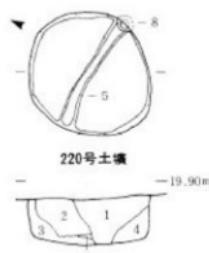
第62図 土 壤



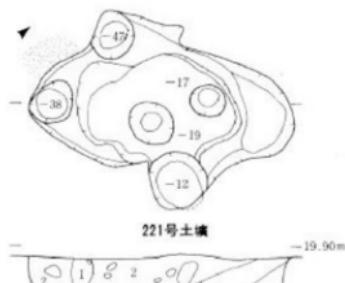
第1層 黄褐色土
第2層 褐色土、黄褐色土混入
第3層 暗褐色土、炭化物・ロームブロック混入

第1層 褐色土、黄褐色土混入
第2層 褐色土
第3層 黄褐色土

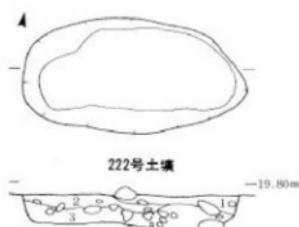
第1層 褐色土、炭化物混入
第2層 -25



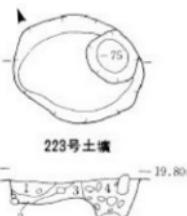
第1層 細褐色土、炭化物混入
第2層 褐色土、炭化物混入
第3層 暗黃褐色土
第4層 黄褐色土



第1層 黄褐色土、褐色土混入
第2層 褐色土、炭化物・礫(小・大)混入
第3層 暗黃褐色土、炭化物混入
第4層 黄褐色土、炭化物混入
第5層 暗褐色土、炭化物混入
第6層 暗褐色土、炭化物・ローム小ブロック混入
第7層 暗黃褐色土、炭化物・ローム小ブロック混入



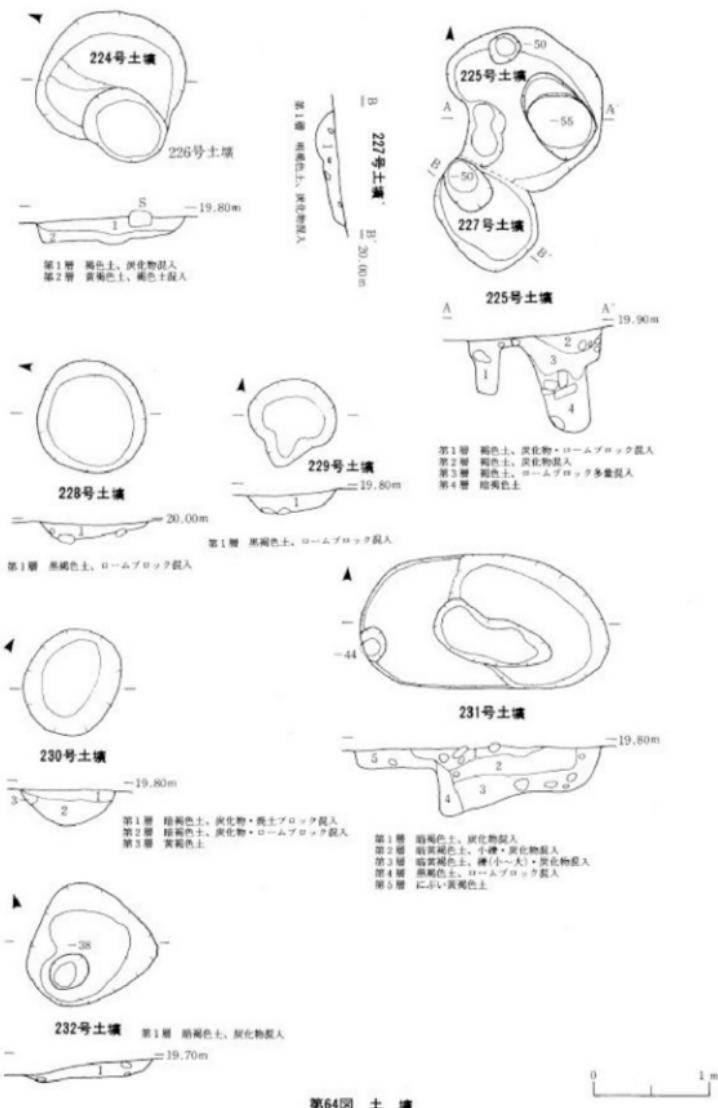
第1層 褐色土、炭化物混入
第2層 褐色土、炭化物混入
第3層 -にい黄褐色土、礫(小・大)混入



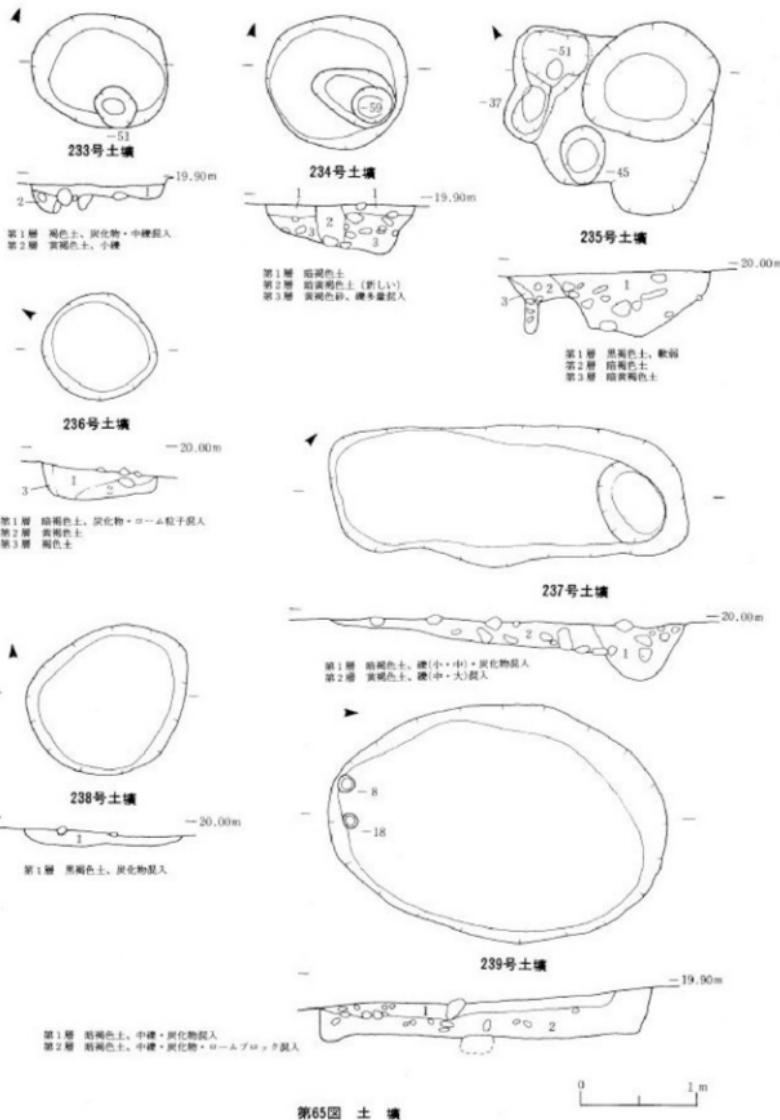
第1層 橙色土、炭化物混入
第2層 橙色土、褐色土混入
第3層 橙色土、黄褐色土、炭化物混入
第4層 橙褐色土、小礫混入



第63図 土 塚

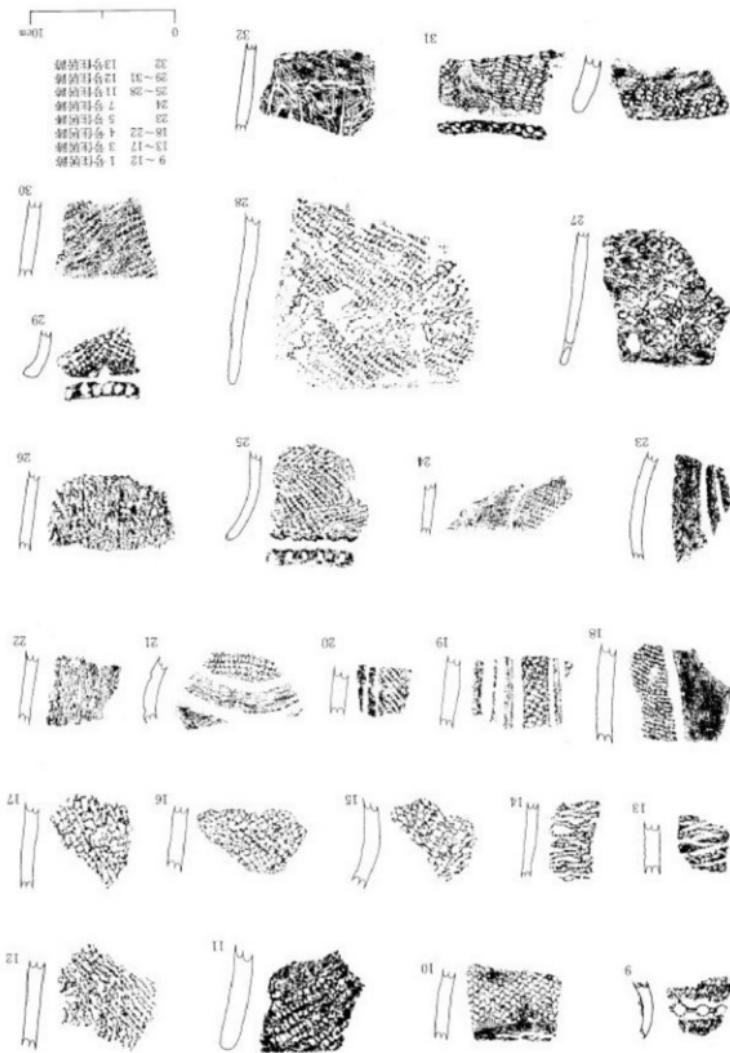


第64図 土 壤



第65図 土 壤

圖99 圖 遺物出土土器



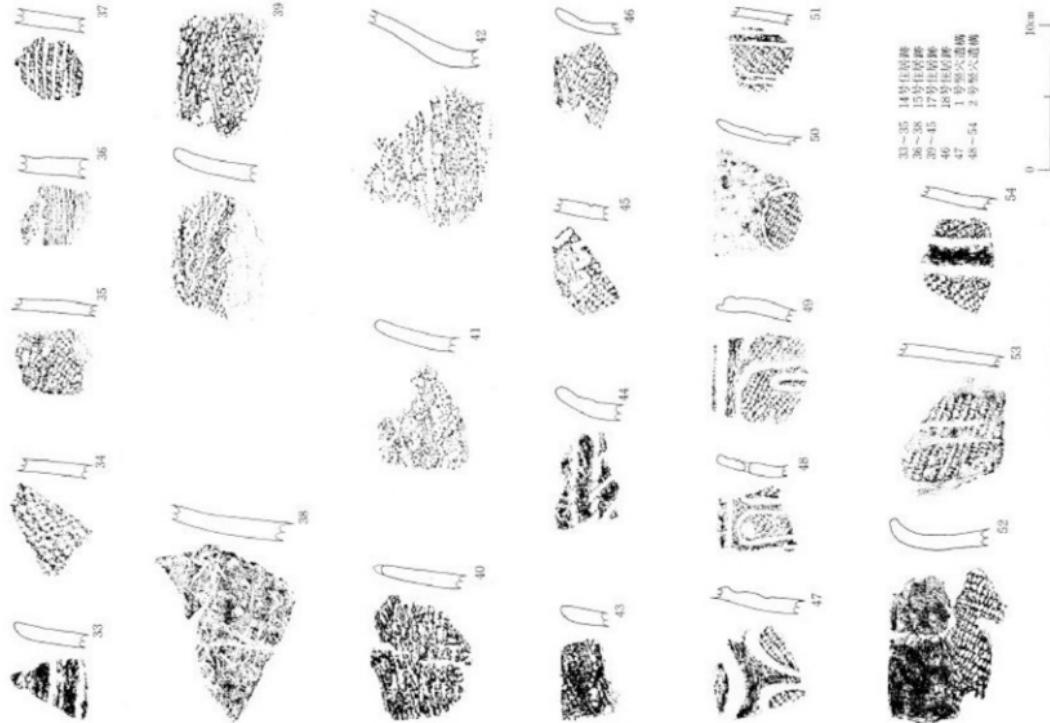
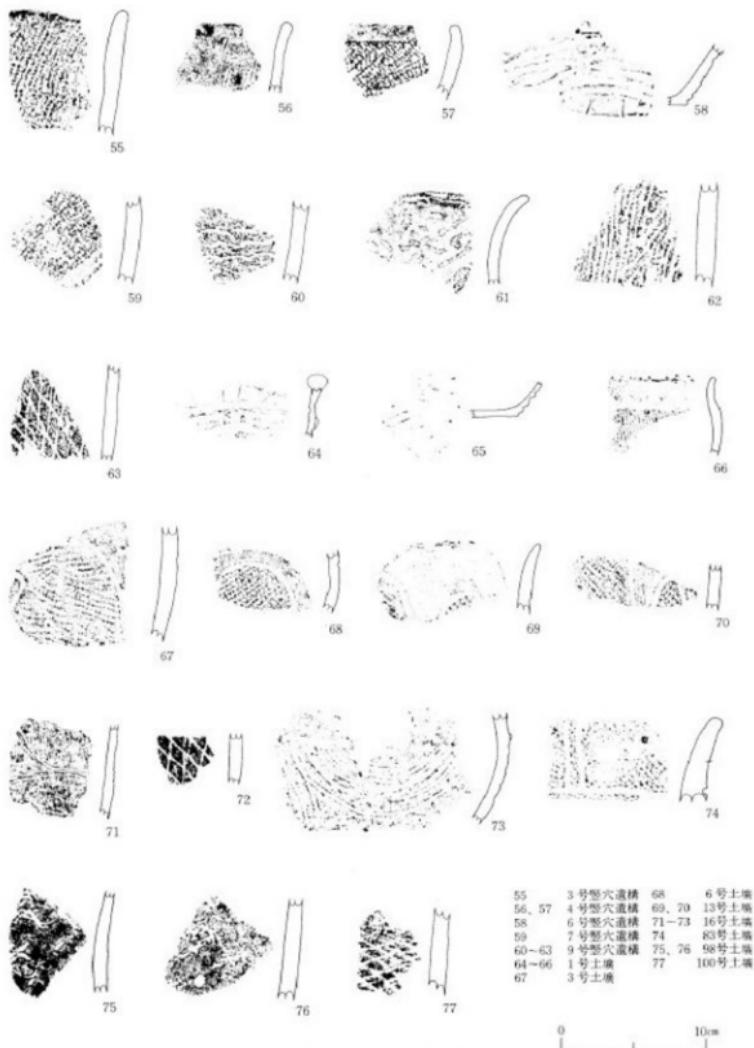
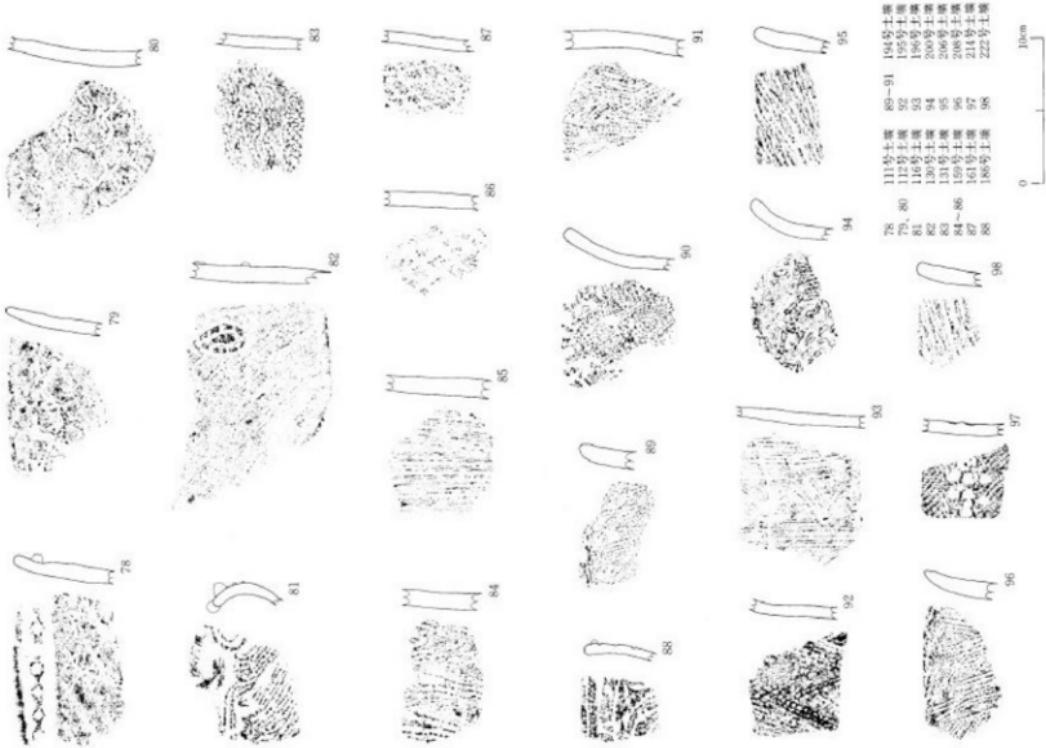


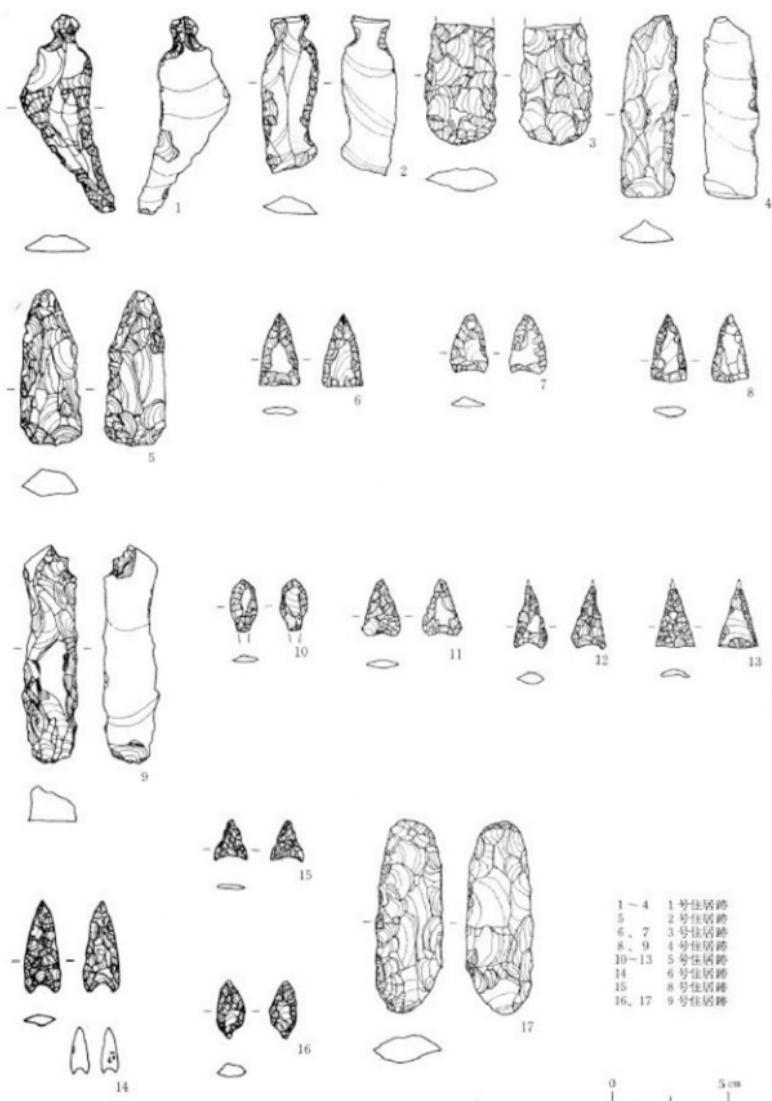
图67图 陶器内出土土器



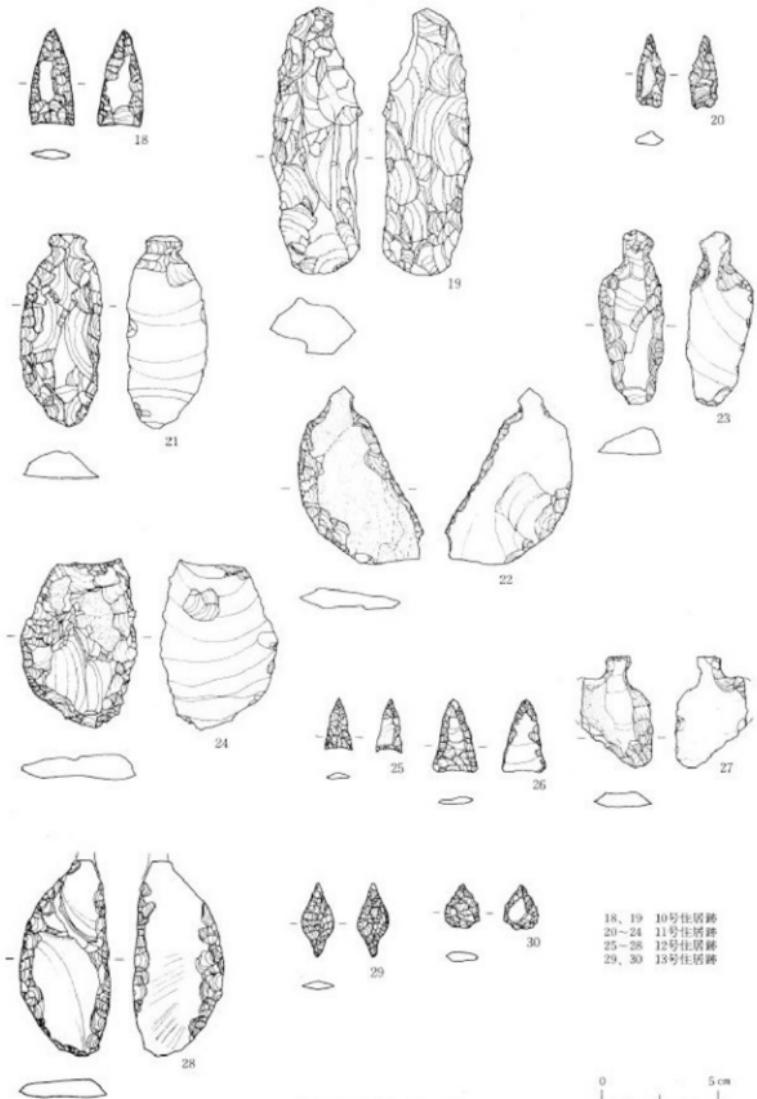
第68図 遺構内出土土器



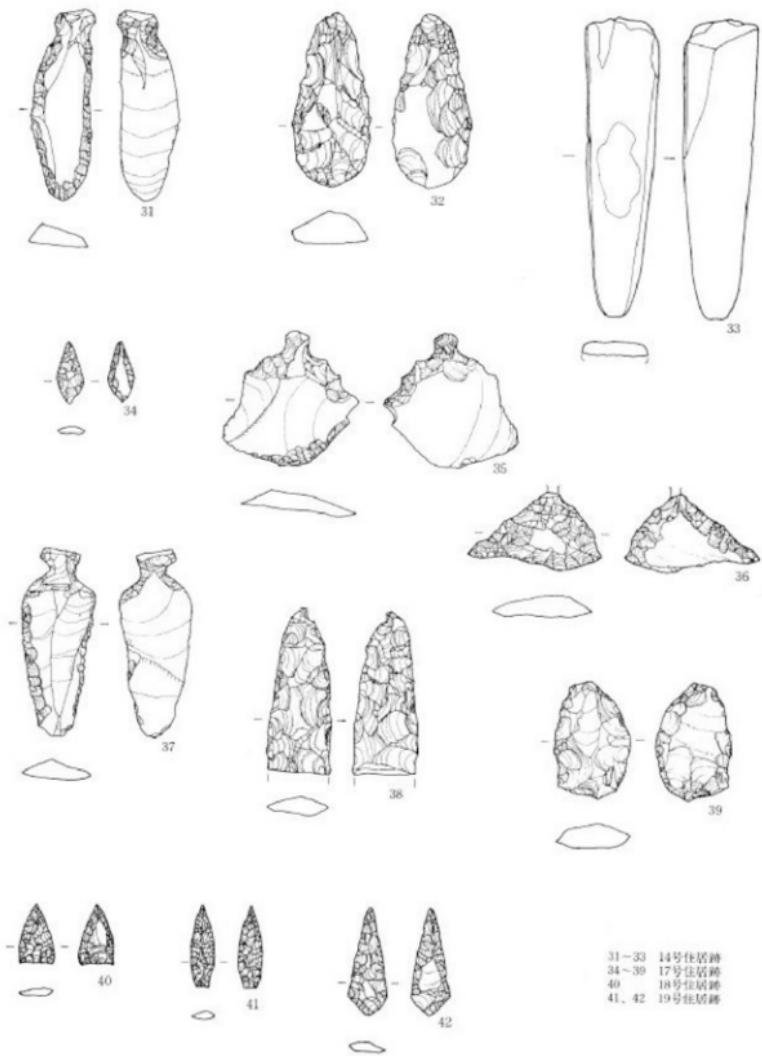
第69图 旗峰内出土土器



第70図 遺構内出土石器

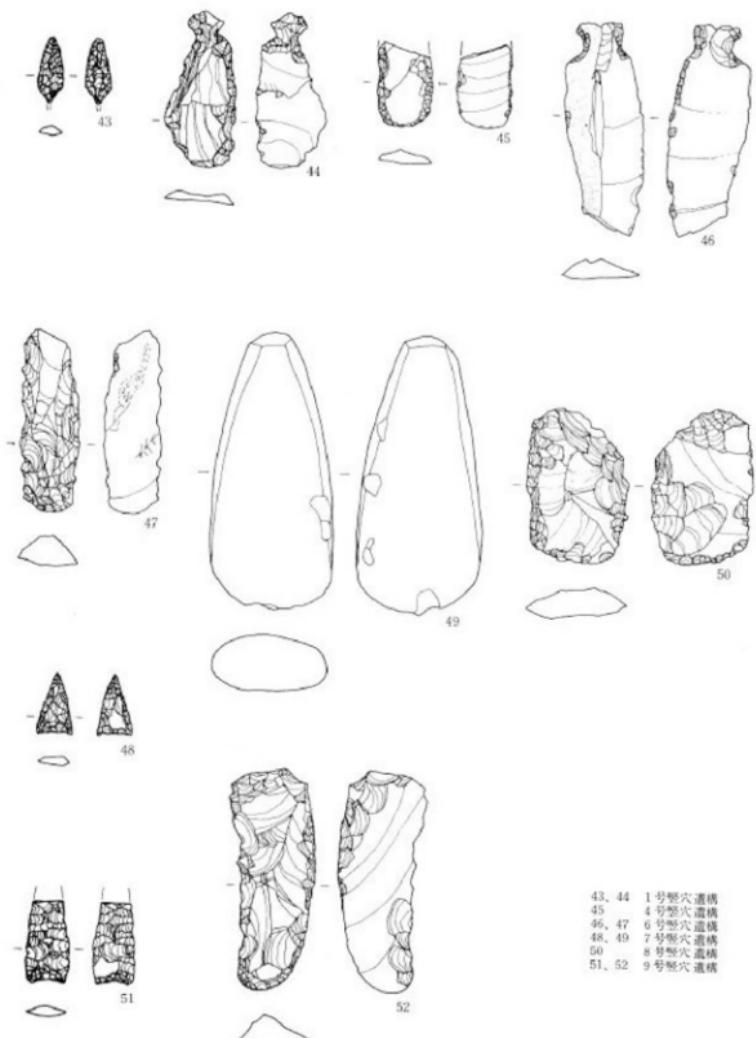


第71図 造構内出土石器



第72図 造構内出土石器

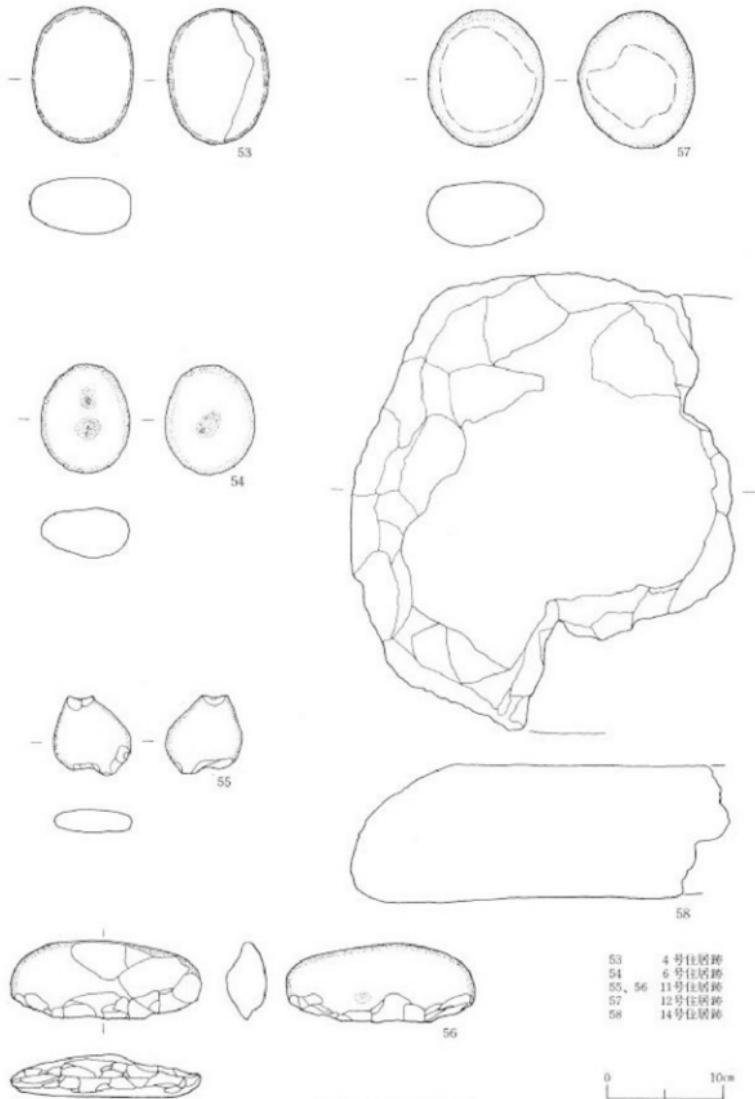
0 5 cm



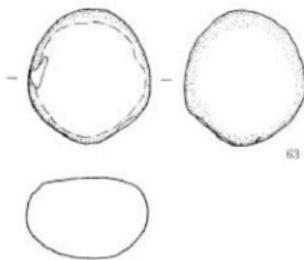
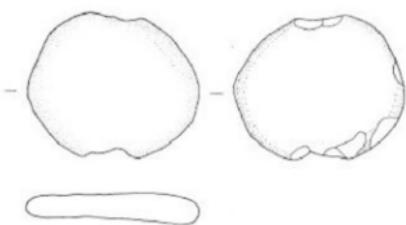
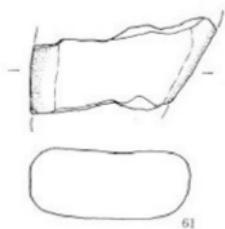
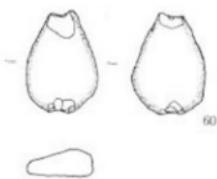
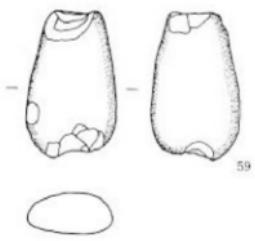
43、44 1号壁穴遺構
 45 4号壁穴遺構
 46、47 6号壁穴遺構
 48、49 7号壁穴遺構
 50 8号壁穴遺構
 51、52 9号壁穴遺構



第73図 遺構内出土石器



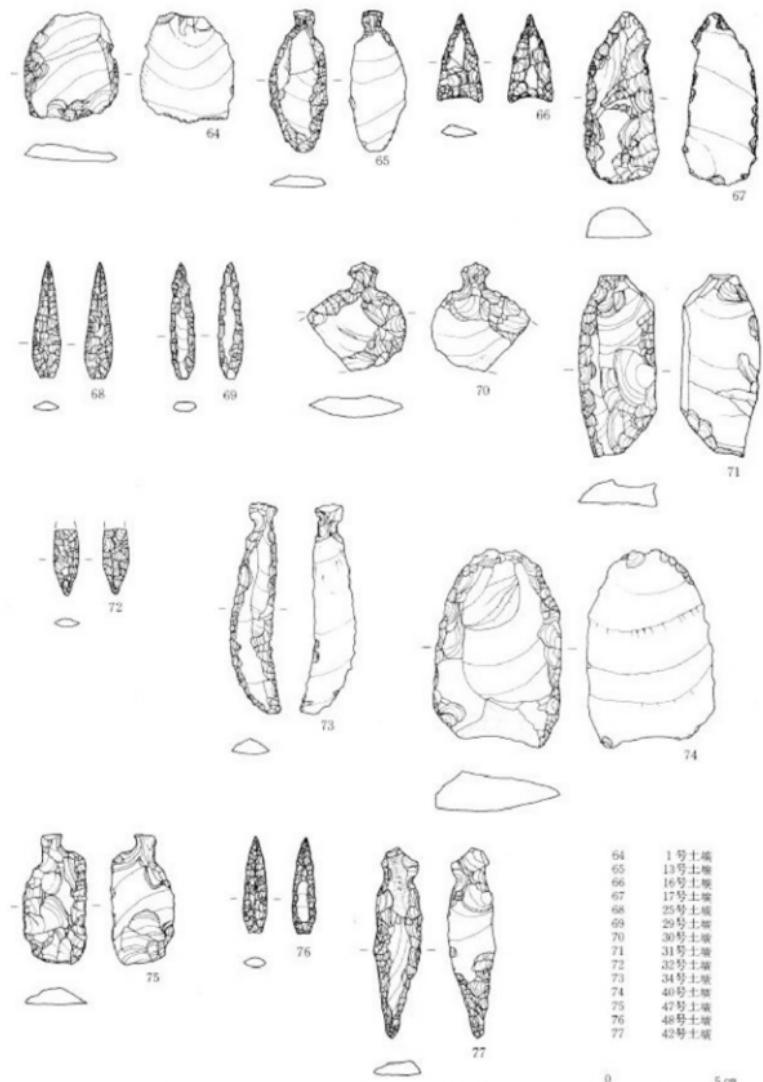
第74図 造構内出土石器



- 59 16号住居跡
60 18号住居跡
61 1号整穴遺構
62 3号整穴遺構
63 9号整穴遺構

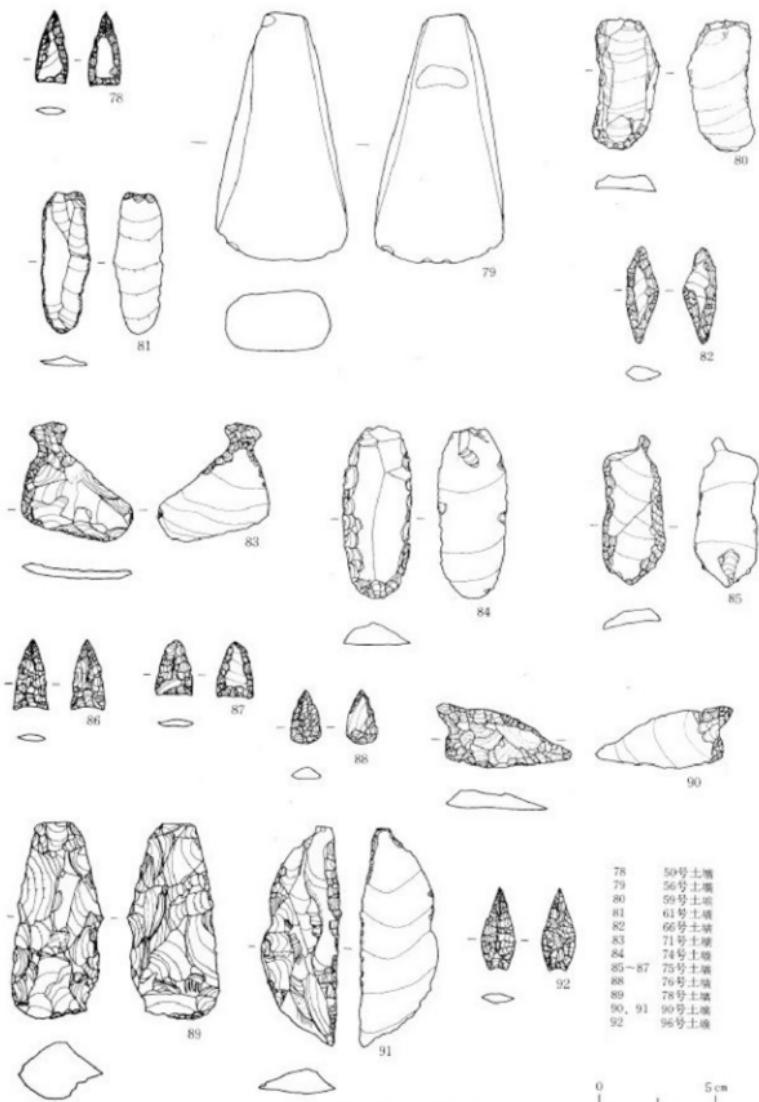
0 10cm

第75図 遺構内出土石器

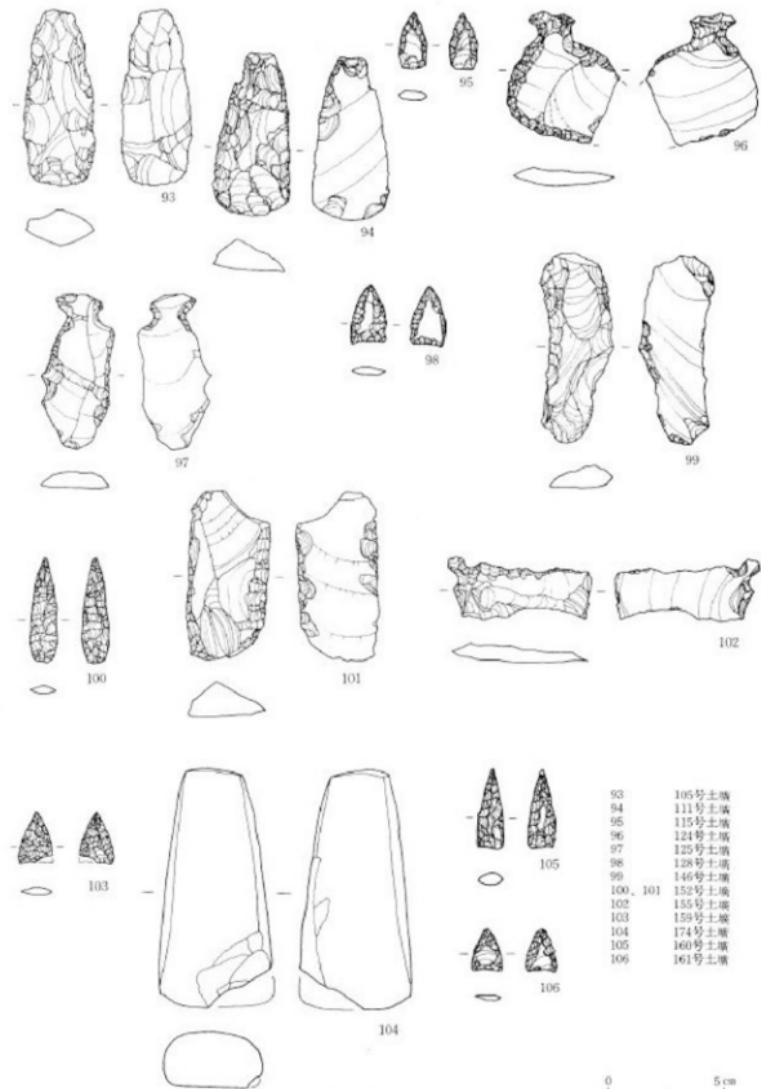


第76図 造構内出土石器

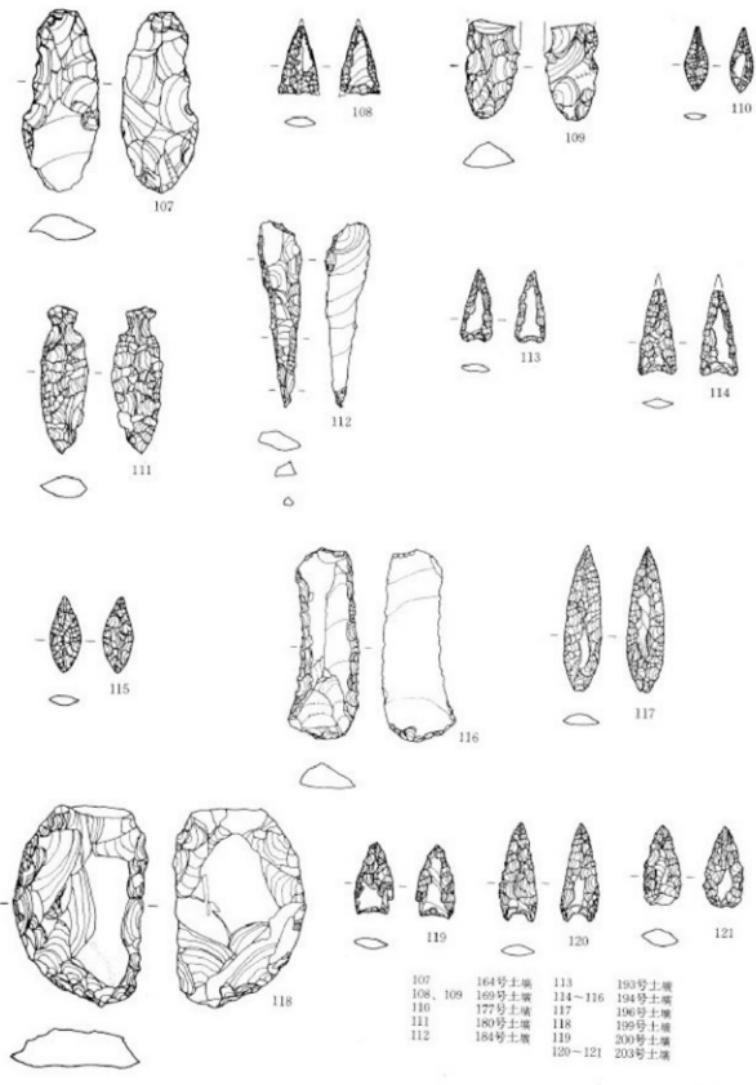
0 5 cm



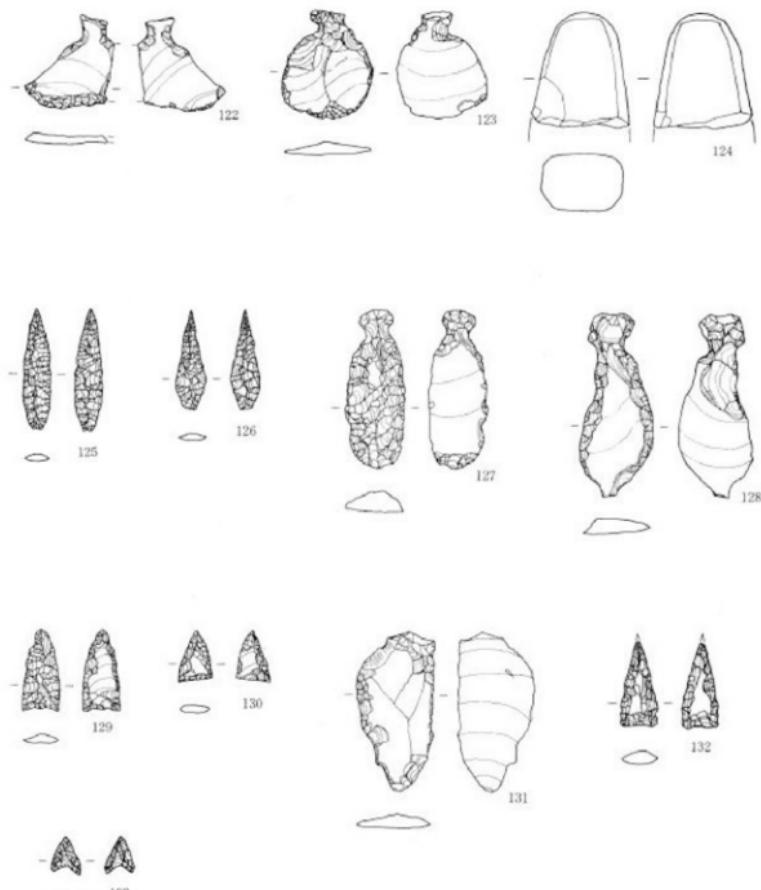
第77図 遺構内出土石器



第78図 遺構内出土石器



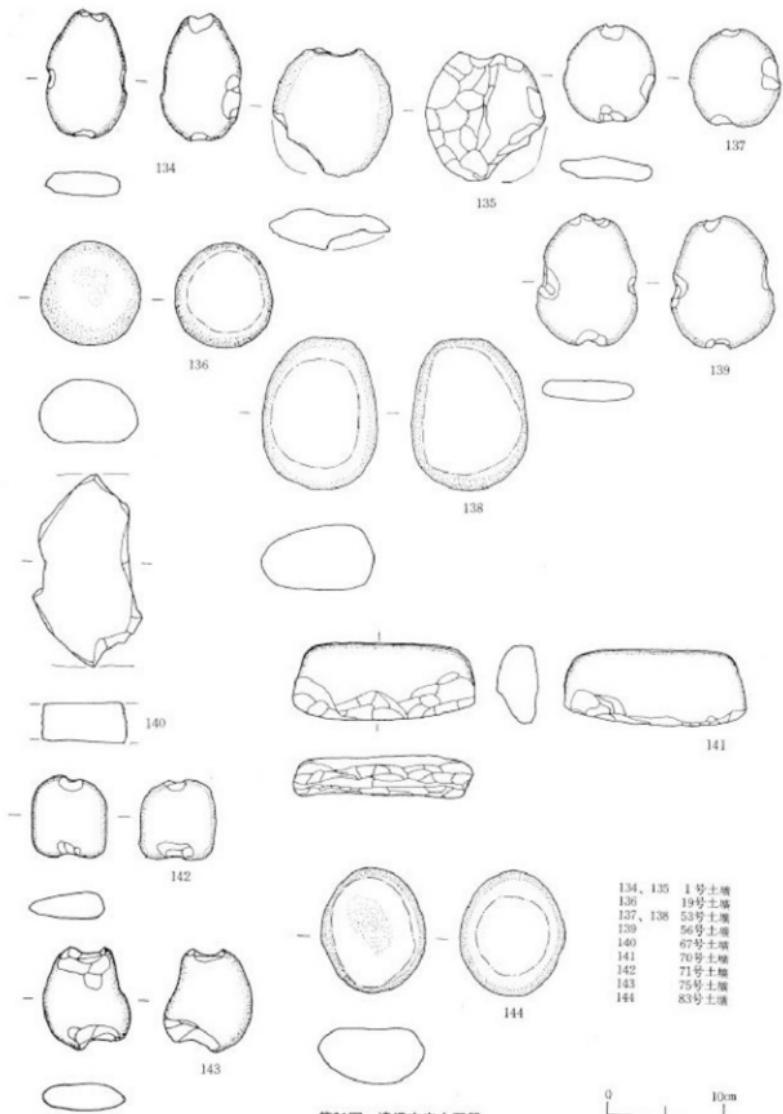
第79図 遺構内出土石器



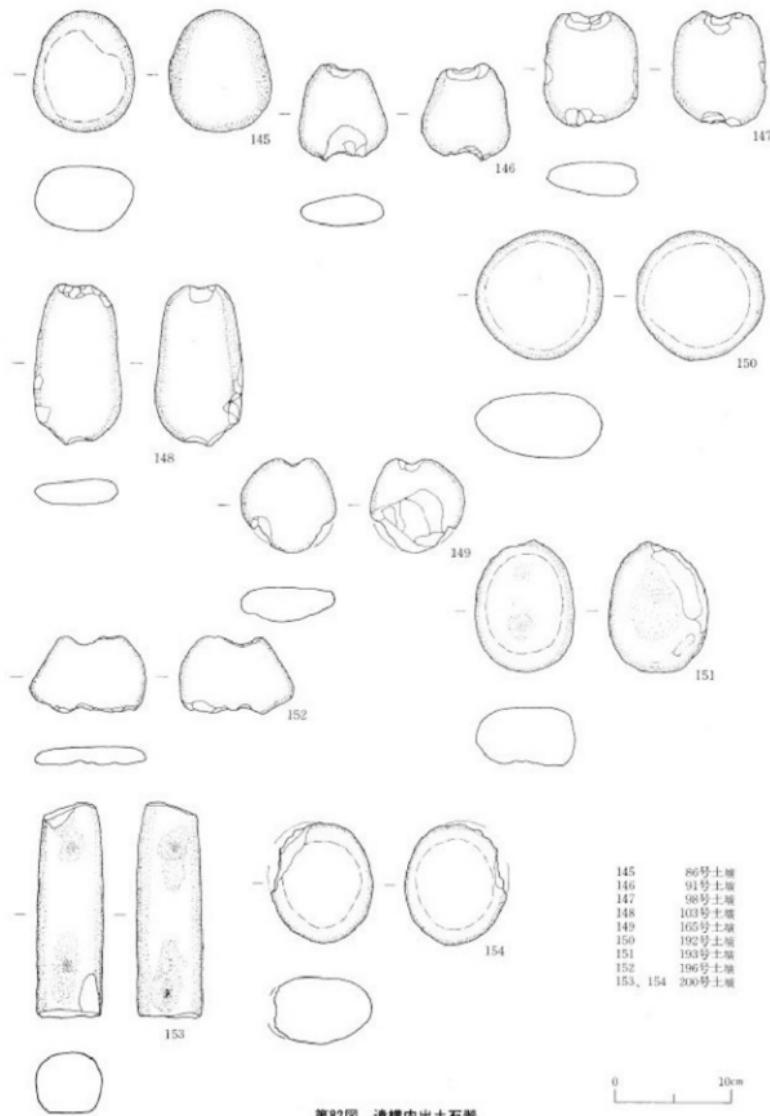
122	203号土壤	129~131	222号土壤
123	204号土壤	132	233号土壤
124	206号土壤	133	235号土壤
125, 126	207号土壤		
127, 128	214号土壤		

第80図 遺構内出土石器





第81図 遺構内出土石器



第82图 遗构内出土石器

遺構外出土土器

遺構外出土土器を施文様により群に大別し、さらに類に細別した。なお、遺物包含層における層位的な区別は認められなかった。

第I群土器（第84、85図104～150）

1類（104～106）

不整撚糸文を施すものである。全て深鉢形土器で、104、105は口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。

2類（107～124）

綴文を施すものである。全て深鉢形土器で、107、108の口縁部は大きく外反し、121は頸部が内傾して立ち上がる。117、118の口縁部には粘土紐を貼付し、117は斜方向、118は正面から刺突を施している。

3類（125～130）

羽状綴文を施すものである。全て深鉢形土器で、L r + R l 無筋原体を用いていると考えられる。これらは綴文原体の上下を持ち変えて菱形の構図を作り出しており、125、126、129、130は顯著に認められる。

4類（131～136）

沈線で文様を作り出すものである。全て深鉢形土器で、口縁部は134が垂直に、他は外反しながら立ち上がる。131、134は口縁部に鋸歯状に施し、地文はL R 単節斜綴文（横位回転）で、口唇部にも地文が認められる。132は鋸歯状文が大きく施され、口唇部と鋸歯状文の間に「V」字状の文様が入る。133は鋸歯状文が数段施されるが、部分的に沈線を斜方向へ施して複雑な文様を作り出している。135、136は口縁部に平行沈線を施すもので、口唇部には刺突が認められる。135の沈線間と上から2本目の沈線の下には弧状に文様を施している。いずれも地文はL R 単節斜綴文（横位回転）で、太い原体を用いている。

5類（137～141）

口縁部に撚糸圧痕や單輪絡条体圧痕を平行して施すものである。全て深鉢形土器で、137、138は口縁部がほぼ垂直に、140、141は口縁部が外反しながら立ち上がる。140は上下2条の撚糸圧痕間に爪形文が施される。141には單輪絡条体圧痕が認められる。

6類（142～146）

網目状然糸文を施すものである。全て深鉢形土器で、142は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。

7類（147、148）

撚糸文を施すものである。いずれも深鉢形土器の胴部である。

8類（149、150）

木目状然糸文を施すものである。いずれも深鉢形土器の胴部で、撚糸は2条1組となるように軸に巻付けている。

第II群土器（第83図99、第85、86図151～166）

1類（151～156）

口縁部に粘土紐を渦巻状に貼付して文様を作り出すものである。全て深鉢形土器で、151、154の口縁部は内凹し、151は丸みのある山形口縁と考えられる。

2類（99、157～166）

沈線区画の磨消帯を有するものである。全て深鉢形土器で、磨消帯は幅が狭く、縦位方向へ展開するものが多い。99は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。口縁部に粘土紐を丸く貼付して円形文を4ヶ所に作り、各円形文を沈線で連絡している。また、円形文の下方に一回り小さな円形文を作り、各円形文の間に沈線で円形文を施している。地文はL R 単節斜綴文（縦位回転）である。157、161は口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。

第三群土器（第86図167～171）

数条の沈線及び平行沈線により文様を作り出すものである。沈線は直線・弧状・曲線・長方形等に施されるが、170には連鎖状文が認められる。167は鉢形土器で、頸部が内湾して口縁部が直立するものである。171は壺形土器の口縁部である。口唇部下方に平行沈線が巡り、頸部に肉厚の帯を巡らし、その中に沈線で円形文や長方形文を施している。

第四群土器（第83図100～103、第86図172～178）

1類（100、172、173）

口縁部に入組文を施すものである。全て鉢形土器で、100は口縁部にB状突起をもつ。頸部に平行沈線が巡り、地文はR L半節斜繩文（横位回転）である。他は口縁部が内湾しながら立ち上がり、173の口唇部にはB状突起をもつ。

2類（174）

口縁部に「の」字状文を連続して施すものである。口縁部が内湾しながら立ち上がる鉢形土器である。

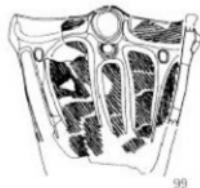
3類（175～177）

口縁部に刻み目文を施すものである。全て鉢形土器で、口縁部は緩く内湾しながら立ち上がる。

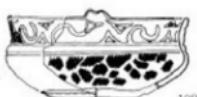
4類（178）

口縁部に平行沈線を施すものである。鉢形土器で、口縁部は緩く内湾しながら立ち上がる。

5類（101、102）



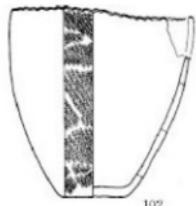
99



100



101



102



103



第83図 遺構外出土土器

地文のみのものである。101は小型の壺形土器で、地文はRL単節斜縞文（横位回転）である。102は鉢形土器で、口唇部は小波状をなしている。地文はRL単節斜縞文（横位回転）である。

6類 (103)

無文のものである。小型の壺形土器で、丁寧に磨かれている。

第V群土器 (第87図179、180)

須恵器である。いずれも甕で、内外面に平行印板痕が認められる。

第VI類土器 (第87図181～188)

中世陶器で、全て描跡の破片である。

土製品 (第88図1～22)

再利用土製品である。土器片を再利用したもので、円形ないしは橢円形を呈するものである。

遺構外出土石器

出土した石器は、石鎚・石錐・石匙・石槍・ヘラ状石器・搔器・削器・両面加工石器・磨製石斧・石劍・石鍤・半円状扁平打製石器・くぼみ石・磨石・石皿である。

石鎚 (第89、90図155～183)

71点出土している。形態はI類：有茎鎚、II類：無茎鎚、III類：尖基鎚、IV類：円基鎚に分けられる。石質は硬質頁岩が多く、黒曜石も認められる。

I類：基部が直線的なもの

II類

A：基部に抉入があり、曲線的なもの

B：基部が直線的なもの

III類：基部が尖るもの

IV類：基部が丸みをおびるもの

石錐 (第90図184、185)

2点出土している。棒状の錐部と短めの錐部からなるものである。石質はいずれも硬質頁岩である。

石匙 (第90～92図186～208)

70点出土している。形態はI類：縦型石匙、II類：横型石匙に分類される。石質は硬質頁岩が多い。

I類：縦型石匙 45点出土している。刃部が2縁辺からなるもので、一端が鋸く尖るものもある。

II類：横型石匙 25点出土している。刃部が2縁辺からなるものと3縁辺からなるものがある。

石槍 (第92、93図209～215)

12点出土している。基部を尖らせているものと丸みをおびているものがある。石質は全て硬質頁岩である。

ヘラ状石器 (第93図216～223)

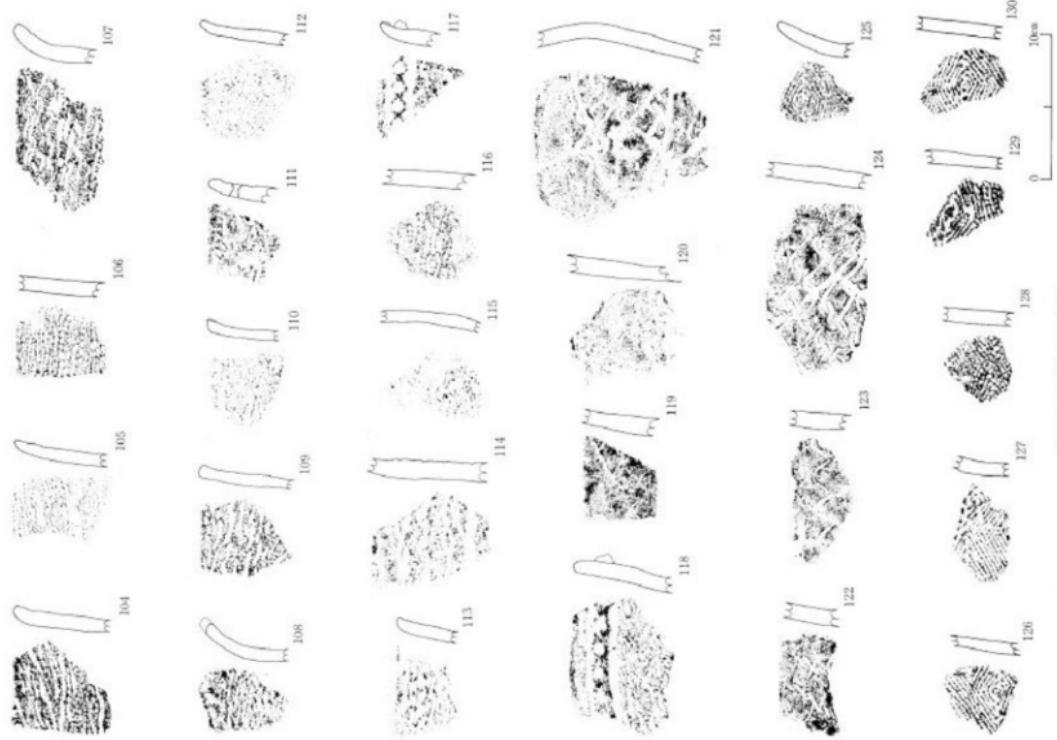
19点出土している。平面形が撥形あるいは短冊形を呈し、一端に調整を施して刃部を作り出している。石質は全て硬質頁岩である。

搔器 (第94図224、225)

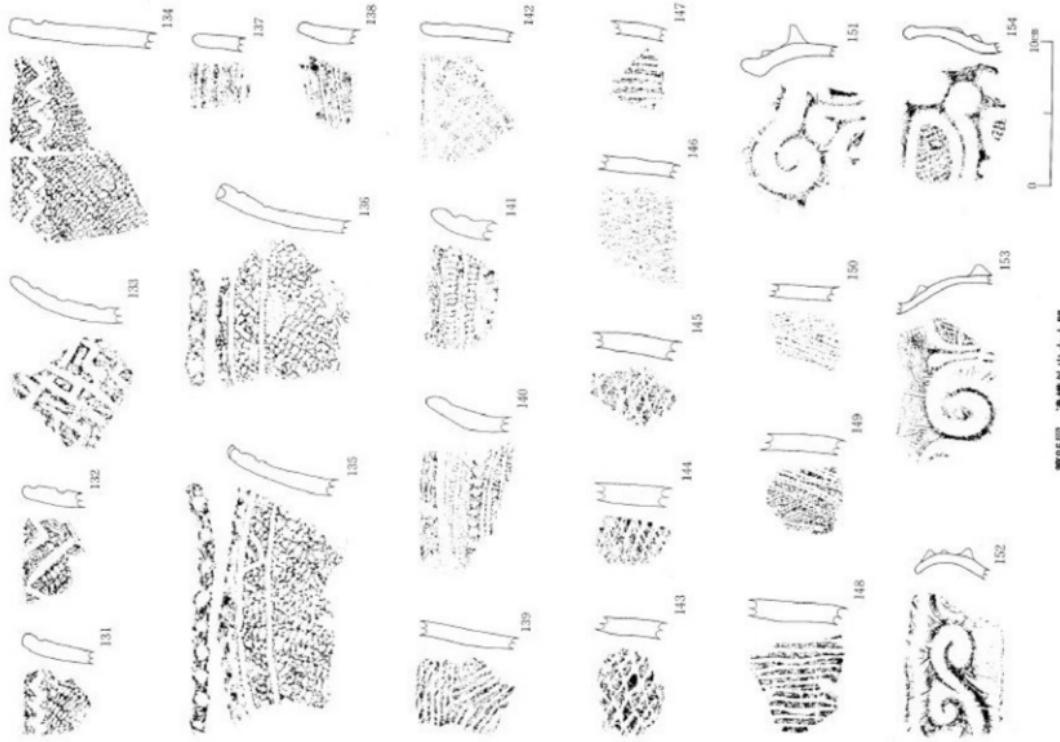
2点出土している。縁辺に調整を施して刃部を作り出している。石質はいずれも硬質頁岩である。

模式図	△	△	△	○	○
分類	I	II A	II B	III	IV
点数	3	37	5	13	13

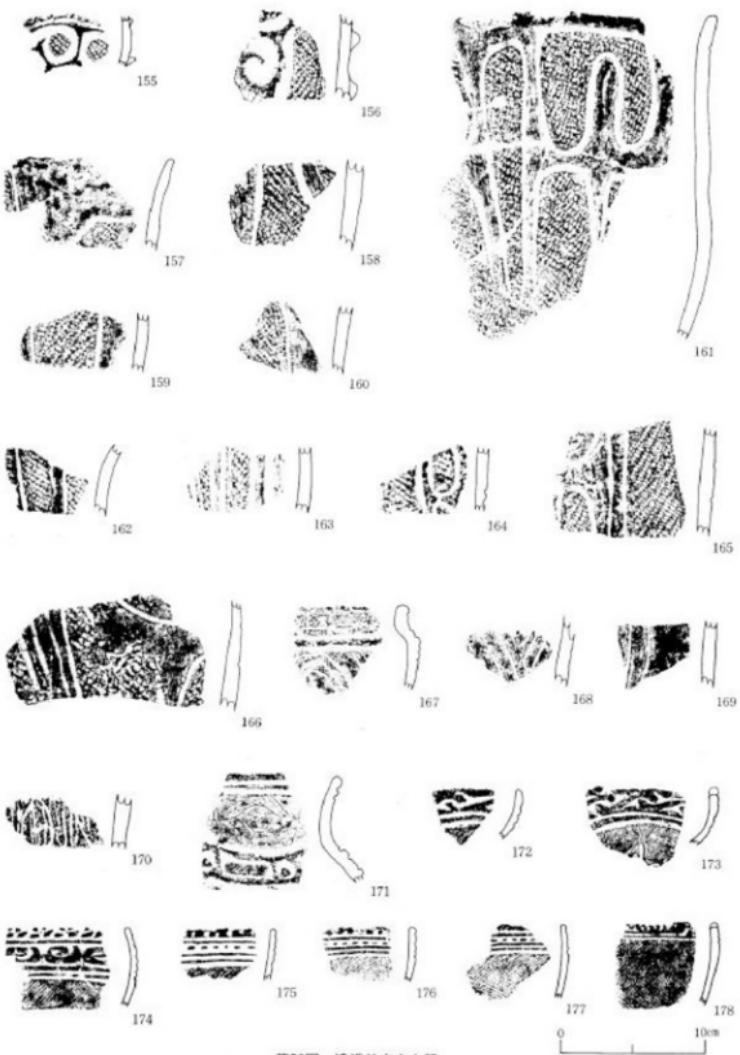
石鎚模式図



第64圖 遺構出土土器



第85图 澧澧出土土器



第86図 遺構外出土土器



179

180

181



182

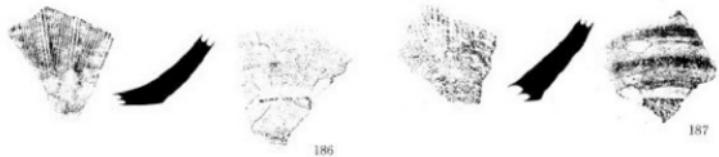
183



184



185



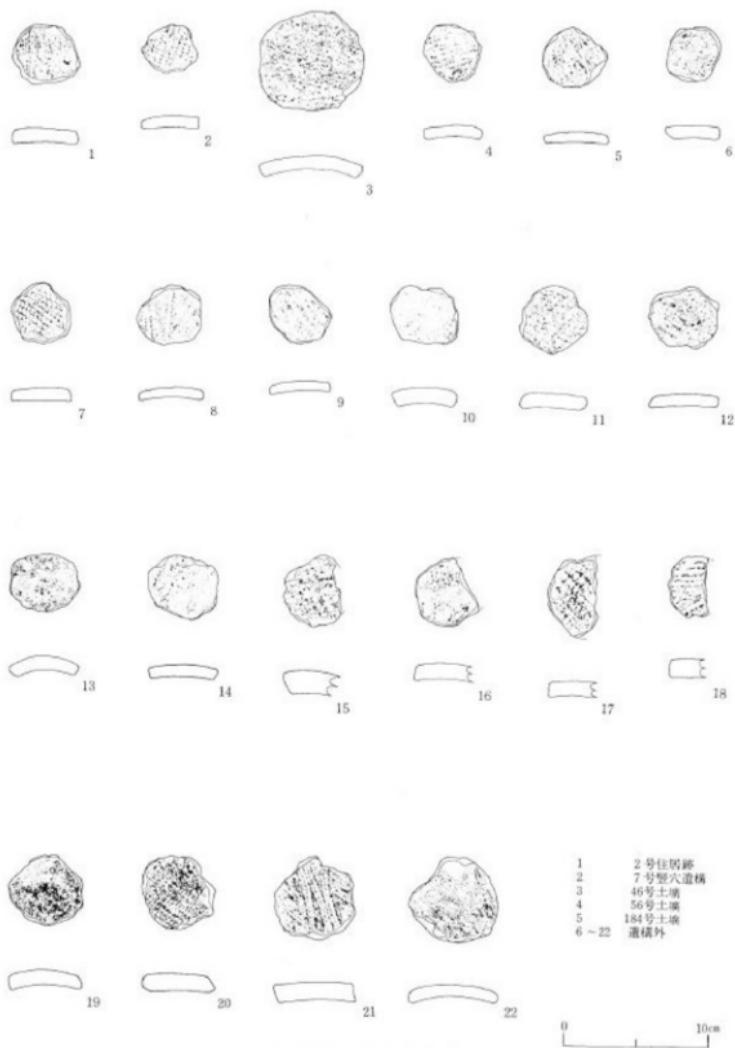
186

187

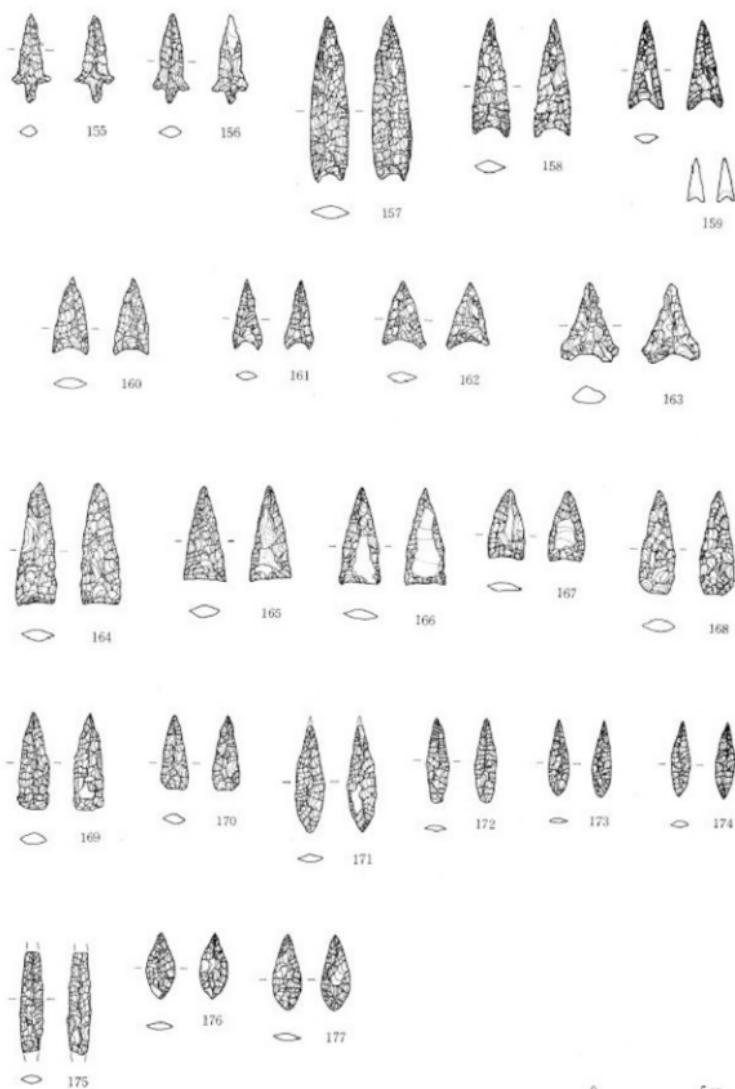


188

第87图 造桥外出土土器

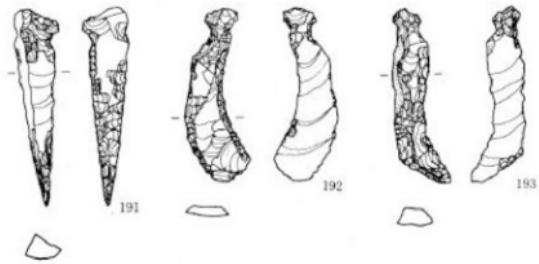
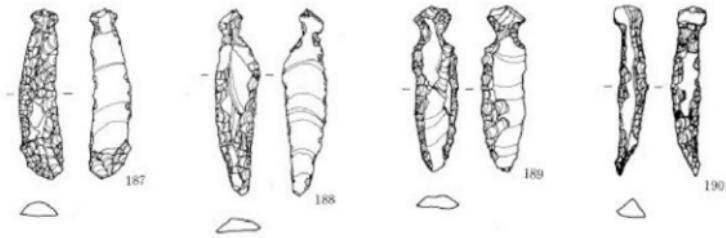
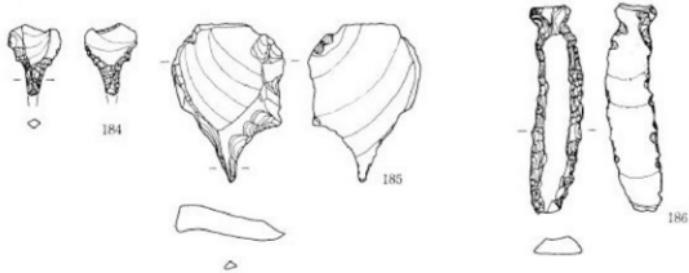
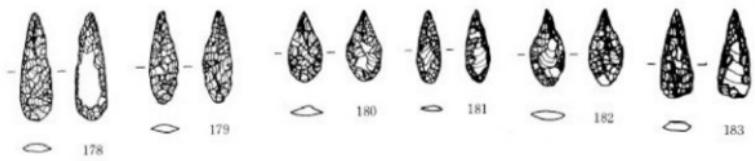


第88図 再利用土製品

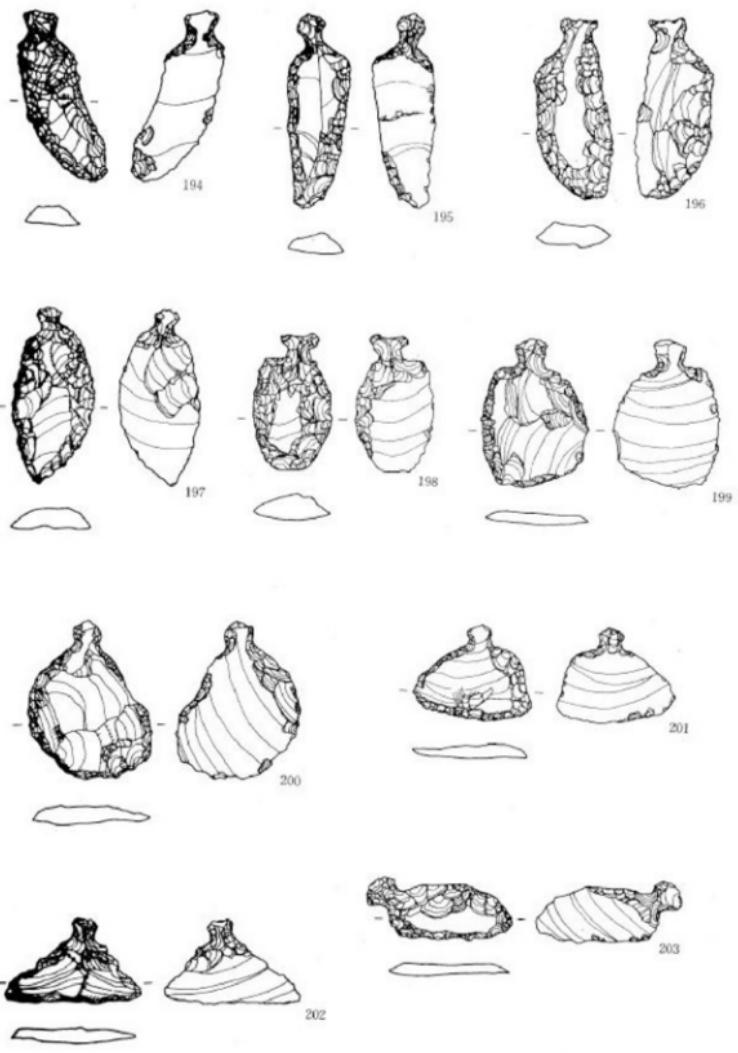


第89圖 遺構外出土石器



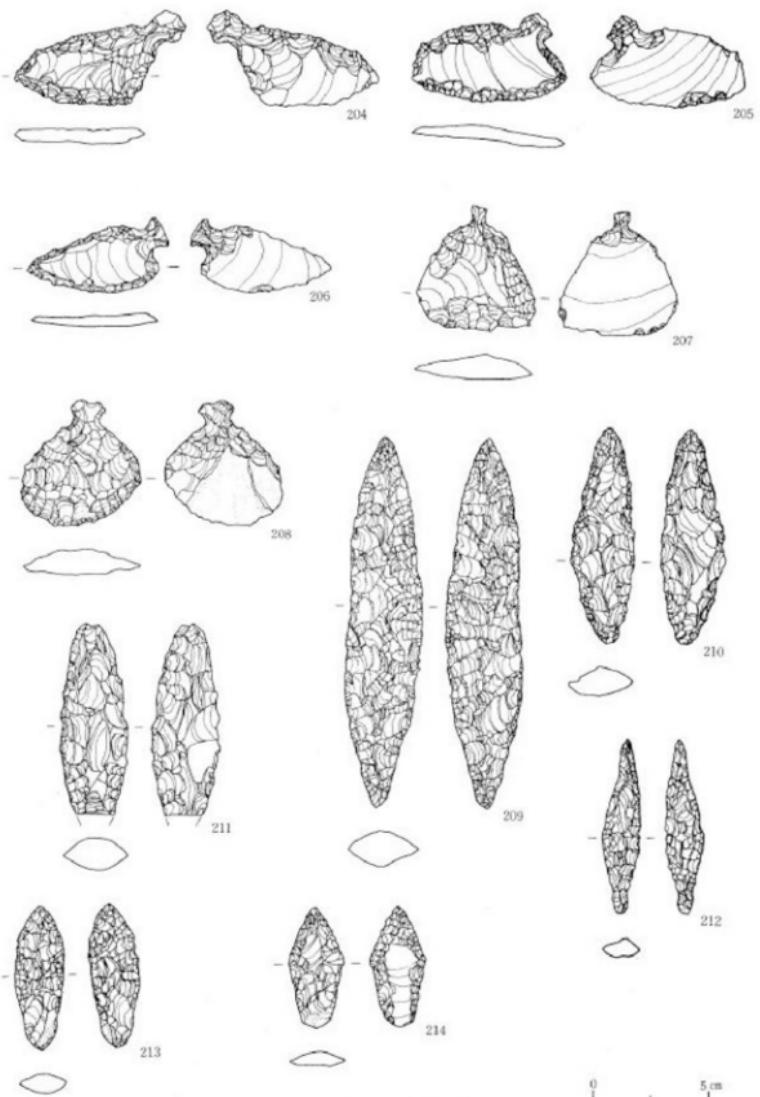


第90図 遺構外出土石器



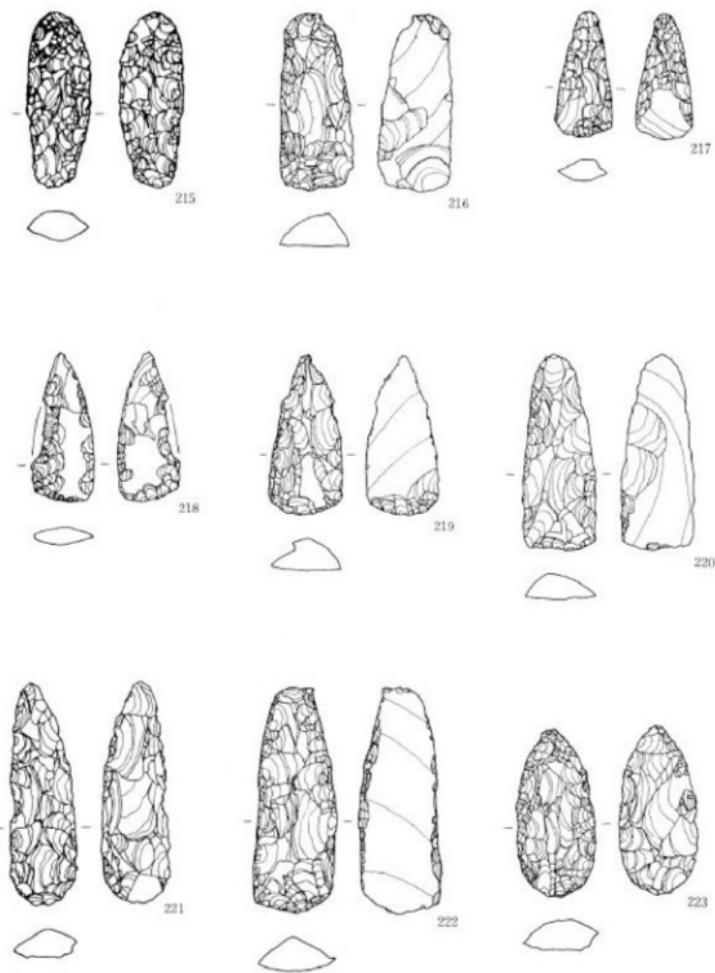
第91図 遺構出土石器





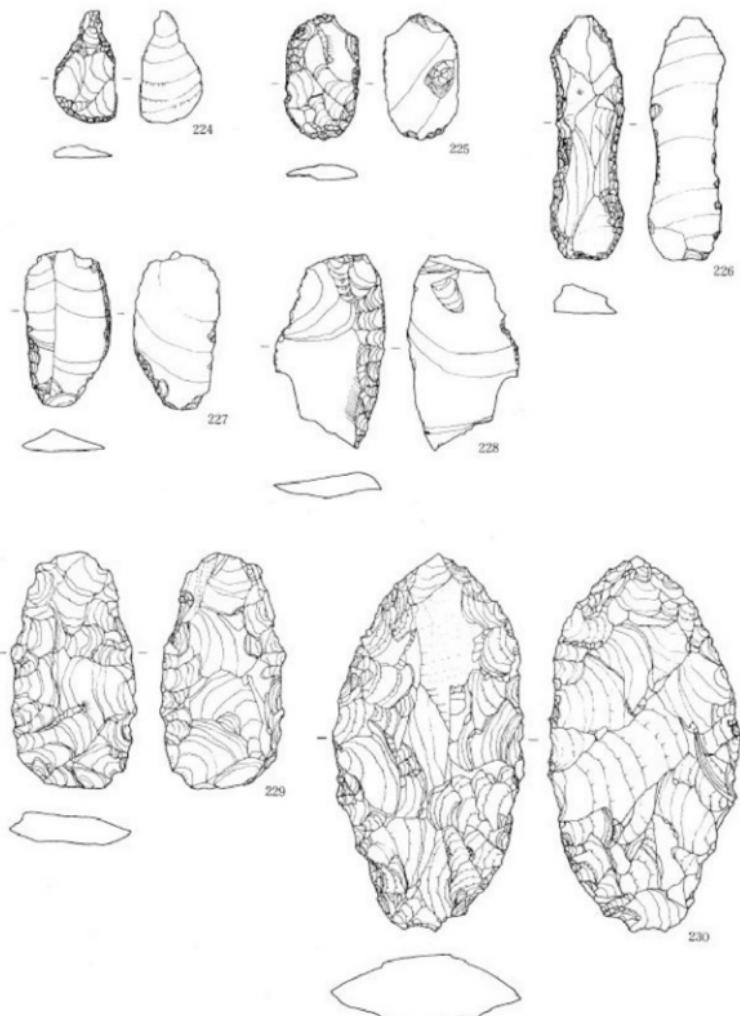
第92図 造構外出土石器

0 5 cm



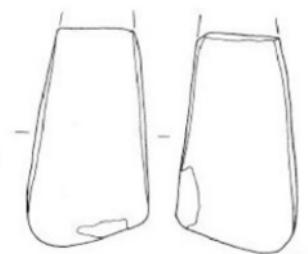
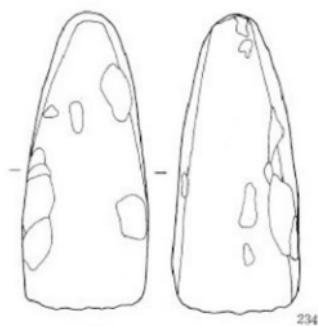
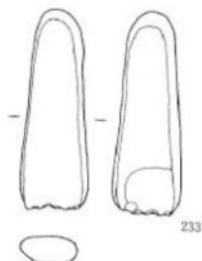
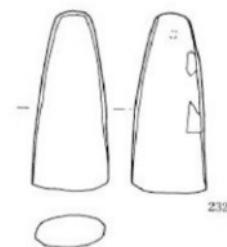
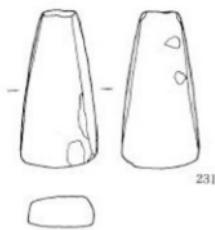
0 5 cm

第93図 遺構外出土石器



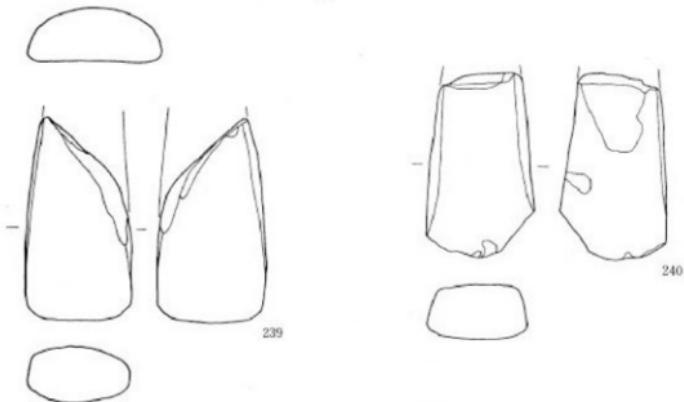
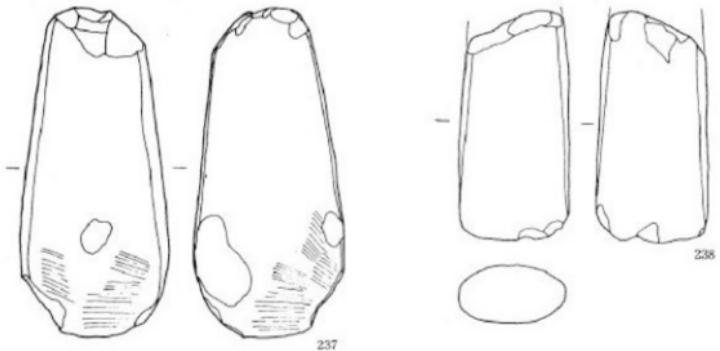
第94圖 遺構外出土石器

0 5 cm



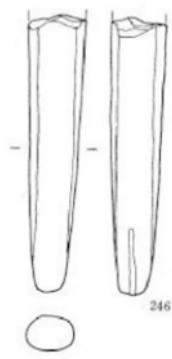
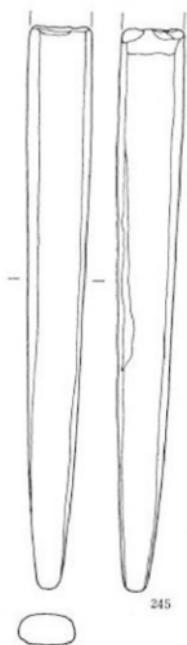
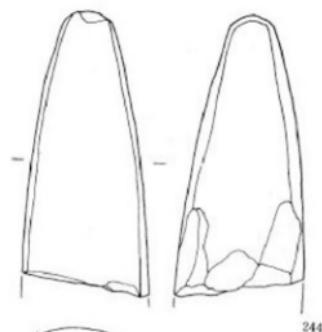
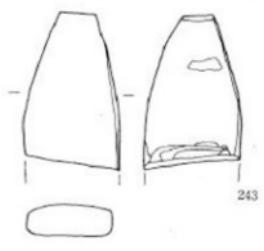
0 5 cm

第95図 遺構外出土石器



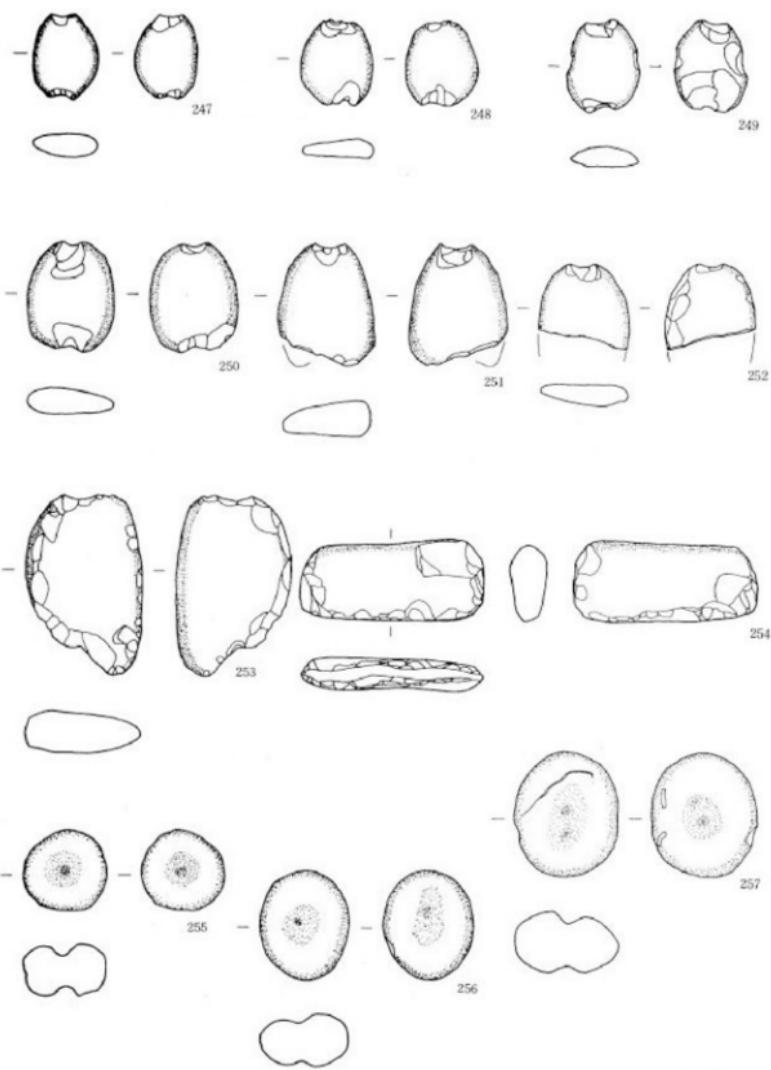
第96圖 造構外出土石器





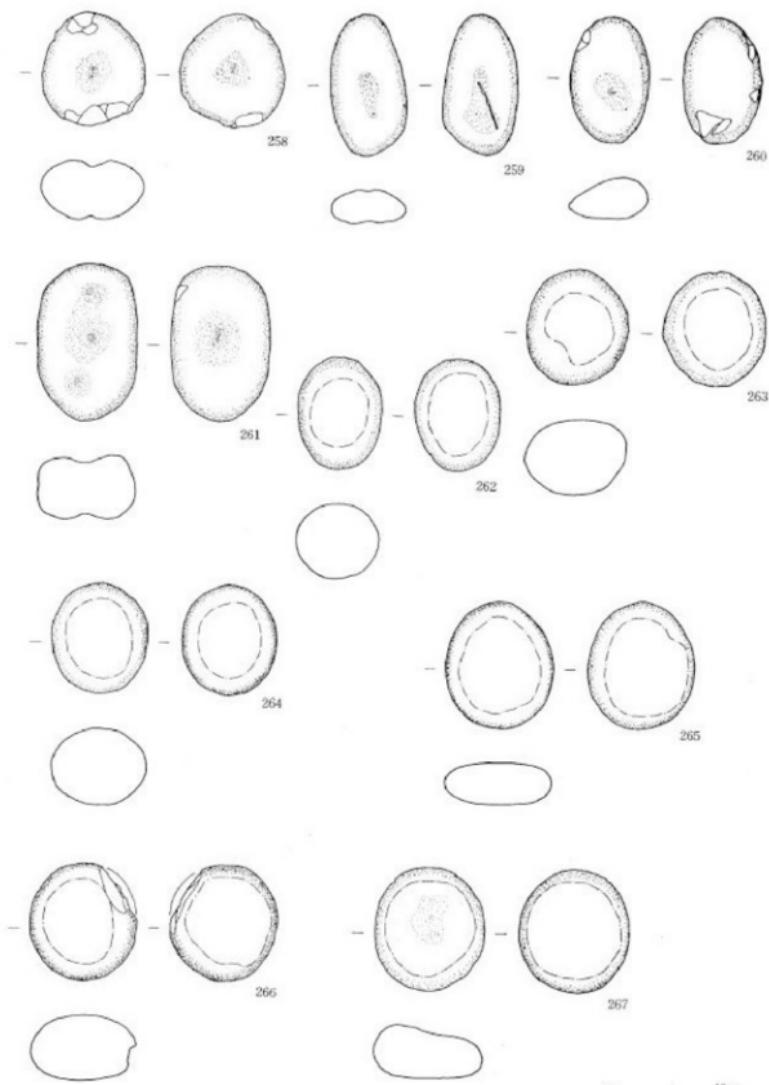
0 5 cm

第97圖 遺構外出土石器



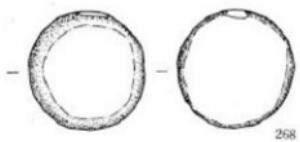
第98図 遺構外出土石器

0 10cm

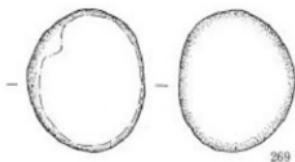


第99図 遺構外出土石器

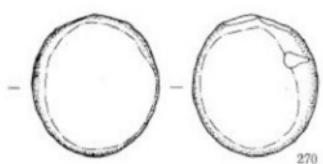
0 10cm



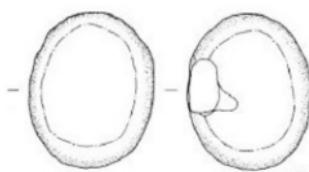
268



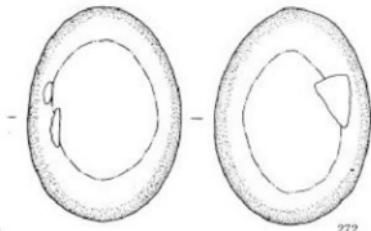
269



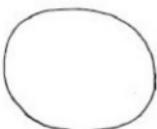
270



271

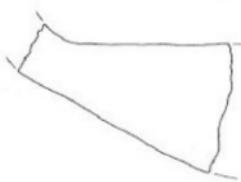
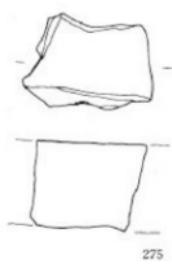
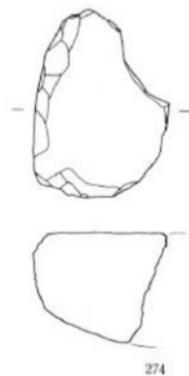
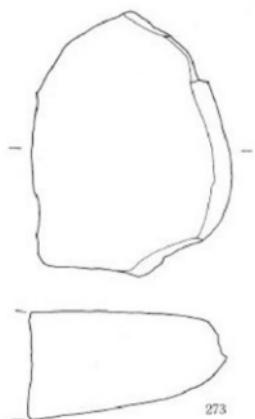


272



第100図 遺構外出土石器





第101図 遺構外出土石器



削器（第94図226～228）

3点出土している。側縁に調整を施して刃部を作り出している。石質は全て硬質頁岩である。

両面加工石器（第94図229、230）

2点出土している。大型の削片を利用し、両面に調整を施すものである。石質はいざれも硬質頁岩である。

磨製石斧（第95～97図231～244）

14点出土している。基部及び刃部が欠損するものが多く、石質は巖灰岩である。

石劍（第97図245、246）

2点出土している。いざれも把部が欠損している。石質は粘板岩である。

石鎌（第98図247～253）

7点出土している。ほぼ扁平な自然礫の両端に抉りを入れるもので、平面形は橢円形を呈する。

半円状偏平打製石器（第98図254）

1点出土している。ほぼ扁平な自然礫の一側縁に両面加工を施して刃部を作り出している。

くぼみ石（第98、99図255～261）

7点出土している。円形または橢円形を呈する自然礫の両面に1～2カ所くぼみが認められるものである。

磨石（第99、100図262～272）

11点出土している。丸みのある自然礫の両面が磨れているものである。

石皿（第101図273～276）

4点出土している。円形または橢円形の河原石を使用したもので、縁をもつものもある。

まとめ

地ノ内遺跡は、旭川左岸の標高約20mの河岸段丘上に立地する。遺跡の南側は木田の耕地整理の際に削平されたり、北側約3,000m²の調査となった。

調査の結果、堅穴住居跡20軒、堅穴造構9基、土壙241基が確認され、土器・土製品・石器等の遺物がコンテナ約95箱出土した。

堅穴住居跡は20軒確認され、時期は住居跡の形態及び出土遺物から縄文時代前期9軒（1、3、11～17号住居跡）、縄文時代中期9軒（2、4～10、20号住居跡）に分けることができる。しかし、18、19号住居跡については出土遺物が少ないとや住居跡の形態を明確に把握することができず、時期を特定することができなかった。

縄文時代前期の住居跡は、平面が橢円形を呈し、規模は中・大型のものである。主柱穴は明確に認められるものはない。炉は全て地床炉であるが、13、14、15号住居跡は把握できなかった。時期については、出土遺物が少なく特定することができないが、第1群土器が出土している前期中葉から後葉にかけてと考えられる。秋田市内の当該期の遺跡は、「児桜貝塚」や御所野丘陵部遺跡群「坂ノ上B遺跡」、同「狸崎B遺跡」、同「地蔵田A遺跡」などがあげられる。なお、御所野丘陵部遺跡群の堅穴住居跡は前期後葉（大木6式期）からの出現で、「下堤D遺跡」と「下堤F遺跡」で各々1軒ずつ認められる。また、県内の当該期の遺跡は、広場のまわりに大型住居跡が放射状に配置されていた仙北部協和町「上ノ山II遺跡」や、大型住居跡が確認されている能代市「杉沢台遺跡」などがあげられる。

縄文時代中期の住居跡は、平面が円形を基調とし、規模は小・中型のものである。主柱穴は明確に認められるものはない。炉は全ていわゆる複式炉であるが、9号住居跡は確認できなかった。複式炉の形態は、①土器埋設部+石組部（2、8、20号住居跡）、②土器埋設部+石組部+掘り込み部（4号住居跡）、③石組部+掘り込み部（5、6、7、10号住居跡）に分けることができる。住居の切り合い関係は、4号が7号を、6号が5号を、6号が10号

を、8号が9号を切っており、炉は③から②へ、③から④への変遷が認められる。時期については、4号住居跡炉埋設土器やそれぞれの住居跡より第II群土器2類が出土していることから、中期後葉の大木9式期と考えられる。秋田市内の当該期の遺跡は、御所野丘陵部遺跡群「湯ノ沢B遺跡」、同「湯ノ沢D遺跡」、同「地蔵田A遺跡」などがあげられ、御所野丘陵部遺跡群では大木10式期を含めた中期後葉の住居跡が約240軒確認されているが、大木9式期の住居跡は3遺跡で9軒（湯ノ沢B遺跡4軒、湯ノ沢D遺跡3軒、地蔵田A遺跡2軒）である。また、複式炉で石組部+掘り込み部の形態をなす石組式炉は「湯ノ沢D遺跡」の2軒のみであり、確認例は少ない。この形態の炉をもつ住居跡は、県内では鹿角市「天戸森遺跡」、能代市「鳥野遺跡」、大館市「山王街道跡」などで確認されているが数量は少ない。また仙北郡協和町「上ノ山I遺跡」のS I 37B堅穴住居跡の炉や北秋田郡比内町「本道端遺跡」の18、21、23号住居跡は大木10式期ではあるが、石圓部の外側（壁際）に掘り込みをもつと報告されており、類似する形態と考えられる。

堅穴遺構は9基確認された。平面は方形、円形、橢円形、不整長方形、不整形を呈し、橢円形を呈するものが多いが、性格は不明である。なお、1号堅穴遺構は方形を呈し、主柱穴が4個認められる。時期については、出土遺物から3、4、7、9号堅穴遺構が縄文時代前期中葉から後葉、1、2号堅穴遺構が縄文時代中期後葉、6号堅穴遺構が弥生時代前期である。

土壤は241基確認された。形態は断面形が袋状あるいはフラスコ状を呈するものと、平面が円形または橢円形を呈して比較的浅いものに分けられる。土壤は調査区全体に分布しているが、断面形が袋状あるいはフラスコ状を呈するものは調査区中央部と西側に集中し、調査区中央部の土壤はかなりの切り合いが認められる。時期については、出土遺物が少なくて明確にすることはできないが、断面形が袋状あるいはフラスコ状を呈するものは出土遺物から縄文時代前期の堅穴住居跡に伴うものと考えられる。なお、縄文時代前期以外のものとして、3、6、13、196号から縄文時代中期後葉の土器が、16、186号土壤から縄文時代後葉の土器が、1号土壤から弥生時代前期の土器が出土している。

土器は施文様により6群に大別し、さらに類に細別した。第I群土器は縄文時代前期の土器で、「児桜貝塚」や「御所野丘陵部遺跡群」などで出土している。1類は不整撲糸文を施すもので、大木2a式土器、2類は綾格文を施すもので大木2式土器、3類は羽状縄文を施すもので大木2a・b式土器にみられるものである。4類は沈線で文様を作り出すもので大木4式土器と考えられる。5類の口縁部に撲糸圧痕や單輪轍条体圧痕を平行して施すものや8類の木目状撲糸文を施すものは円筒下層b式土器にみられ、6類の網目状撲糸文を施すものは円筒下層b式期から認められる。これらの土器は前期中葉から後葉にかけてのものである。第II群土器は縄文時代中期の土器である。1類は渦巻文を施すもので大木8a式土器である。9類は幅の狭い渦済滑帯が縱位方向に展開するもので、大木9式土器である。第III群土器は後期の土器である。数条の沈線により文様を作り出すもので、十輪内I式土器である。第IV群土器は縄文時代晩期の土器である。1、2類は大洞B式土器で、2類はBC式に入るものかもしれない。3類は大洞C'式土器である。第V群土器は須恵器で、平安時代のものである。第VI～VII群土器は「御所野丘陵部遺跡群」で類例が認められる。第VIII群土器は中世陶器で、珠洲系陶器である。他に陶磁器（青磁碗、他）も數点出土しているが、小破片で図示できなかった。

地ノ内遺跡は、河川面からの比高差が7～8mの河岸段丘上に立地し、縄文時代前期中葉から後葉及び縄文時代中期後葉を主体とする集落跡であることが判明した。本市では確認例の少ない時期の調査であり、当該期の集落のあり方や遺跡の立地を知るうえで参考となる遺跡であり、貴重な成果を得たと考えている。そして、それぞれの時期における台地の利用状況や、住居及び土壤の配置関係などについては、今後周辺遺跡等の調査によって解明していくかなければならないと考えている。

- 註1 「鬼桜貝塚」 秋田考古学協会 1965年9月
- 註2 「小阿地下堤跡発掘調査報告書」 秋田市教育委員会 1996年3月
- 註3 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 沼崎B遺跡」 秋田市教育委員会 1993年3月
- 註4 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地蔵田A遺跡」 秋田市教育委員会 1994年3月
- 註5 「秋田市下堤D遺跡発掘調査報告書」 秋田市教育委員会 1982年3月
- 註6 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤F遺跡」 秋田市教育委員会 1985年3月
- 註7 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II 上ノ山I遺跡」 秋田県文化財調査報告書第166集 秋田県教育委員会 1988年3月
- 註8 「杉沢台遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第83集 秋田県教育委員会 1981年3月
- 註9 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 濱ノ沢B遺跡」 秋田市教育委員会 1983年3月
- 註10 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 濱ノ沢D遺跡」 秋田市教育委員会 1985年3月
- 註11 「住居の炉」 目黒吉明 繩文時代の研究8文化・社会 雄山閣出版社株式会社 1982年5月
- 註12 「天戸森遺跡発掘調査報告書」 鹿角市教育委員会 1984年3月
- 「県道山・輪輪線関連跡発掘調査報告書II 一天戸森遺跡」 秋田県文化財調査報告書第248集 秋田県教育委員会 1994年3月
- 註13 「鳥屋遺跡第2～6次発掘調査概報」 秋田県山本部二ツ井町教育委員会 1992年～1995年
- 「鳥屋遺跡について」 和泉明一 よねしろ考古学研究会 1993年11月
- 註14 「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V 山王岱遺跡」 秋田県文化財調査報告書第221集 秋田県教育委員会 1992年3月
- 註15 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II 上ノ山I遺跡」 秋田県文化財調査報告書第166集 秋田県教育委員会 1988年3月
- 註16 「本道堀遺跡」 北秋田郡比内町教育委員会 1986年3月

参考文献

- 秋田県教育委員会：「七曲台遺跡群発掘調査報告書 石坂台I遺跡」 秋田県文化財調査報告書第125集 1985年3月
- 秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書I 石坂台II遺跡」 秋田県文化財調査報告書第150集 1986年11月
- 秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書IV 一下田遺跡」 秋田県文化財調査報告書第189集 1990年3月
- 秋田県教育委員会：「五百刈田遺跡発掘調査報告書 一界道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査」 秋田県文化財調査報告書第194集 秋田県教育委員会 1990年3月
- 秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX 一蟹子沢遺跡」 秋田県文化財調査報告書第261集 1996年3月
- 秋田市教育委員会：「蟹子沢遺跡 一宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書」 1995年3月
- 秋田市教育委員会：「下タ野遺跡発掘調査報告書」 1979年11月
- 秋田市教育委員会：「後城遺跡発掘調査報告書」 1981年3月
- 岩手県立博物館：「岩手の土器 一県内出土資料の集成」 1982年3月
- 中村良幸：「複式炉について」 考古風土記第7号 1982年4月
- 南外村教育委員会：「大堀窯跡発掘調査報告書」 1981年7月
- 福島県教育委員会：「第三期山村振興事業対策事業木原本谷地区農道改良工事関連遺跡発掘調査報告 宇輪台遺跡」 福島県教育委員会 1993年5月



遠跡遠景（北東→）



調査前（南東→）

図版 1



調査区全景（南東→）



調査区全景（南西→）

図版 2



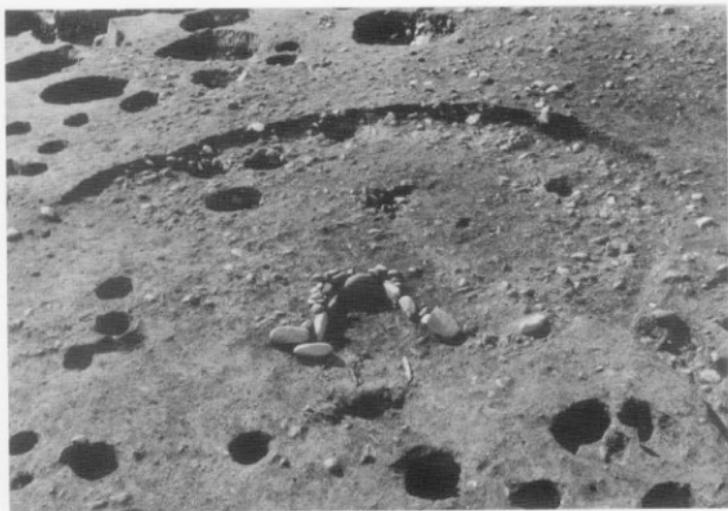
1、2号住居跡（南東→）



3号住居跡（南東→）



4号住居跡（北東→）



5号住居跡（東→）

図版4



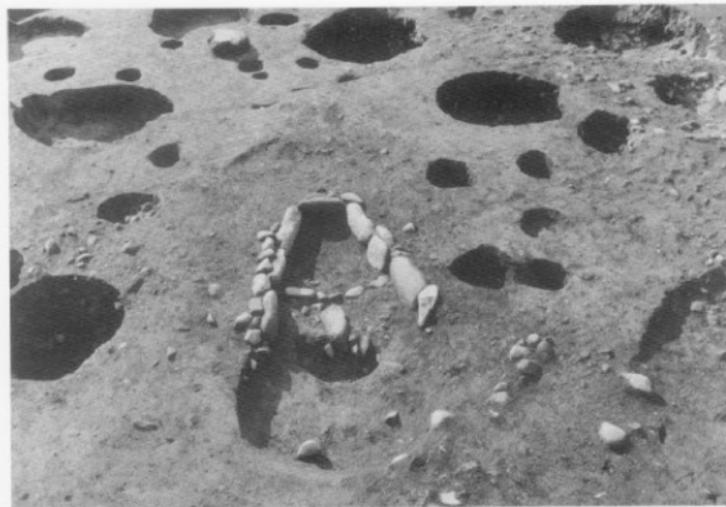
6号住居跡（東→）



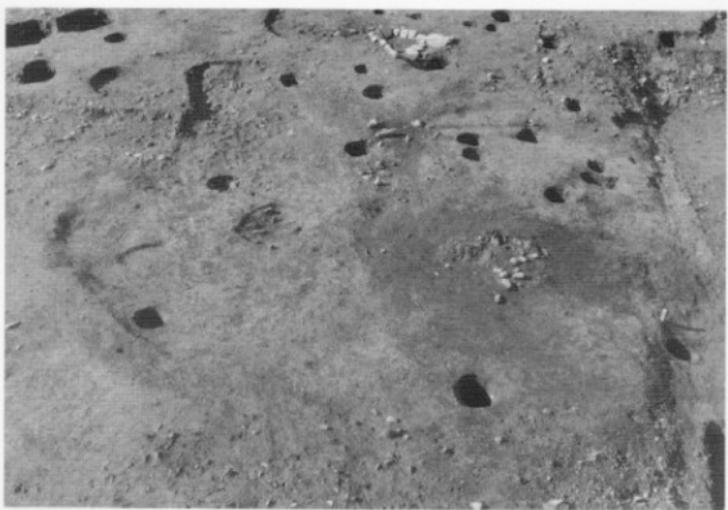
7号住居跡（東→）



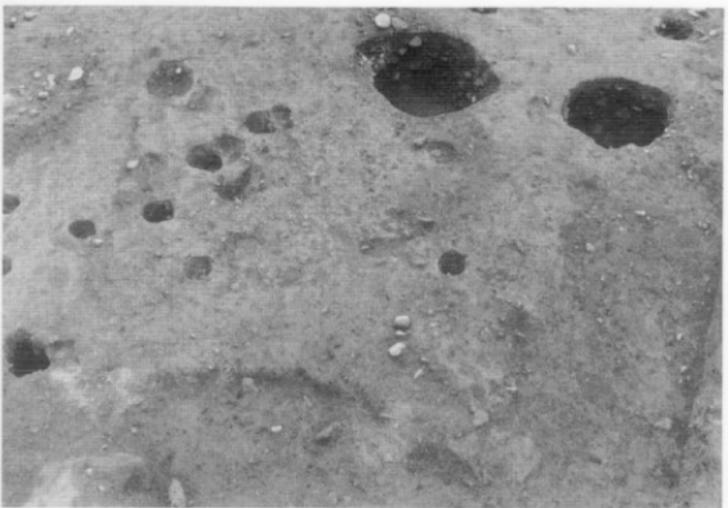
8、9号住居跡（北→）



10号住居跡（東→）



11号住居跡（南東→）



12号住居跡（北→）

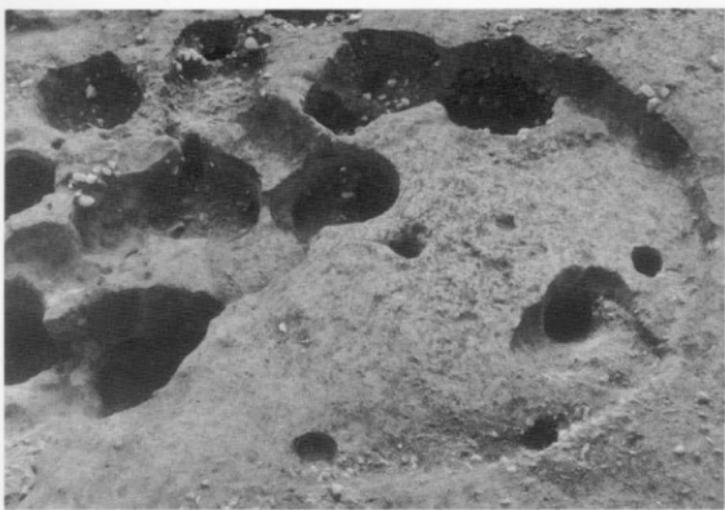


13号住居跡（東→）



14号住居跡（南東→）

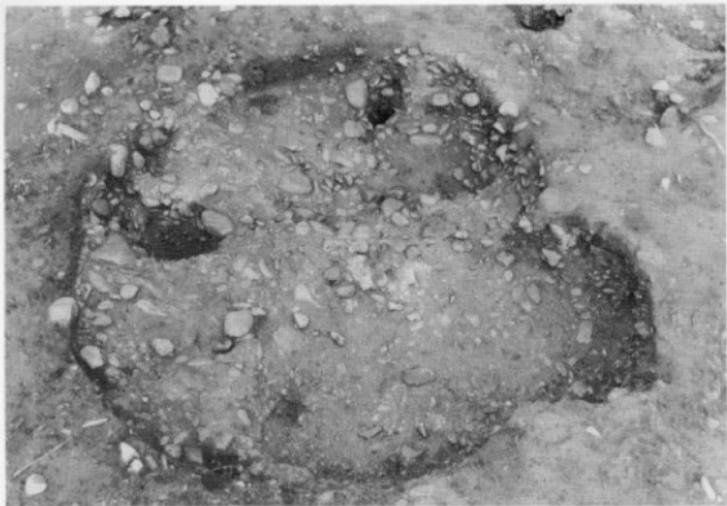
図版 8



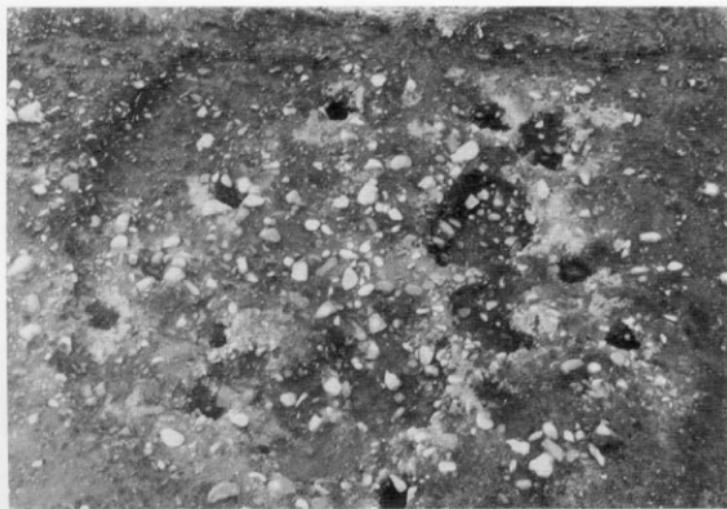
15号住居跡（北東→）



17号住居跡（南→）



18号住居跡（南→）



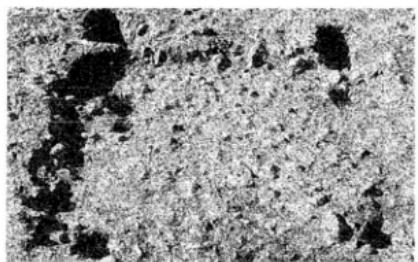
19号住居跡（南東→）



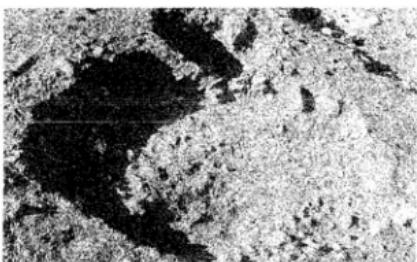
2号住居跡炉（北東→）



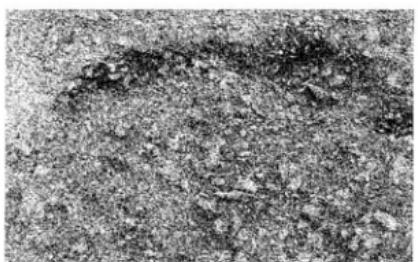
20号住居跡炉（北東→）



1号竪穴遺構（南西→）



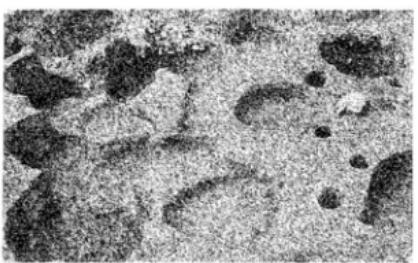
2号竪穴遺構（南→）



4号竪穴遺構（北東→）

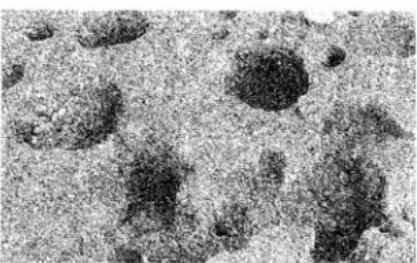


9号竪穴遺構（南→）



39、58、60号土壤周辺（南→）

図版11



40、44、45、87号土壤周辺（北西→）



48号土壤 (北→)



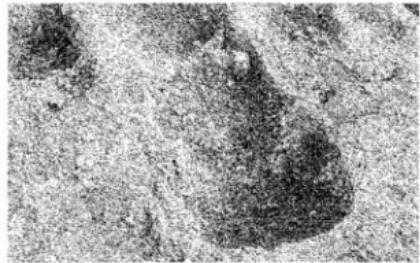
59、60号土壤 (北東→)



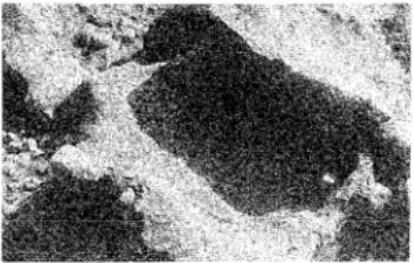
62号土壤 (東→)



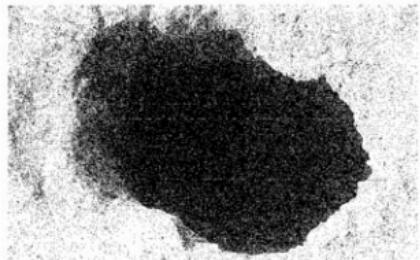
56、68、69号土壤周辺 (北東→)



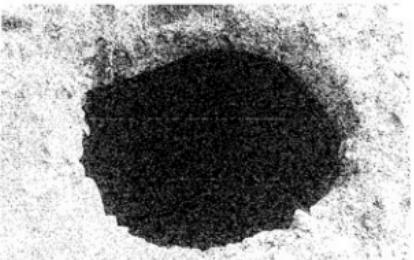
76、77号土壤 (北西→)



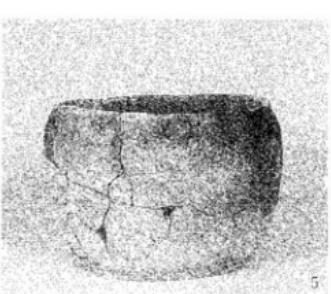
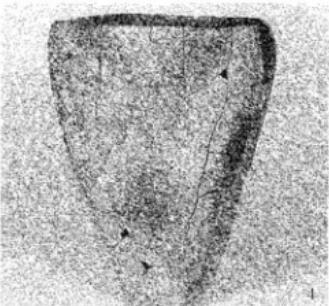
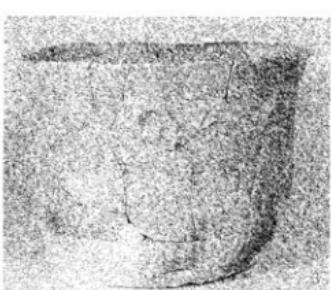
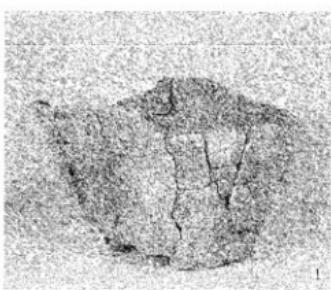
82号土壤 (北西→)



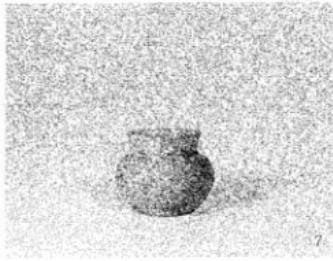
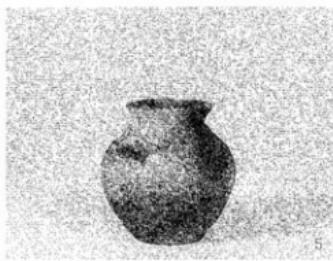
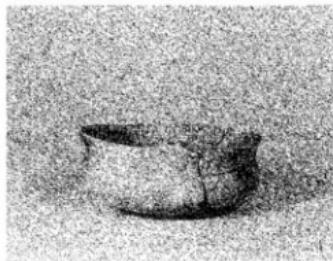
193号土壤 (東→)



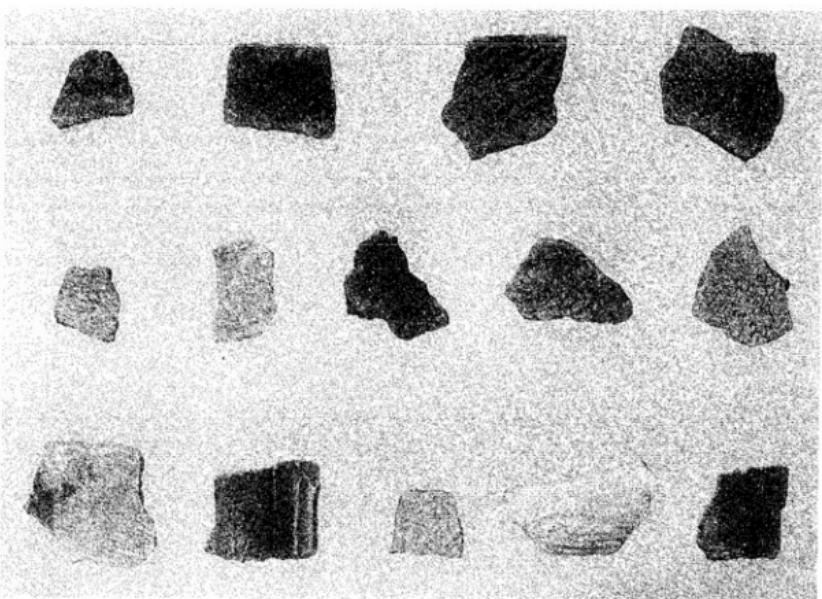
200号土壤 (北→)



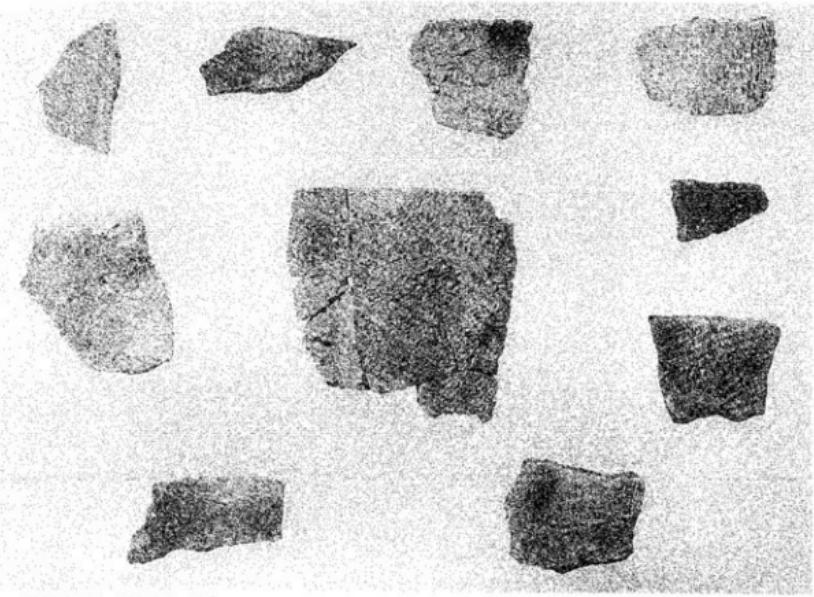
1 2号住居跡
2~4 4号住居跡
5 5号住居跡
6 8号住居跡



1 8号住居跡
2 20号住居跡
3～7 遺構外

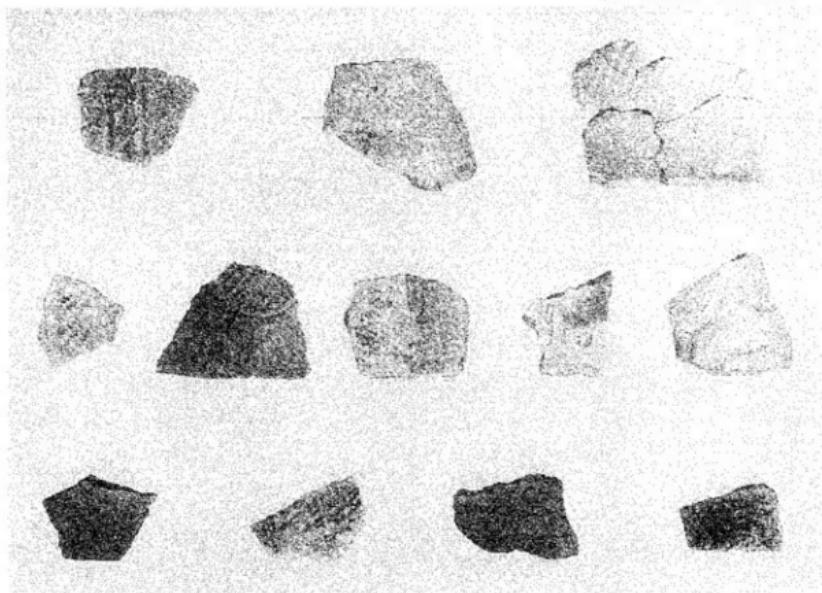


遺構内出土土器（9～22）

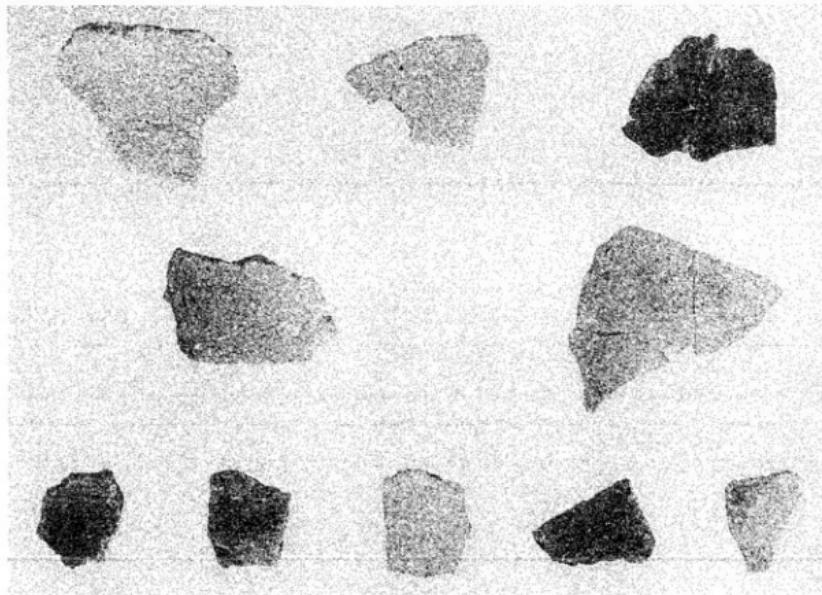


遺構内出土土器（23～32）

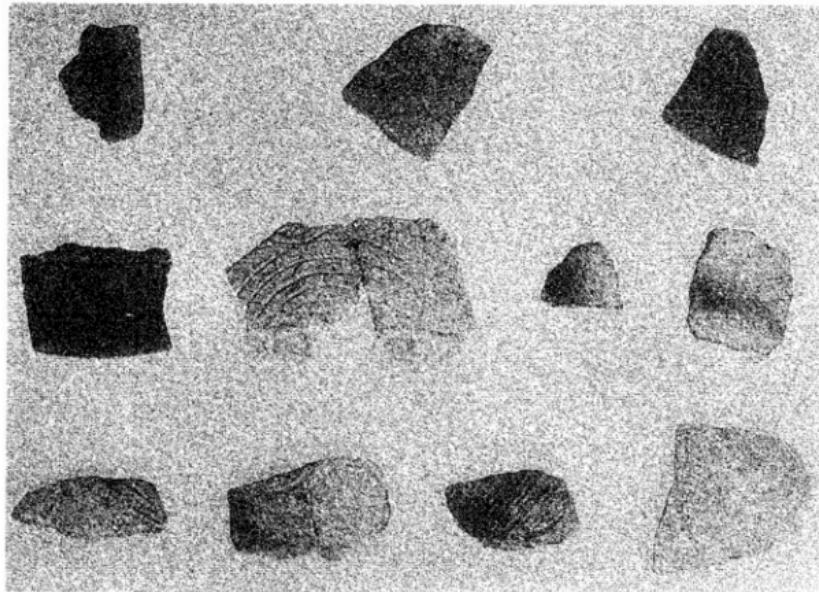
遺構內出土土器 (43~54)



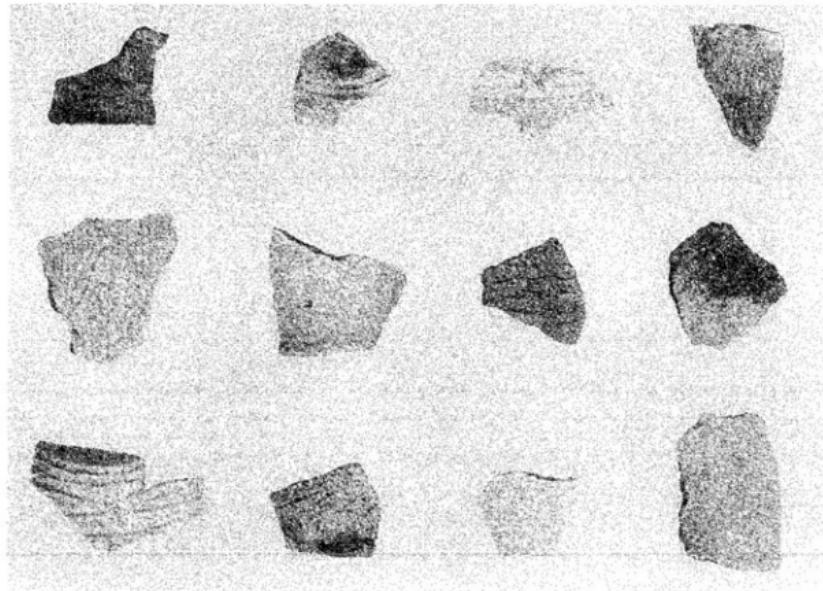
遺構內出土土器 (33~42)

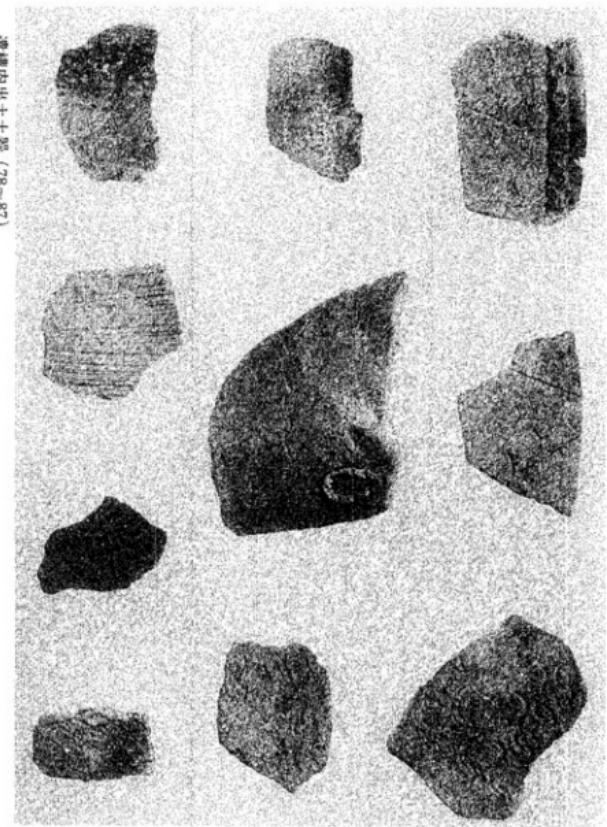


图版17
道耕内出土土器 (67~77)

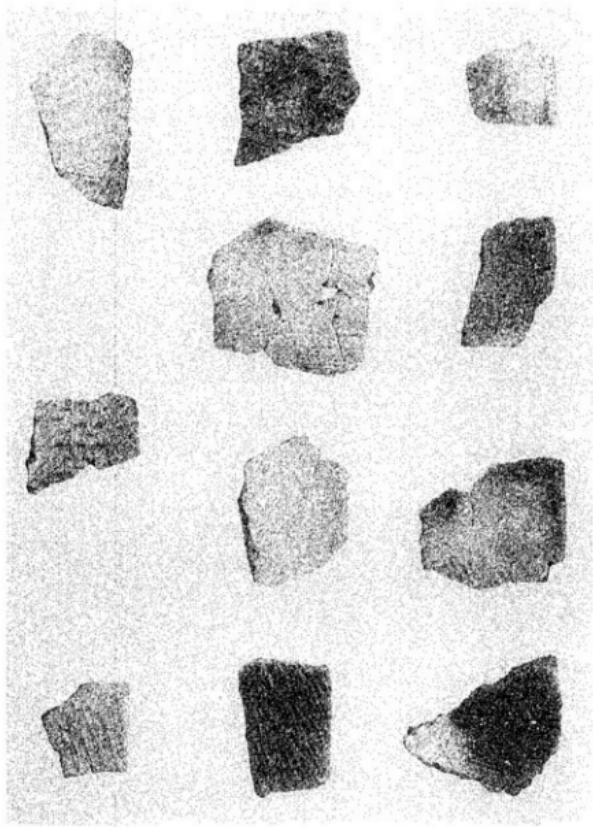


道耕内出土土器 (55~66)

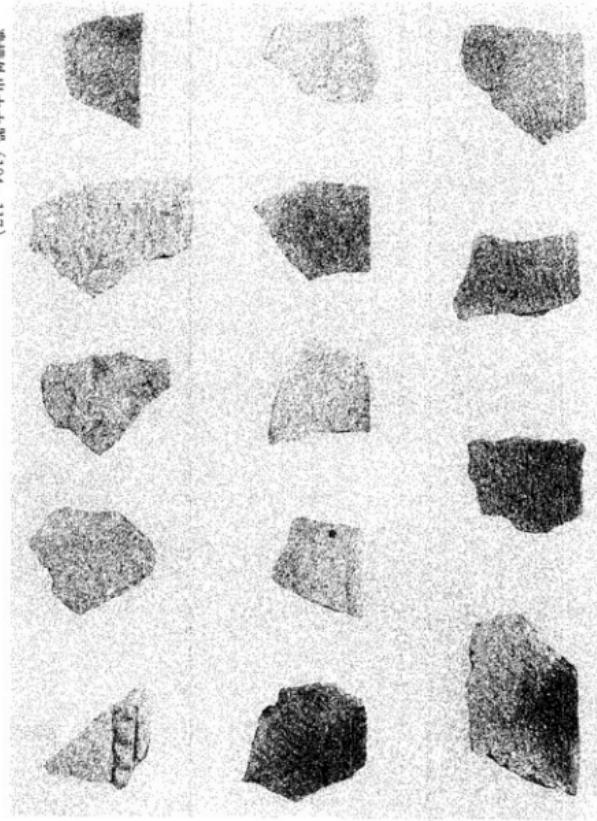




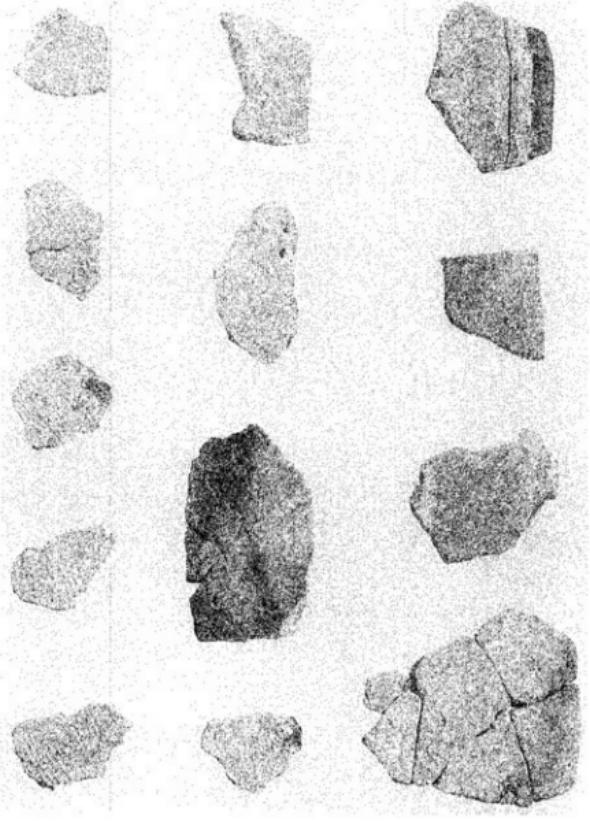
遺構内出土土器 (78~87)



遺構内出土土器 (88~98)



遺構外出土土器 (104~117)



遺構外出土土器 (118~130)

通模外出土土器 (131~142)

